

都城市所在

よめさか

嫁坂遺跡 II

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2019

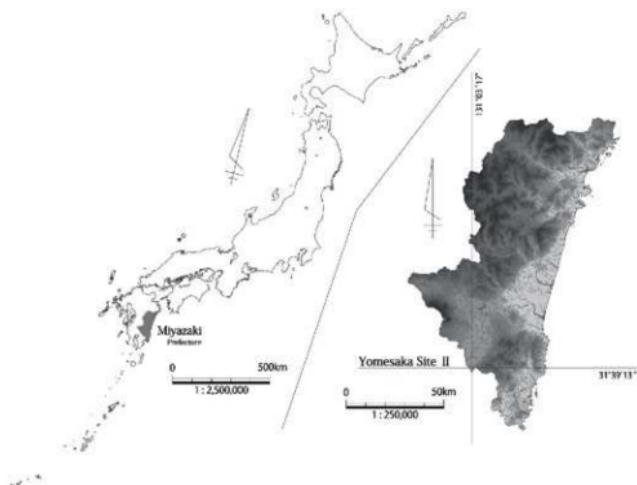
宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

よめ さか
嫁坂遺跡 II

Yomesaka Site II

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 1



2019

宮崎県埋蔵文化財センター

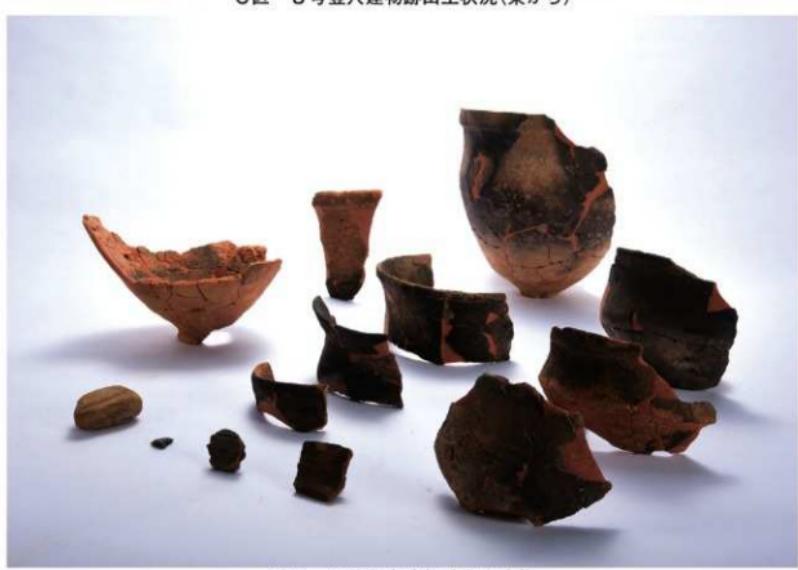


嫁坂遺跡から霧島連山を望む

霧島山麓には広大な都城盆地が広がり、嫁坂遺跡はその南縁に位置する。遺跡は平坦な丘陵上に立地し、その周辺には狭い谷がいくつも入り込む。その南の対岸には上高遺跡が位置する。画面を南北に縱断するのは都城志布志道路である。古より志布志湾岸域との文物等文化交流が盛んになされた土地である。



C区 8号竪穴建物跡出土状況(東から)



C区 8号竪穴建物跡出土遺物

序

宮崎県教育委員会では、地域高規格道路「都城志布志道路」の一部となる県道飯野松山都城線金御岳工区道路整備工事に伴い、平成28年度及び平成29年度に都城市梅北町に所在する嫁坂遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

今回報告する嫁坂遺跡では、縄文時代早期に属する集石遺構が検出されたほか、縄文時代後期～晩期の遺構や遺物・古代～中世の溝や道路状遺構など、複数の時代の遺構・遺物が確認されました。なかでも、縄文時代後期～晩期に関しては、多くの遺物が出土した竪穴建物跡が検出され、都城盆地周辺を中心局的に分布する特徴的な土器が出土するなど、当地域における人々の営みの一端が明らかとなりました。

今回の調査で得られた成果は、梅北地区をはじめとする都城盆地南部の歴史を解明する上で、重要な位置を占めるものと考えられます。

また、本書や出土遺物等が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 長峯勝志

例　　言

- 1 本書は、県道飯野松山都城線（志布志道路）金御岳工区道路整備工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市梅北町に所在する嫁坂遺跡の発掘報告書である。
- 2 発掘調査は都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。第一次調査は平成28年5月11日から平成29年2月27日までの157日間、第二次調査は平成29年12月6日から平成30年3月5日までの48日間の二ヵ年度にわたり実施した。
- 3 発掘調査は、甲斐尚和、和田理啓、徳田尚文、早瀬航が担当した。現地調査における図面作成及び写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 調査に際しては、世界測地系に準拠した10mグリッドを設定した。この座標グリッドにアルファベットと整数で名称を与え、この区画を基準として遺構等の図化作業を行った。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、甲斐尚和が整理作業員の補助を得て行った。
- 6 グリッド杭設置に伴う測量業務、空中写真撮影、自然科学分析（放射性炭素年代測定、石材産地同定）、石器実測は、次の業者に委託した。
 - ・ 测量業務委託　（株）旭総合コンサルタント
 - ・ 空中写真撮影　（有）スカイサーベイ九州
 - ・ 自然科学分析　（株）古環境研究センター
 - ・ 石器実測委託　（株）バスコ
- 7 本書で使用した第1図「嫁坂遺跡および周辺遺跡位置図」は、国土地理院発行の電子地形図2万5000分の1『都城』『末吉』をもとに作成した。
- 8 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』を参考にした。
- 9 本書中の図面の方位は、座標北（G.N.）を示している。標高は海拔絶対高である。また、全体図で使用した座標は世界測地系に準拠している。
- 10 本書の執筆は、第1章・第1節を今塙屋毅行が、第II章を松林豊樹が、その他の執筆・編集を甲斐尚和が行った。尚、第V章において、章立てと図表の番号以外の報告内容については、古環境研究センターの報告によるものである。
- 11 石材の分類は、赤崎広志の監修のもと、甲斐尚和が行った。
- 12 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

SA：竪穴建物跡　　SC：土坑　　SE：溝状遺構　　SG：道路状遺構

SH：単独の小穴　　SI：集石遺構

本文目次

第Ⅰ章はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
第1節 遺跡の地理的環境	2
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の概要	
第1節 調査の経過	5
第2節 調査の方法	7
第3節 基本層序と堆積状況	9
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 縄文時代早期の遺構と遺物	
1 C区第X層上面の遺構と遺物	12
2 C区第IX層上面の遺構と遺物	18
第2節 縄文時代前期～中期の遺構	21
第3節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物	
1 A区の遺構と遺物	23
2 B区の遺構と遺物	33
3 C区の遺構と遺物	46
4 D・E区の遺物	79
第4節 弥生時代の遺物	85
第5節 古代～中世の遺構と遺物	
1 遺構	85
2 遺物	86
第6節 その他の遺物	87
第Ⅴ章 自然科学分析	
第1節 自然科学分析の概要	106
第2節 放射性炭素年代測定	106
第3節 螢光X線分析	108
第VI章 総括	113

挿 図 目 次

第1図 嫁板遺跡周辺の主要な遺跡分布図	4	第40図 8号堅穴建物跡出土遺物実測図(4)	52
第2図 調査区配置図	8	第41図 9号堅穴建物跡実測図及び遺物出土状況図	54
第3図 土層断面図(1)	10	第42図 9号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)	55
第4図 土層断面図(2)	11	第43図 9号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)	56
第5図 C区第X層上面遺構分布図	13	第44図 9号堅穴建物跡出土遺物実測図(3)	57
第6図 4・6～9号集石遺構実測図	15	第45図 9号堅穴建物跡出土遺物実測図(4)	58
第7図 10・11・13・14号集石遺構実測図	16	第46図 10号堅穴建物跡、25号土坑及び出土遺物実測図	61
第8図 C区第X層上面遺物実測図	17	第47図 45・27・42号土坑及び出土遺物実測図	62
第9図 C区第IV層上面遺構分布図	19	第48図 29・31・32・43・44号土坑実測図	63
第10図 2・3・5・12号集石遺構実測図	20	第49図 C区縄文時代後期～晩期土器実測図(1)	67
第11図 C区第VI層上面遺物実測図	20	第50図 C区縄文時代後期～晩期土器実測図(2)	68
第12図 C区縄文時代前期～中期遺構分布図	21	第51図 C区縄文時代後期～晩期土器実測図(3)	69
第13図 53号土坑、1号集石遺構実測図	22	第52図 C区縄文時代後期～晩期土器実測図(4)	70
第14図 A区縄文時代後期～晩期遺構分布図	24	第53図 C区縄文時代後期～晩期土器実測図(5)	71
第15図 1号堅穴建物跡実測図	25	第54図 C区縄文時代後期～晩期土器実測図(6)	72
第16図 1号堅穴建物跡出土遺物実測図	26	第55図 C区縄文時代後期～晩期土器実測図(7)	73
第17図 19号土坑及び出土遺物実測図	26	第56図 C区縄文時代後期～晩期石器実測図(1)	74
第18図 17・24号土坑、2号溝状遺構実測図	27	第57図 C区縄文時代後期～晩期石器実測図(2)	75
第19図 A区縄文時代後期～晩期土器実測図(1)	28	第58図 C区縄文時代後期～晩期石器実測図(3)	76
第20図 A区縄文時代後期～晩期土器実測図(2)	29	第59図 C区縄文時代後期～晩期石器実測図(4)	77
第21図 A区縄文時代後期～晩期土器実測図(3)	30	第60図 C区縄文時代後期～晩期石器実測図(5)	78
第22図 A区縄文時代後期～晩期土器実測図(4)	31	第61図 D区縄文時代後期～晩期遺構分布図	81
第23図 A区縄文時代後期～晩期石器実測図	32	第62図 E区縄文時代後期～晩期遺構分布図	81
第24図 B区縄文時代後期～晩期遺構分布図	34	第63図 D区縄文時代後期～晩期土器実測図(1)	82
第25図 2号堅穴建物跡実測図	35	第64図 D区縄文時代後期～晩期土器(2)、石器実測図	83
第26図 2号堅穴建物跡出土遺物実測図	36	第65図 E区縄文時代後期～晩期土器及び石器実測図	84
第27図 3号堅穴建物跡及び出土遺物実測図	37	第66図 弥生時代遺物実測図	87
第28図 6号堅穴建物跡及び出土遺物実測図	38	第67図 B区古代～中世遺構分布図及び1号土坑実測図	88
第29図 2・5・54号土坑及び出土遺物実測図	39	第68図 1号溝状遺構実測図	89
第30図 B区縄文時代後期～晩期土器実測図(1)	41	第69図 C区古代～中世遺構分布図	90
第31図 B区縄文時代後期～晩期土器実測図(2)	42	第70図 1号道路状遺構実測図	91
第32図 B区縄文時代後期～晩期土器実測図(3)	43	第71図 2・3号道路状遺構、3号溝状遺構実測図	92
第33図 B区縄文時代後期～晩期石器実測図(1)	44	第72図 古代～中世遺物実測図	93
第34図 B区縄文時代後期～晩期石器実測図(2)	45	第73図 その他(近世陶磁器)実測図	93
第35図 C区縄文時代後期～晩期遺構分布図	47	第74図 暦年較正結果	111
第36図 8号堅穴建物跡実測図及び遺物出土状況図	48	第75図 黒曜石产地推定判別図(1)	112
第37図 8号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)	49	第76図 黒曜石产地推定判別図(2)	112
第38図 8号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)	50	第77図 土器分類図	116
第39図 8号堅穴建物跡出土遺物実測図(3)	51		

表 目 次

第1表 掘載遺構一覧	7	第13表 土製品計測表	103
第2表 時代毎の検出状況	12	第14表 陶器観察表	103
第3表 土器観察表(1)	94	第15表 石器計測表(1)	104
第4表 土器観察表(2)	95	第16表 石器計測表(2)	105
第5表 土器観察表(3)	96	第17表 測定試料の詳細と方法	106
第6表 土器観察表(4)	97	第18表 放射性炭素年代測定結果	107
第7表 土器観察表(5)	98	第19表 管玉の比重および蛍光X線分析結果	110
第8表 土器観察表(6)	99	第20表 黒曜石の測定値および产地推定結果	110
第9表 土器観察表(7)	100	第21表 時期が推定できた遺構一覧	113
第10表 土器観察表(8)	101	第22表 土器分類表	115
第11表 土器観察表(9)	102	第23表 遺構出土土器分類表	115
第12表 土器観察表(10)	103	第24表 黒曜石の产地別出土点数	117

図 版 目 次

卷頭図版 1		図版 5	
嫁坂遺跡から霧島連山を望む		1号堅穴建物跡遺物出土状況	17号土坑完掘状況
卷頭図版 2		24号土坑炭化物出土状況	2号溝状遺構完掘状況
C区 8号堅穴建物跡出土状況		2号堅穴建物跡完掘状況	3号堅穴建物跡完掘状況
C区 8号堅穴建物跡出土遺物		6号堅穴建物跡完掘状況	2号土坑完掘状況
図版 1		図版 6	
A区遺構分布状況(縄文時代後期～晩期)		5号土坑完掘状況	5号土坑完掘状況
B区・E区遺構分布状況(縄文時代後期～晩期)		8号堅穴建物跡遺物出土状況	8号堅穴建物跡完掘状況
図版 2		9号堅穴建物跡遺物出土状況	9号堅穴建物跡完掘状況
C区遺構分布状況(縄文時代後期～晩期)		10号堅穴建物跡土層断面	
D区遺構分布状況(縄文時代後期～晩期)		10号堅穴建物跡遺物出土状況	
図版 3		図版 7	
2号3号集石遺構検出状況	4号集石遺構検出状況	25号土坑完掘状況	27号土坑遺物出土状況
5号集石遺構検出状況	6号集石遺構検出状況	29号土坑遺物出土状況	31号土坑完掘状況
7号集石遺構検出状況	8号集石遺構検出状況	42号土坑遺物出土状況	43号土坑土層断面
9号集石遺構検出状況	10号集石遺構検出状況	44号土坑土層断面	45号土坑土層断面
図版 4		図版 8	
11号集石遺構検出状況	12号集石遺構検出状況	1号土坑完掘状況	1号溝状遺構完掘状況
13号集石遺構検出状況	14号集石遺構検出状況	1号道路状遺構完掘状況	1号道路状遺構完掘状況
53号土坑完掘状況	1号集石遺構検出状況	2号道路状遺構完掘状況	3号道路状遺構完掘状況
1号堅穴建物跡土層断面	1号堅穴建物跡完掘状況	3号溝状遺構完掘状況	発掘作業の様子

図版9	C区 縄文時代早期（1）（2）…………… 1～7	図版26	C区 縄文時代後期～晩期（8）（9）…………… 210～229
図版10	A区 1号竪穴建物跡、19号土坑…………… 8～11	図版27	C区 縄文時代後期～晩期（10）（11）…………… 230～245
	A区 縄文時代後期～晩期（1）…………… 12～19	図版28	C区 縄文時代後期～晩期（12）（13）…………… 246～272
図版11	A区 縄文時代後期～晩期（2）（3）…………… 20～39	図版29	C区 縄文時代後期～晩期（14）（15）…………… 273～286
図版12	A区 縄文時代後期～晩期（4）…………… 40～48	図版30	C区 縄文時代後期～晩期（16）（17）…………… 287～302
	B区 2・3・6号竪穴建物跡、54号土坑…………… 49～53	図版31	C区 縄文時代後期～晩期（18）（19）…………… 303～315
図版13	B区 縄文時代後期～晩期（1）（2）…………… 54～69	図版32	D区 縄文時代後期～晩期（1）～（3）…………… 316～332
図版14	B区 縄文時代後期～晩期（3）（4）…………… 70～96	図版33	E区 縄文時代後期～晩期（1）～（3）…………… 333～349
図版15	B区 縄文時代後期～晩期（5）～（8）…………… 97～125	図版34	B・C区 弥生時代…………… 350～352
図版16	B区 縄文時代後期～晩期（9）（10）…………… 126～131		A・B・E区 古代～中世…………… 353～356
	C区 8号竪穴建物跡（1）（2）…………… 132～134		C区 1号道路状遺構…………… 357～358
図版17	C区 8号竪穴建物跡（3）（4）…………… 135～142		A・B・C区 その他…………… 359～365
図版18	C区 8号竪穴建物跡（5）～（8）…………… 143～155		
図版19	C区 9号竪穴建物跡出土遺物		
	C区 9号竪穴建物跡（1）…………… 156・157		
図版20	C区 9号竪穴建物跡（2）（3）…………… 158～165		
図版21	C区 9号竪穴建物跡（4）～（6）…………… 166～174		
	C区 10号竪穴建物跡、25・45号土坑…………… 175～179		
図版22	C区 27・42号土坑…………… 180～183		
	C区 縄文時代後期～晩期（1）…………… 184～188		
図版23	C区 縄文時代後期～晩期（2）（3）…………… 188～193		
図版24	C区 縄文時代後期～晩期（4）（5）…………… 194～202		
図版25	C区 縄文時代後期～晩期（6）（7）…………… 203～209		

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

地域高規格道路「都城志布志道路」は、宮崎県都城市を起点に鹿児島県曾於市を経由して志布志市に至る、総延長約44kmの自動車専用道路である。この道路は、都城・大隅定住自立圏の地域振興や防災・経済・医療対策の機能強化を図るために、九州縦貫自動車道宮崎線（都城I.C）と東九州自動車道（志布志I.C）および物流拠点である中核国際港湾の志布志港を結ぶ路線であり、平成6年12月に計画路線に指定された。

都城志布志道路のうち、宮崎県側では約22kmが工事施工区間であり、その路線構成は都城I.C - 五十町I.C間（約13.4km）が一般国道10号都城道路（国土交通省事業）、五十町I.C - 県境（約8.5km）が県道12号都城東環状線および県道109号飯野松山都城線のバイパス（県事業）である。

当該路線内の埋蔵文化財については、25遺跡393,700m²の存在が把握されており、平成9年度以降、宮崎県教育庁文化財課による試掘・確認調査の結果をもとに、工事計画と遺跡の保護に関する協議調整が重ねられている。

今回発掘調査を実施した嫁坂遺跡は、金御岳I.C - 県境区間（金御岳工区）内に位置する。同工区では計5箇所の遺跡が把握されており、これまでに保木島遺跡（平成27・29～30年度）、上高遺跡（平成29～30年度）、大浦遺跡（平成30年度）、小迫遺跡（平成30年度）の発掘調査が行われている。嫁坂遺跡では平成27年実施の確認調査結果をもとに、遺跡の取り扱いに関する協議を進めた結果、遺構や遺物の存在が確認された9,800m²は現状保存が困難であることから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

これを受けて、平成28（2016）年3月、県道飯野松山都城線（金御岳工区）地域連携推進事業の一環として、県都城土木事務所より発掘調査の依頼がなされ、平成28年5月、県埋蔵文化財センターを調査機関とする発掘調査の着手へと至ったものである。

第2節 調査の組織

嫁坂遺跡における発掘調査組織は下記の体制で実施した。

調査主体：官崎県教育委員会

事業調整：官崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー（主幹） 飯田 博之 （平成28～30年度）

埋蔵文化財担当主査 松本 茂 （平成28～30年度）

発掘調査・整理作業及び報告書作成：官崎県埋蔵文化財センター

所長 谷口 武範 （平成28年度）

菅付 和樹 （平成29年度）

長峯 勝志 （平成30年度）

副所長 菅付 和樹 （平成28年度：兼 調査課長）

甲斐 久志 （平成29年度：兼 総務課長）

田中 礼子 （平成30年度：兼 総務課長）

総務課長 荒木 智恵美 （平成28年度）

甲斐 久志 （平成29年度）

田中 礼子 （平成30年度）

総務課担当リーダー（副主幹） 寺原 真由美 （平成28年度～平成30年度）

調査課長	菅付 和樹	(平成28年度)
	吉本 正典	(平成29~30年度)
調査課調査第一担当リーダー（主幹）	松林 豊樹	(平成28年度~平成30年度)
調査課調査第一担当主査	甲斐 尚和	(平成28~29年度 調査担当〔主任〕) 平成29~30年度 整理・報告書作成)
調査課調査第一担当主査	和田 理啓	(平成28年度 調査担当〔副主任〕)
調査課調査第一担当主査	徳田 尚文	(平成29年度 調査担当〔副主任〕)
埋蔵文化財調査員	早瀬 航	(平成28年度 嘘託調査員)

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境

嫁坂遺跡は宮崎県都城市梅北町に所在する。都城市は、宮崎県南西部に位置する畜産業と焼酎生産が盛んな人口約17万人を擁する南九州第三の都市である。平成の大合併により都城盆地のほぼ全域を占めることとなった市域は約650km²と広く、宮崎市、日南市、串間市、三股町、高原町、鹿児島県曾於市・霧島市の5市2町に隣接している。都城盆地は、北東部の諸県丘陵、南東部の鰐塚山系、北西部の霧島山系に囲まれ、南北約33km、東西約13km、面積約760km²、北東から南西を長軸にした楕円形をなしている。盆地底には大淀川が北流しており、西岸には比較的広い平坦面をもつシラス台地がみられ、東岸には山地から東流する諸河川によって形成された扇状地がみられる。また、周辺には、現在も活動中の火山が多く存在し、戸戸火碎流(A-Ito、約28,000年)、桜島薩摩テフラ(Sz-S、P14、約12,800年前)、桜島末吉テフラ(Sz-11、P11、約8,000年前)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約7,300年前)、霧島御池降下軽石(Kr-M、約4,600年前)、桜島文明軽石(Sz-3、P3、AD1,471)などの年代指標となる広域テフラが堆積している。

今回、調査を実施した嫁坂遺跡は、都城市的中心部から南に約8kmの梅北町に位置し、南東の鰐塚山系天ヶ峯(354m)の北西裾部に形成された標高約200mのシラス台地上位面に立地する。なお、今回の調査区の北西側では農業地総合整備事業で平成10年に調査が行われている。(第1図 19)

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡が所在する都城地域は、前述した多くのテフラの影響により、縄文時代中期以前の遺跡の調査事例は比較的小ない状況である。以下、時代毎に周辺で確認されている遺跡の状況について述べる。

旧石器時代

都城地域で確認されている遺跡は少ない。周辺では、大岩田上村遺跡で細石刃石器群、中床丸遺跡(梅北町)・大年遺跡(梅北町)において、桜島薩摩テフラ下位より剥片が出土している。

縄文時代

草創期の遺跡としては、竪穴状造構や炉穴、集石、配石造構などが検出され、隆帶文土器期の集落と考えられる王子山遺跡(山之口町)と、それに類似する土器が出土した川原谷出水遺跡がある。また、笠ヶ崎遺跡(梅北町)では、桜島薩摩テフラを含む層の下部から集石造構1基が検出されている。

早期の遺跡としては、梅北佐土原遺跡で1基、笠ヶ崎遺跡で4基、中床丸遺跡で11基、高樋遺跡(梅北町)2基の集石造構が検出されている。梅北佐土原遺跡では石巒のみ、笠ヶ崎遺跡では押型文土器と下剥峰式、中床丸遺跡では前平式、下剥峰式、桑ノ丸式、高樋遺跡では加栗山式、下剥峰式、塞ノ神式などが出土している。

前期は都城地域では遺跡数は少なく、本遺跡周辺では、王子原遺跡で森B式と曾畠式、笠ヶ崎遺跡で

曾畠式土器が出土している。また、王子原遺跡・上安久遺跡でも森B式と曾畠式土器が出土しており、この時期の集石遺構1基と土坑8基が検出されている。

中期も前期同様に遺跡数は少ないが、周辺では笠ヶ崎遺跡と高樋遺跡において、比較的まとまった量の深浦式土器が出土しており、高樋遺跡では集石遺構4基と土坑3基が検出されている。

後期の遺跡としては、中床丸遺跡で市来式土器や草野式土器、磨消繩文土器などが多数出土しているほか、野添遺跡では中岳II式土器が伴う堅穴建物跡が4軒検出され、遺構埋土中より炭化したアズキ類の種子が出土した。また、大年遺跡では佐賀県腰岳産と推定される黒曜石が出土している。

晚期では、上針谷・下針谷遺跡で黒川式土器が伴う土壙墓が検出されているほか、筆無遺跡や笠ヶ崎遺跡でも黒川式土器を中心とする遺物が出土している。

弥生時代

都城盆地では、坂元A遺跡で全国的にも早い時期の水田跡がみつかっており、黒土遺跡では擦り切り孔を有する石庖丁や耕圧痕を有する土器片などが出土している。大年遺跡からは、刻目突帯文土器や表面に赤色顔料を塗布した壺の破片が出土している。集落跡としては、筆無遺跡や働女木遺跡、大岩田村ノ前遺跡、大浦遺跡があげられ、中期後半以降の集落が多くみられる。大年遺跡では、後期後半から古墳時代初頭の集落も確認されている。

古墳時代

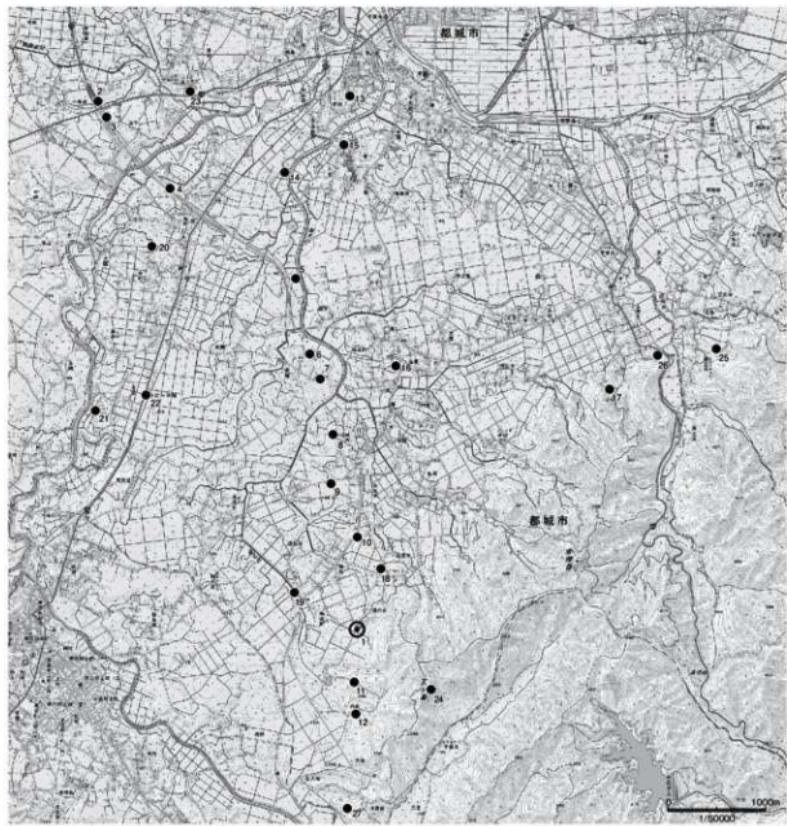
古墳時代の遺跡としては、野添遺跡、平峰遺跡、笠ヶ崎遺跡、高樋遺跡、大年遺跡で集落跡が確認されている。特に、平峰遺跡は、多角形建物を含む大規模な集落であり、鉄挺をはじめ多くの鍛冶関連遺物や陶質土器、仕切付角鉢などの特殊な遺物が出土している。また、大年遺跡と高樋遺跡でも鍛冶関連遺物が多く出土しており、本遺跡の周辺地域では、古墳時代中期以降盛んに鍛冶作業が行われていたことが伺われる。

古代～中世

梅北針谷遺跡では、古代を中心とする4棟の掘立柱建物跡と11基の焼土を伴う土坑が検出され、多くの鍛冶関連遺物が出土している。筆無遺跡では、9～11世紀頃の周溝墓や掘立柱建物跡、土坑墓などが確認されている。また、文明年間に降下した桜島起源の白ボラによって埋没した畠跡とみられる畠間状遺構も検出されているが、同様の遺構は、大年遺跡、笠ヶ崎遺跡でも確認され、鶴尾遺跡と嫁坂遺跡第1地点では、同時期の水田遺構も検出されるなど、生産遺跡の調査事例が目立つ。また、笠ヶ崎遺跡では、主軸が共通する掘立柱建物跡や溝状遺構とともに犬走状遺構や堀切、土壘といった防御用施設が確認されており、14～15世紀頃の有力者の居館跡であった可能性が高い。王子原遺跡・上安久遺跡では12～16世紀の集落が確認されており、15～16世紀頃の道路と考えられる礫敷舗装された溝状遺構が検出されている。

近世

中世以降の梅北地区周辺には寺院などの宗教施設が存在していたようであるが、廃仏毀釈などの影響により現存するものは少ない。発掘調査された遺跡としては、尾崎第一遺跡（貴船寺跡）において中世末から近世に及ぶ土壙墓が143基検出されている。また、遺跡の北西には近世の道標である今町一里塚があり、国の史跡に指定されている。



国土地理院地形図

1 嫁坂遺跡Ⅱ	2 平峰遺跡	3 動女木遺跡	4 筆無遺跡
5 梅北針谷遺跡	6 高橋遺跡	7 笹ヶ崎遺跡	8 大年遺跡
9 中床丸遺跡	10 保木島遺跡	11 上高遺跡	12 大浦遺跡
13 大岩田前ノ村遺跡	14 大岩田上村遺跡	15 黒土遺跡	16 尾崎第一遺跡
17 王子原遺跡	18 梅北佐土原遺跡	19 嫁坂遺跡	20 上針谷・下針谷遺跡
21 鵜尾遺跡	22 今町一里塚	23 油田遺跡	24 天ヶ峰陣跡
25 野添遺跡	26 上安久遺跡	27 川原谷出水遺跡	

[1～12は都城志布志道路建設関連に伴って発掘調査を行った遺跡]

第1図 嫁坂遺跡周辺の主要な遺跡分布図

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の経過

嫁坂遺跡の発掘調査は、平成28（2016）年5月11日～平成29年2月27日まで1次調査として実施した。着手当初の調査対象範囲（6,000m²）は、市道や未買収地を挟み分断されていたため、便宜上A区（4,750m²）、B区（980m²）、C区（270m²）の3地区を設定し調査を開始した。8月に土木事務所との協議を受け、文化財課の確認調査の結果から調査が必要となっていたC区隣接地についても調査対象となり、C区を1,520m²に拡張した。10月1日に埋蔵文化財調査員が1名採用されたことから、都城土木事務所との協議を受け、嫁坂遺跡未調査範囲内の1,750m²についてもD区として本調査対象となった。

さらに、平成28年12月に実施された文化財課の確認調査の結果を受け、嫁坂遺跡未調査範囲内の800m²も本調査対象となり、平成29年12月6日～平成30年3月5日まで2次調査（調査区はE区）として実施した。1次、2次調査を合わせた総面積は9,800m²である。以下、調査区毎・時系列に沿って主な調査の経過を記述する。なお基本層序については第Ⅲ章第3節を参照されたい。

A区

H28. 5.19～27	重機による表土除去
6. 6～10	畑利用時の区画により造成土が厚く残る部分があったため再度重機で除去した。
6.14～17	縄文時代後期～晩期の遺物包含層（Va～Vb層）掘削 Va層～Vb層途中（霧島御池軽石を含む層）までを掘削した。B区の調査の進捗により一時掘削を中断した。
9. 5～29	縄文時代後期～晩期の遺物包含層（Va～Vb層）掘削
9.28～10. 4	文化財課が行った確認調査の際に縄文時代後期の中岳II式土器が出土し、その出土地点を中心に堅穴建物跡（SA1）を検出した。
10. 4～7	縄文時代後期～晩期の遺構検出（SE2、SC17・19・24）
10.11～21	縄文時代後期～晩期の遺構掘削及び実測
11. 8	Vc層上面にて空中写真撮影
11. 9	重機による縄文時代草創期～早期の確認 XI層上面までを確認したが遺物・遺構は確認されなかった。
11.10～15	埋め戻し、調査終了

B区

H28. 5.11～17	重機による表土除去。途中、中世の土師器片1点が出土した。
5.20～24	古代～中世の遺物包含層（Ⅲ～Ⅳ層）掘削。遺物は出土していない。
5.30～31	古代～中世の遺構検出（SE1、SC1） V a層上面で遺構検出を行った。
6. 6～17	古代～中世の遺構掘削及び実測
6.22～8. 18	縄文時代後期～晩期の遺物包含層（Va～Vb層）掘削
8.19～30	縄文時代後期～晩期の遺構検出（SA2・3・6、SC2・5・8・54） 樹根等の擾乱部分が多く、確認作業に時間を要した。
8.29～9. 9	縄文時代後期～晩期の遺構掘削及び実測
9.27	Vc層上面にて空中写真撮影
10.18	重機による縄文時代草創期～早期の確認 XI層上面までを確認したが遺物・遺構は確認されなかった。
10.19～25	埋め戻し、調査終了

C区

H28. 9. 26～29	重機による表土除去
10.11～14	古代～中世の包含層掘削（Ⅲ～Ⅳ層）及び遺構検出（SE3、SG1・2） Va層上面で遺構検出を行った。
10.24～11. 2	古代～中世の遺構掘削及び実測

11. 2～15	縄文時代後期～晩期の遺物包含層（Va層～Vb層）掘削
11.16～17	縄文時代後期～晩期の遺構検出（SA 8・9・10、SC25・27・29・31・36・42・43・44・45） 遺構検出はVc層上面で行った。
11.21～12.20	縄文時代後期～晩期の遺構掘削及び実測 12.26 Vc層上面にて空中写真撮影
H28. 1. 6	重機により南部谷際の表土を除去し調査区を拡張 1.10 古代～中世の包含層（Ⅲ～Ⅳ層）掘削及び遺構検出（拡張部分）（SG 1・2 の統合SG 3）、Va層上面で遺構検出を行った。 1.11～13 古代～中世の遺構掘削及び実測（拡張部分） 1.12～13 包含層掘削のための確認トレンチを設置した際に出土した縄文時代前期～中期の集石遺構（SI 1）を遺構掘削及び実測（拡張部分） 1.16 縄文時代後期～晩期の遺物包含層（Va～Vb層）掘削及び遺構検出（拡張部分） 遺構検出はVc層で行った。 1.17～24 Vb層～Vc層までの無遺物層除去 1.26～2. 8 縄文時代早期の包含層掘削及び遺構検出（SI 2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14） 1.31～2. 3 初回、風倒木とみていた縄文時代前期～中期の土坑（SC53）を検出し遺構掘削 2. 2～27 縄文時代早期の遺構掘削と実測、並行して縄文時代草創期～早期の遺構確認 人力によりXI層上面までを掘削し確認したが遺物・遺構は確認されなかった。 2. 6～2. 7 SC53の実測 2.13 X層上面（一部IX層）にて空中写真撮影 2.17～18 一部埋め戻し 2.27 安全対策を行い、調査終了

D区

H28.11.15～18	重機による表土除去
12. 1～9	縄文時代後期～晩期の遺物包含層（Va～Vb層）掘削
12. 9～14	縄文時代後期～晩期の遺構検出（Vc層上面） 検出面はVc層上面で行った。柱穴を多数検出した。
12.15～21	縄文時代後期～晩期の遺構掘削及び実測
12.26	Vc層上面にて空中写真撮影
12.26～	人力掘削による縄文時代草創期～早期の遺構確認
H29. 1. 17	人力によりXI層上面までを掘削し確認したが遺物・遺構は確認されなかった。 1.18～27 埋め戻し、調査終了

E区

H29.11.28～29	重機による表土除去
12.11～	縄文時代後期～晩期の遺物包含層（Va～Vb層）掘削
H30. 2. 5	
2. 6	縄文時代後期～晩期の遺構検出（Vc層上面） 検出面はVc層上面で行った。柱穴が7基検出された。
2. 7	縄文時代後期～晩期の遺構掘削及び実測
2.14	Vc層上面にて空中写真撮影
2.22～23	人力掘削による縄文時代草創期～早期の遺構確認 人力によりXI層上面までを掘削し確認したが遺物・遺構は確認されなかった。
2.26～3. 5	埋め戻し、調査終了

その他調査に関わる経過

H28.12.17	教育普及活動として現地説明会を実施。都城市や三股町、えびの市、福岡県から30名の参加があった。
-----------	---

第2節 調査の方法

グリッドの設定

調査対象地域全域に対して、国土座標に（世界地図）に基づいた10m×10mのグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。

遺構の掘削

遺構の掘削については、検出状況から個別に任意の主軸を設定し、半蔵もしくは4分法により埋土の状況を確認しながら掘削することを基本とした。堅穴建物跡や土坑、道路状遺構は先行トレンチを掘削し、床面の認定や埋土の堆積状況を確認したうえで掘削を進めるものもあった。

作図記録

遺構の作図に関しては、縮尺1/10もしくは1/20での個別図作成を基本とし、平面図については（株）CUBIC製の「遺構くん」で実測、作図・記録したが、一部の堅穴建物跡や集石遺構等、遺物出土状況を詳しく記録したものについては調査員が実測、作図を行った。

写真記録

全調査区とともに、35mm白黒ネガ・リバーサルフィルムを基本として、一部中判カメラによる白黒ネガ・カラーリバーサルフィルム撮影を行った。また、メモ記録として、デジタルカメラを併用した。なお、各調査区のVc層、C区のX層のそれぞれ上面において、業者委託による空中写真撮影を行った。

遺構番号

発掘調査時、検出した順にA区～E区通しの連番で振っていった。なお、堅穴建物跡（SA）と土坑（SC）については、遺構の形態や埋土の状況といった調査時の所見や報告書作成の段階での検討により、攢乱や樹痕等と判断したものがあり、本報告書では、確実に遺構と判断されたものについてのみ報告する。ただし、遺構番号については、混乱を避けるために調査時の番号をそのまま踏襲する。詳しくは第1表を参照されたい。

第1表 掘立遺構一覧

遺構種別	報告分	未報告分
堅穴建物跡 (SA)	SA 1・SA 2・SA 3・SA 6・SA 8・ SA 9・SA 10	SA 4・SA 5・SA 7
土坑 (SC)	SC 1・SC 2・SC 5・SC 17・SC 19・ SC 24・SC 25・SC 27・SC 29・SC 31・ SC 32・SC 42～45・SC 53・SC 54	SC 3・SC 4・SC 6～16・SC 18・SC 20 ～23・SC 26・SC 28・SC 30・SC 33～41・ SC 46～52
単独の小穴 (SH)	SH95・SH164	
道路状遺構 (SG)	SG 1・SG 2・SG 3	
溝状遺構 (SE)	SE 1・SE 2・SE 3	
集石遺構 (SI)	SI 1～SI 14	



第2図 調査区配置図

第3節 基本層序と堆積状況

基本層序は下の枠内に示すとおりである。

I 層	表土(耕作土)
II 層	黒色土(Hue10YR2/1)に桜島文明軽石(SZ-3、AD1471)を30%程度含む
III 層	黒褐色土(Hue10YR2/2)
IV 層	暗褐色土(Hue10YR3/3)に黄褐色軽石を1~2%程度含む
Va層	黒褐色土(Hue10YR3/2)に黄褐色軽石を10%程度含む
Vb層	暗褐色土(Hue10YR3/4)に黄褐色軽石を30%程度含む
Vc層	霧島御池軽石(Kr-M、約4,600年前)の堆積層に近いもの
VI 層	褐色土(Hue7.5YR4/3)
VII 層	鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約7,300年前)
VIII 層	霧島牛のすね火山灰(Kr-US、約7,600年前)
IX 層	黒褐色土(Hue7.5YR2/2)に桜島末吉テフラ(Sz-11、P11、約8,000年前)を30%程度含む
X 層	黒色土(Hue7.5YR2/1)
XI 層	褐色土(Hue10YR6/1)に桜島薩摩テフラ(Sz-S、P14、約12,800年前)を10%程度含む

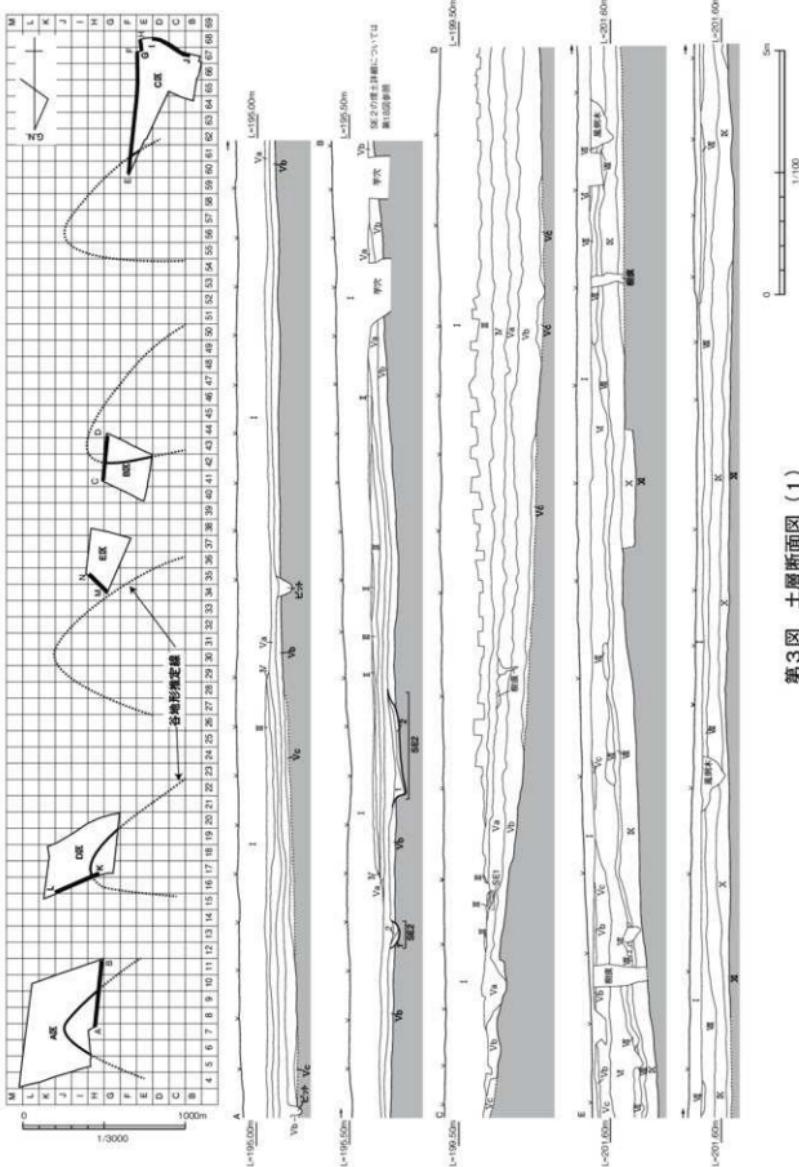
II層は、硬くしまり粘性はない。III層は、しまりがあり粒子が細かい。IV層は、しまりが強く粘性があり粒子が細かい。Va層はしまりがありIV層より粘性が弱く粒子は細かい。Vb層は、しまりがあり粘性はやや弱く粒子が細かい。Vc層は、硬くしまった砂質土でブロック状に割れる。VI層は、しまっており粒子が細かい。VII層は、シルト質であり下部に豆石が堆積している部分もある。VIII層は、硬くしまった粘質土である。IX層は、しまりが強く粘性があり粒子が細かい。X層は、しまりがあり粘性が強く粒子は細かい。XI層は、しまりはあるが部分的に脆く粘性が強い。

各調査区の堆積状況は次のとおりである。

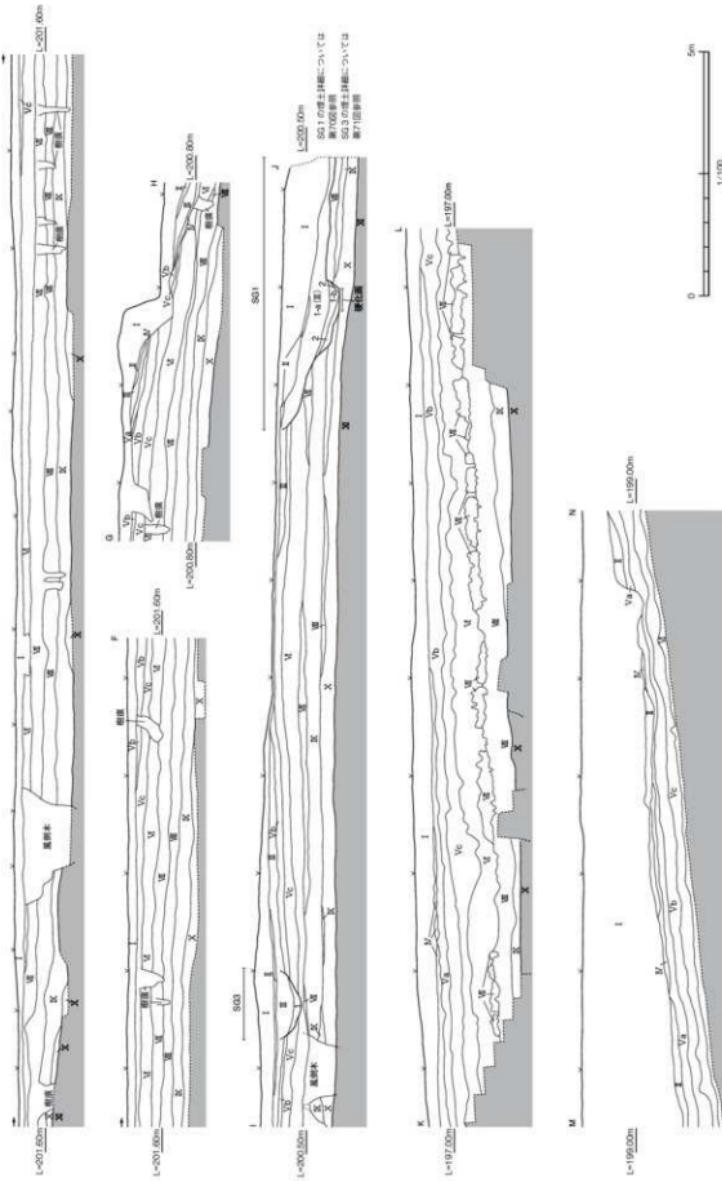
- A区：調査区中央から西側にかけて谷が入る地形で、東側は広くVb層まで削平されている。
B区：調査区南側に谷が入る地形で、北側はIII層まで削平されている。
C区：北側の尾根が削平された状態であり、調査区北側はVc層まで残存していない。調査面は概ね平坦であったが、調査区の南に深い谷が接しており、その傾斜のため各層は不安定な土層堆積をしていた。
D区：調査区北西に谷が入る地形で、東側がVb層まで削平されている。
E区：調査区北西に谷が入る地形で、南東側はVb層まで削平されている。

今回調査を行った部分は、現在圃場整備によって旧地形をかなり改変されているが、前述したとおり天ヶ峯(354m)から北西に延びる丘陵上であり、調査結果から浅い谷と尾根が南北に連続する地形を呈していたと推定される。(第3図の谷地形推定線を参照。)

第3図 土層断面図（1）



第4図 土層断面図（2）



第IV章 調査の成果

前章で述べたとおり、本遺跡ではA区～E区の5つの調査区において発掘調査を行った。各調査区における時代毎の遺構・遺物検出状況は下表のとおりである。以下、時代の古い順に詳細を記述していく。

第2表 時代毎の検出状況

時代	調査区	A区	B区	C区	D区	E区
縄文時代早期	—	—	遺構・遺物	—	—	—
縄文時代前期～中期	—	—	遺構のみ	—	—	—
縄文時代後期～晩期	遺構・遺物	遺構・遺物	遺構・遺物	遺物のみ	遺物のみ	遺物のみ
弥生時代	—	遺物のみ	遺物のみ	—	—	—
古代～中世	—	遺構・遺物	遺構・遺物	—	遺物のみ	—

第1節 縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構・遺物はC区でのみ確認され、2つの時期における遺構・遺物が第IX層を挟む形で検出された。以下、時期の古い順に述べる。

1 C区第X層上面の遺構と遺物

X層上面で検出された集石遺構は4号・6号～11号・13号・14号の9基である。遺物は包含層より土器3点石器2点の計5点が出土した。

(1) 遺構

4号集石遺構（第6図）

調査区南東部のE68グリッドに位置し、X層上面にて検出された。1.8×1.5mの範囲に礫の集中が認められる。その下部には、1.1×0.9m楕円形プランの浅い掘り込みがあり、その中心はさらに一段深く掘り込まれる。この最深部の深さは検出面から約0.26mである。構成礫は、総重量が104.4kgあり0.03～0.1m大のやや小さめの角礫で砂岩等が主体である。底面に近いほど礫の密度が高くなる傾向があり、被熱により赤化した礫も多い。なお、遺構の南側縁辺に沿って0.16m大のやや大き目の角礫がまとまって検出されているが、礫の大きさの違いや位置関係から別遺構の可能性も考えられる。

6号集石遺構（第6図）

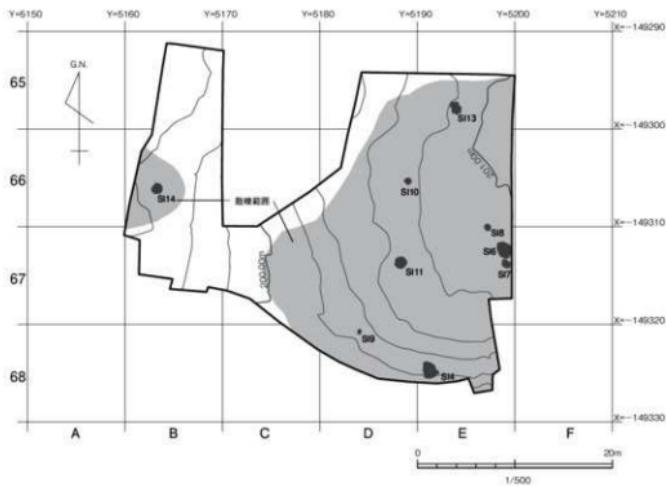
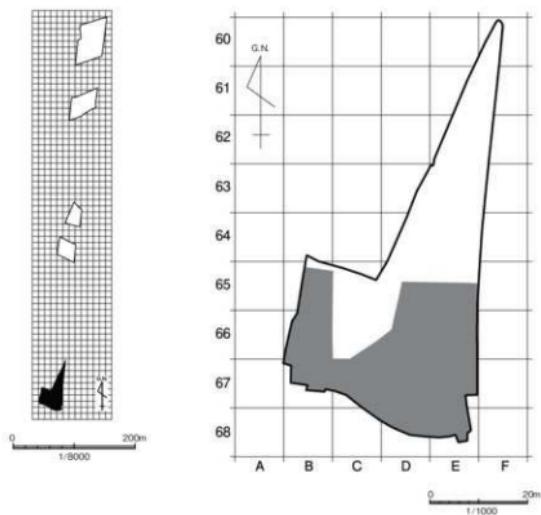
調査区東部のE67グリッドに位置し、X層上面にて検出された。2×2mの範囲に礫の集中が認められ、今回の調査においては最大規模である。遺構の下部は、長軸1.8m短軸1.4mの不整な楕円形プランで浅い楕状の掘り込みがあり、検出面からの深さは約0.3mである。構成礫は、総重量が353.6kgあり0.1～0.15m大の角礫で砂岩等が主体である。ほぼ全ての礫が被熱し赤化しており、その3割程が著しく劣化していた。なお、遺構東側の掘り込み落ち際周辺では、0.20～0.25m大の大きめの角礫が2つほど検出された。

7号集石遺構（第6図）

調査区東部のE67グリッドに位置し、X層上面にて検出された。1.4×0.9mの範囲に礫の集中が認められ、すぐ北には6号集石遺構が隣接する。遺構の下部には長軸1.1m短軸0.8mの不整な楕円形プランで浅い楕状の掘り込みがあり、検出面からの深さは約0.08mである。構成礫は、総重量が24.2kgあり0.05～0.12m大の角礫で砂岩等が主体である。ほぼ全ての礫が被熱し赤化しており、その1割程が著しく劣化していた。

8号集石遺構（第6図）

調査区東部のE66・E67グリッドに位置し、X層上面にて検出された。0.7×0.7mの範囲に礫の集中が認められる。その下部には若干の窪みがあるものの、明確な掘り込みは確認できなかった。構成礫は、総重量が7.3kgあり0.05～0.12m大の角礫で砂岩等が主体である。ほぼ全ての礫が被熱し赤化しており、



第5図 C区 第X層上面遺構分布図

その1割程が著しく劣化していた。

9号集石遺構（第6図）

調査区南部のD68グリッドに位置し、X層上面にて検出された。0.7×0.6mの範囲に礫の集中が認められる。その下部に明確な掘り込みは確認できなかった。構成礫は、総重量が4.9kgあり0.03～0.1m大の角礫で砂岩等が主体である。なお、被熱により赤化した礫が一部確認されたが、他の集石遺構と比べて少ない。

10号集石遺構（第7図）

調査区北部のD66グリッドに位置し、X層上面にて検出された。0.9×0.6mの範囲に礫の集中が認められる。その下部には若干の窪みがあるものの、明確な掘り込みは確認できなかった。構成礫は、総重量が15.1kgあり0.03～0.1m大の角礫で砂岩等が主体である。被熱により赤化した礫が一部確認された。なお、南東部の礫は樹根により攪乱を受けており、原位置を保っていないと考えられる。

11号集石遺構（第7図）

調査区中央部のD67グリッドに位置し、X層上面にて検出された。1.4×1.5mの範囲に礫の集中が認められる。その下部には直径約1.3mの不整な円形プランで浅い皿状の掘り込みがあり、検出面からの深さは約0.13mである。礫は、掘り込みの底面に近くなるにつれて密度が高く、大きめの礫も多く出土した。構成礫は、総重量が62.1kgあり0.1～0.2m大のやや大きめの角礫で砂岩等が主体である。それ以下の小礫は被熱により割れたものと推測される。ほぼ全ての礫が被熱し赤化しており、著しく劣化した礫も一部確認された。

13号集石遺構（第7図）

調査区北部のE65グリッドに位置し、X層上面にて検出された。1.1×1.4mの範囲に礫の集中が認められる。その下部には明確な掘り込みや窪み等は確認できなかった。構成礫は、総重量が14.3kgあり0.05～0.15m大の角礫で砂岩等が主体である。ほぼ全ての礫が被熱し赤化しており、その2割程が著しく劣化していた。

14号集石遺構（第7図）

調査区西部のB66グリッドに位置し、X層上面にて検出された。1.3×1.4mの範囲に礫の集中が認められる。その下部には直径1.1mの不整な円形プランで浅い皿状の掘り込みがあり、検出面からの深さは約0.09mである。構成礫は、総重量が45.5kgあり0.05～0.10m大の角礫で砂岩等が主体である。ほぼ全ての礫が被熱し赤化しており、その1割程が著しく劣化していた。

（2）遺物

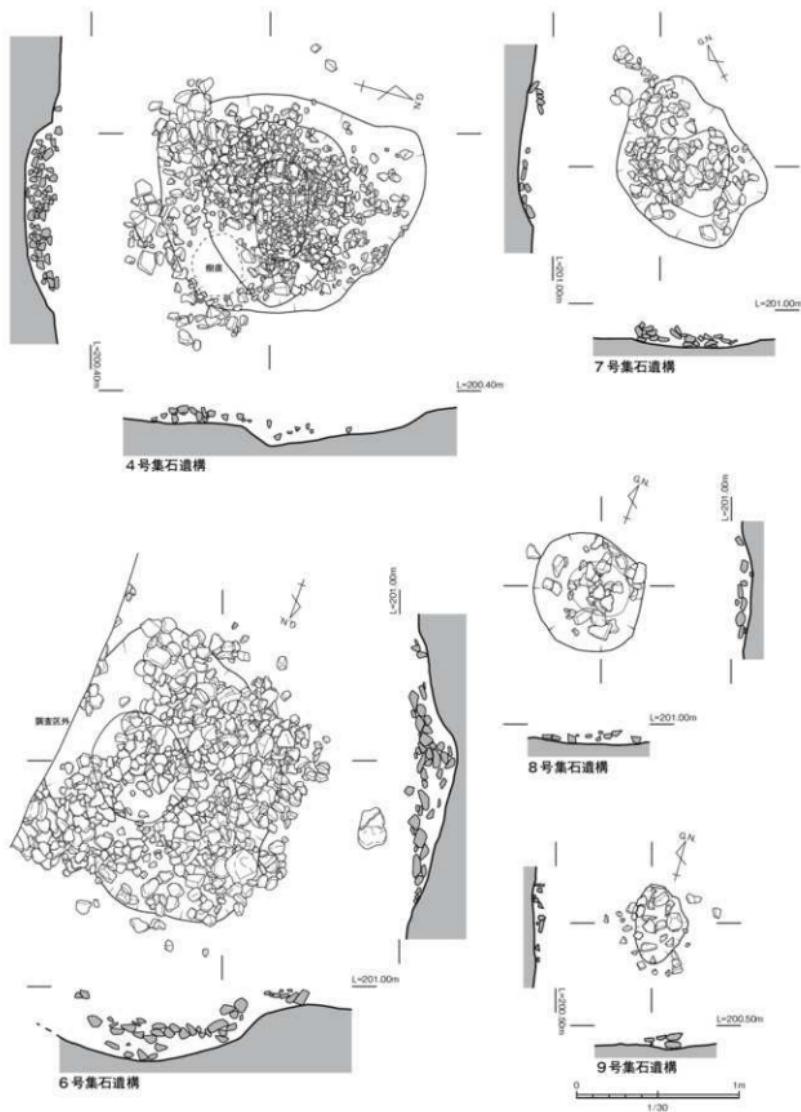
土器（第8図1～3）

1は、貝殻文円筒形土器の底部で、外面に貝殻条痕を施す。2は、貝殻文円筒形土器の口縁部で緩く外反する。口唇部には太めの刻目文を施し、口縁部には連続した左下がりの貝殻腹縁刺突文を施す。内面調整は粗いナデである。3は、貝殻文円筒形土器の口縁部～胴部である。口唇部は平坦で口縁部文様帶に横方向の貝殻腹縁刺突を直線的に2条施し、その間に左下がりの連続した貝殻腹縁刺突文を施している。胴部には一般的なものより間隔が狭い貝殻条痕を斜方向に施し、綾杉状の施文をなす。内面はケズリ状の調整である。

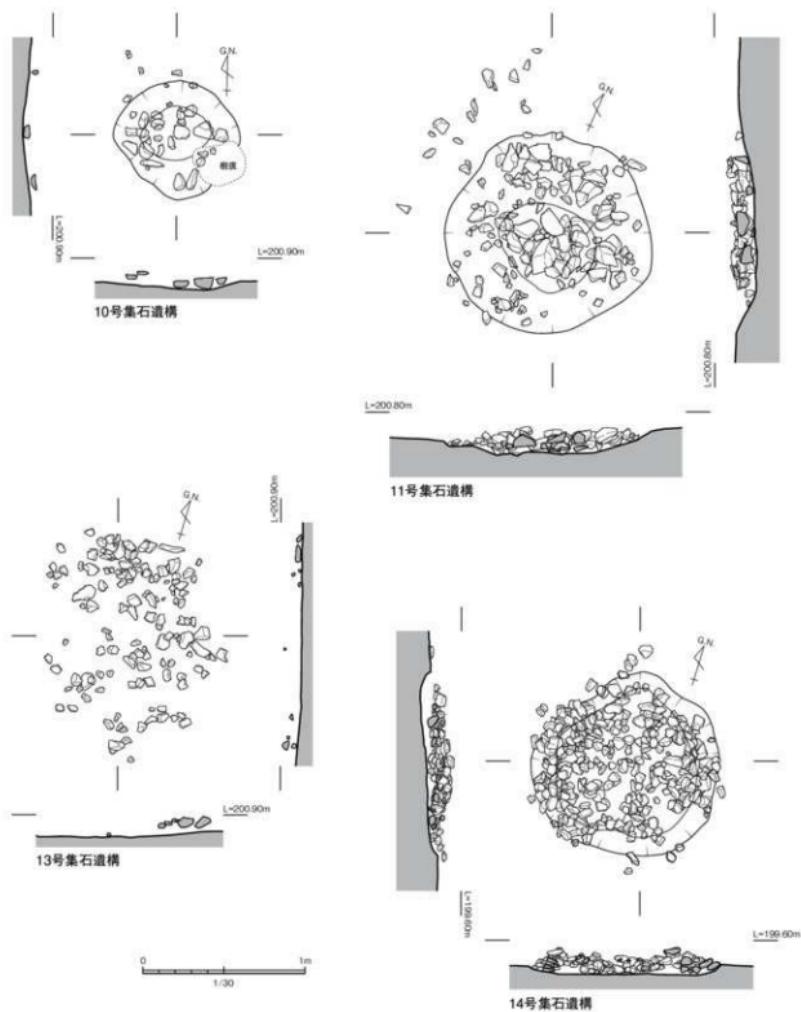
石器（第8図4・5）

4は砂岩の凹面である。やや扁平な円形で表裏面はともに磨られ、被熱による赤化も確認できる。側面には多くの敲打痕があり、一部劣化し脆くなっている。

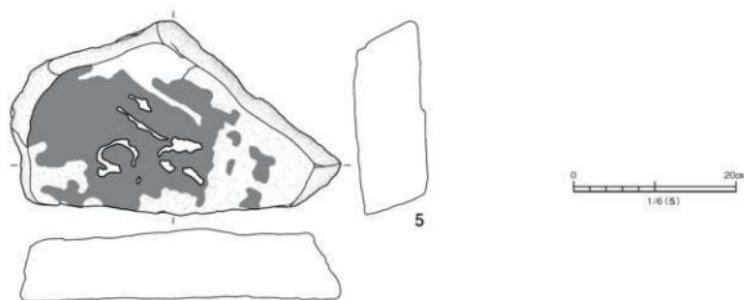
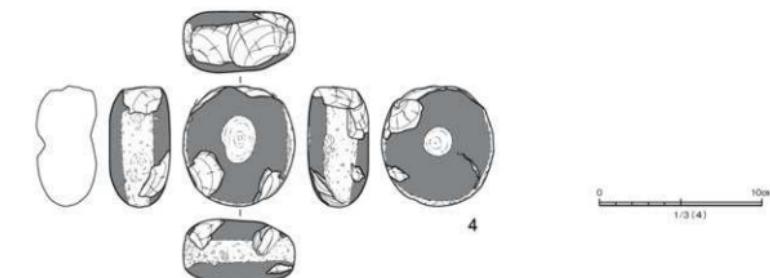
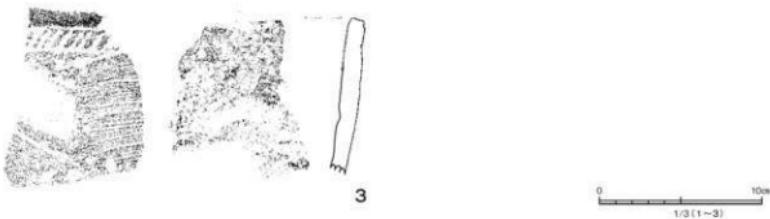
5は大型の砂岩の砥石で、厚さ9cm程の扁平な礫であり、広い一面にのみ砥面を有する。



第6図 4・6~9号集石造構実測図



第7図 10・11・13・14号集石遺構実測図



第8図 C区 第X層上面遺物実測図

2 C区第IX層上面の遺構と遺物

第IX層上面で検出された集石遺構は2号・3号・5号・12号の4基である。遺物は土器が2点出土した。

(1) 遺構

2号集石遺構（第10図）

調査区南東部のE68グリッドに位置し、IX層上面にて検出された。遺構の南側には3号集石遺構が隣接しており、約1.1×1mの範囲に礫の散布が見られる。下部には長軸0.7m短軸0.6mの不整な楕円形プランの浅い掘り込みを伴い、検出面からの深さは約0.09mである。

構成礫は、総重量が13.2kgあり0.05～0.15m大の角礫で砂岩等が主体であり、比較的平たい礫が多い。ほぼ全ての礫が被熱により赤化しており、その半数以上が著しく劣化していた。

3号集石遺構（第10図）

調査区南東部のE68グリッドに位置し、IX層上面にて検出された。遺構の北側にはSI2が隣接しており、1×0.6mの範囲に礫の散布がみられる。下部には長軸0.9m短軸0.6mの不整な楕円形プランで浅い掘り込みを伴い、検出面からの深さは約0.1mである。構成礫は、総重量が12.2kgあり0.05～0.15m大の角礫で砂岩等が主体であり、比較的平たい礫が多い。ほぼ全ての礫が被熱により赤化しており、その半数以上が著しく劣化していた。

5号集石遺構（第10図）

調査区南東部のE67グリッドに位置し、IX層上面にて検出された。0.5×0.4mの範囲に礫が集中していた。礫のある範囲は浅く埋んでいたが、明瞭な掘り込みは確認できなかった。構成礫は、総重量が5.8kgあり0.05～0.15m大の角礫で砂岩等が主体である。ほぼ全ての礫が被熱により赤化しており、劣化が著しいもの一部確認された。

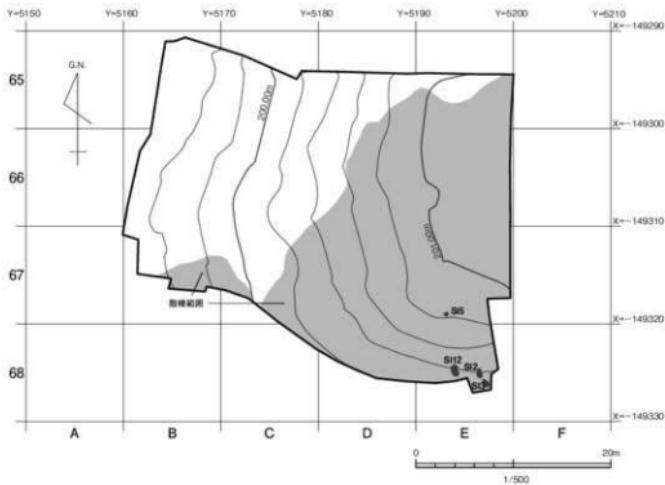
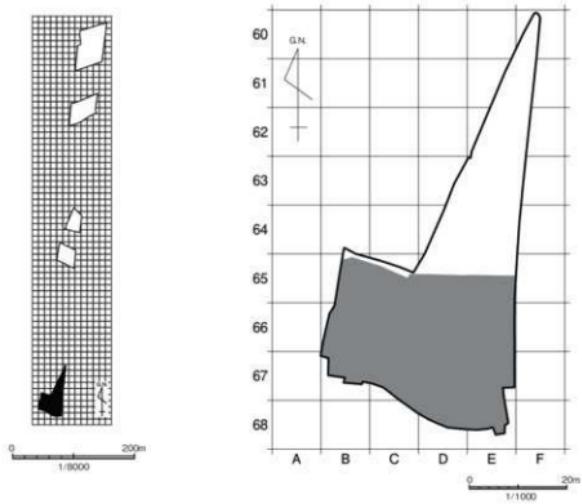
12号集石遺構（第10図）

調査区南東部のE68グリッドに位置し、IX層上面にて検出された。0.8×0.4mの範囲に礫の散布がみられる。長軸1.3m短軸0.7mの不整な楕円形プランで浅い掘り込みを伴う。検出面からの深さは約0.1mである。遺構下部の掘り込みに対して構成礫が少ない。この構成礫は、総重量が4.9kgあり0.05～0.1m大の角礫で砂岩等が主体であり、小礫は被熱により割れたものと推測される。底面付近で被熱により赤化した礫が一部確認された。

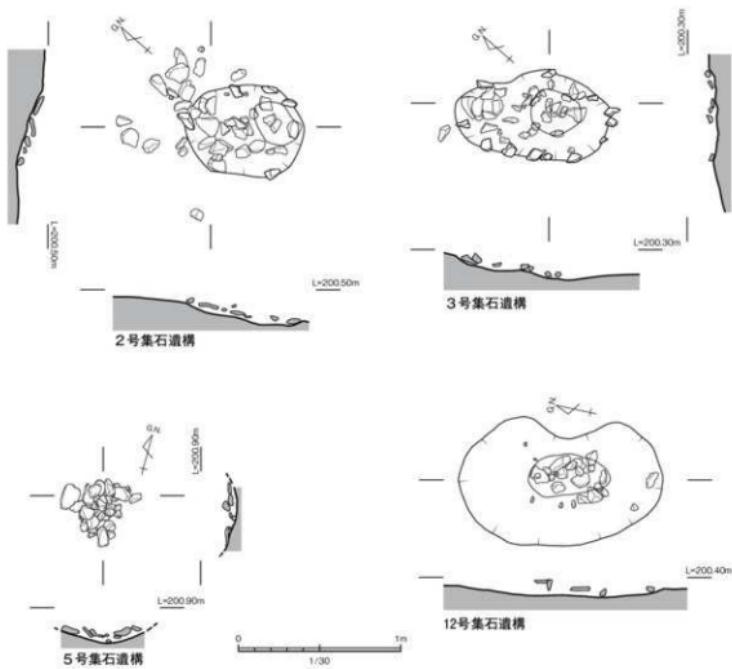
(2) 遺物

土器（第10図6・7）

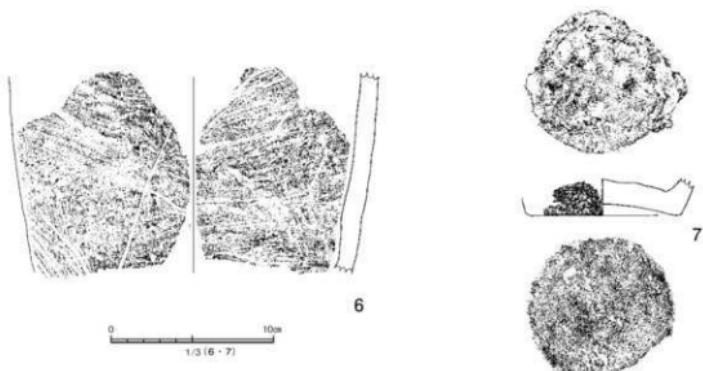
6は深鉢の胴部で、部分的に貝殻条痕が縦・斜方向に施され、粗いナデで調整される。内面は横・斜方向のケズリである。7は深鉢の底部で上げ底となる。



第9図 C区 第Ⅸ層上面遺構分布図



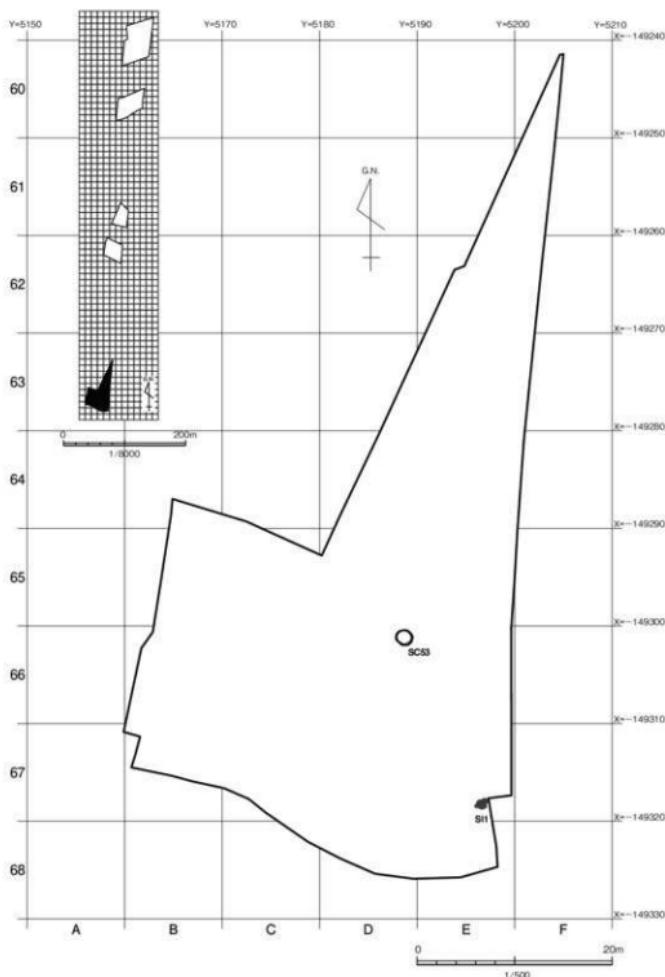
第10図 2・3・5・12号集石遺構実測図



第11図 C区 第IX層上面遺物実測図

第2節 繩文時代前期～中期の遺構

縄文時代前期～中期の遺構は、C区でのみ確認された。53号土坑はIX層上面で、1号集石遺構はVI層中でそれぞれ検出された。遺物は出土していない。



第12図 C区 縄文時代前期～中期遺構分布図

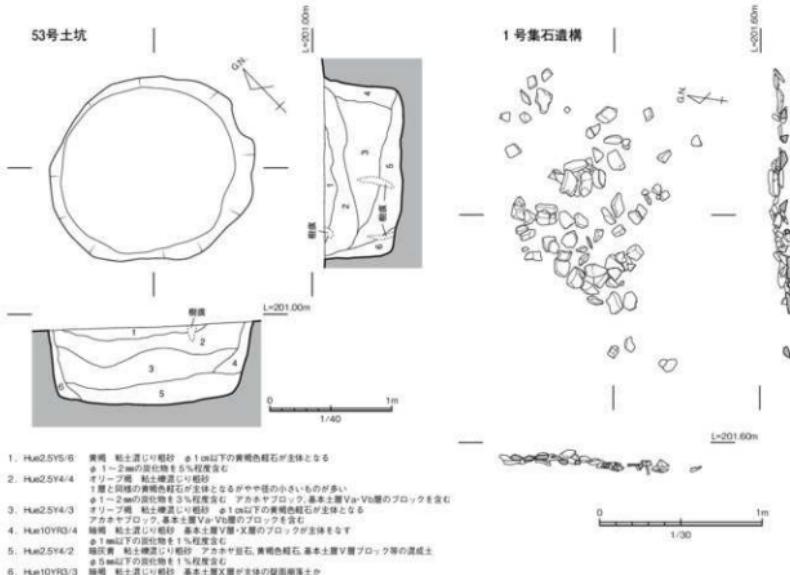
53号土坑（第13図）

調査区中央部のD66グリッドに位置し、Ⅸ層上面にて検出された。平面形は不整な円形で直径約1.6m、検出面からの深さは約0.65m。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は黄褐色、暗褐色、オーリーブ褐色等明るめの色調でVc層（霧島御池軽石層）やⅧ層（アカホヤ層）等がブロック状に混じる。自然流入によって埋没したのではなく、人為的に埋め戻されたものと解釈される。遺物は出土していない。

1号集石遺構（第13図）

調査区南東部のE68グリッドに位置し、谷の落ち際に面する。検出面はやや不明瞭な堆積のⅥ層中である。礫は2×1.3mの範囲で広がり、掘り込みや窪み等は確認できなかった。

構成礫は、総重量が52.4kgで、0.05~0.1m大の角礫で砂岩が主体である。ほぼ全ての礫が被熱し赤化しているが、礫の表面は滑らかなものが多いことから、複数回の使用というよりも1回もしくは少ない被熱回数であったことが推測される。



第13図 53号土坑、1号集石遺構実測図

第3節 繩文時代後期～晩期の遺構と遺物

本遺跡ではVa～Vb層（霧島御池軽石が混じる層）及びVc層（霧島御池軽石の堆積層）上面で縄文時代後期～晩期の遺構・遺物が確認された。以下、調査区毎に記述する。

1 A区の遺構と遺物

A区で検出された遺構は、堅穴建物跡1軒（1号）、土坑3基（19号・17号・24号）、溝状遺構1条（2号）である。標高の高いところでは削平または耕作による擾乱を受けた部分が多く、一部欠損した遺構もある。遺物は、調査区中央部西側に位置する谷地形箇所より多く出土する傾向が認められた。

（1）遺構

1号堅穴建物跡（第15図・出土遺物：第16図8・9）

調査区中央部のJ9グリッドに位置する堅穴建物跡である。Vc層上面で検出された。

遺構の平面形は略円形で直径約3.4m、底面積は約6.6m²である。堅穴の西側部分は擾乱により一部失われていた。

堅穴床面は、多少の起伏があるが概して平坦であり、Vc層を直床とする。検出面からの深さは約0.4m、掘り込みの立ち上がりはしっかりしている。堅穴中央付近には浅い掘り込みの屋内土坑が認められた。平面形は不整な楕円形で長軸約1.6m、短軸約0.8mであり、底面には焼土が堆積し、埋土には炭化物が含まれることから地床炉と判断される。

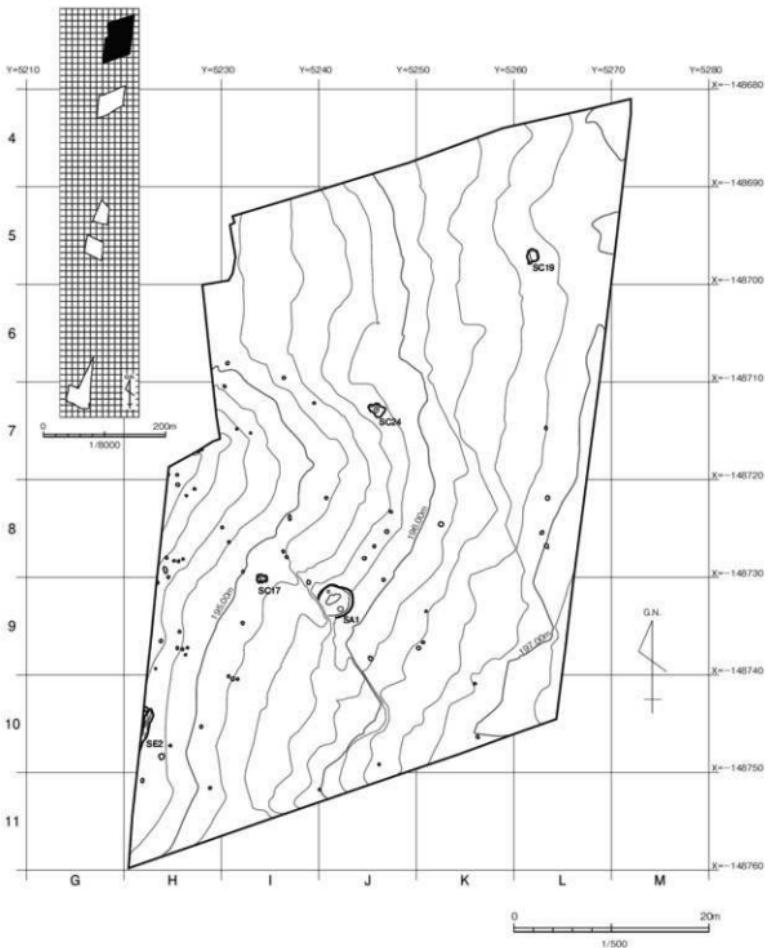
堅穴に伴う柱穴は、床面にて直径0.26mのP1が検出された。床面からの深さは0.22m。P2は、堅穴埋土の検出面にて確認された柱穴で、断面観察の結果からも1号堅穴建物跡より後出の時期のものと判断される。よって、堅穴建物の柱穴配置は、P1と地床炉との位置関係からすると、地床炉を挟んで2基が対置するあり方が想定されるが、P1に対応する主柱穴はP2によって失われたものと推測される。

堅穴埋土は、オリーブ褐色、暗褐色、灰黄褐色などの黄色味のある色調で霧島御池軽石を5%程度、炭化物を3～5%程度含むシルト混じり粗砂である。

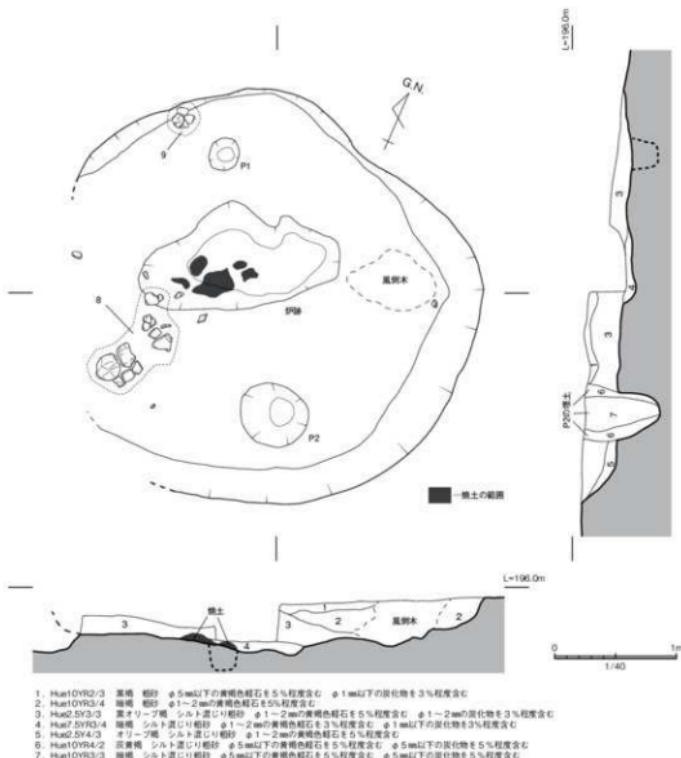
遺物は床面付近から出土しており、特に縄文時代後半の深鉢2個体分が出土している点が注目される。8は胴部最大径の部位で逆「く」字状に屈曲し、その直上に沈線を3条巡らせた後、三日月状の凹点を施している。口縁部は肥厚し、口縁部文様帯に浅く幅広の沈線を2条巡らせている。底部は底径3.1cmで500円硬貨大の小さな平底でやや丸みを帯び胴部最大径の所に向かって直線的に延びる。調整は、外面胴部上位に横方向のミガキ、胴部下位に多方向のミガキ、底部付近に斜方向のミガキを施す。内面は丁寧な工具ナデを施している。外・内面両方に炭化物が付着しており、AMS法による放射性炭素分析を実施した結果、 3020 ± 20 年¹⁴CBPの測定値が得られた。9は深鉢の底部で、底径2.6cmである。8と同様の形状を呈し、二次的被熱により一部赤変している。調整は外・内面ともに工具ナデを施している。

19号土坑（第17図・出土遺物：第17図10・11）

調査区北東部のL5グリッドに位置し、Vc層上面にて検出されたが、後世の擾乱を大きく受けている。平面形は方形基調の不整形であり、長径1.3m、短径1.2mで、平面積は約1.2m²である。遺構の断面形は立ち上がりが緩やかで検出面からの深さは0.3m程であり、皿状ないし椀状に近い。埋土は霧島御池軽石と炭化物を少量含むシルト混じりの粗砂である。遺物は少なくとも縄文土器の深鉢2個体が確認された。10は深鉢で、屈曲部上の胴部である。幅広の沈線を2条巡らせた後、三日月形もしくは不正な楕円形の凹点を施し横方向のミガキで調整される。



第14図 A区 繩文時代後期～晚期遺構分布図



第15図 1号竪穴建物跡実測図

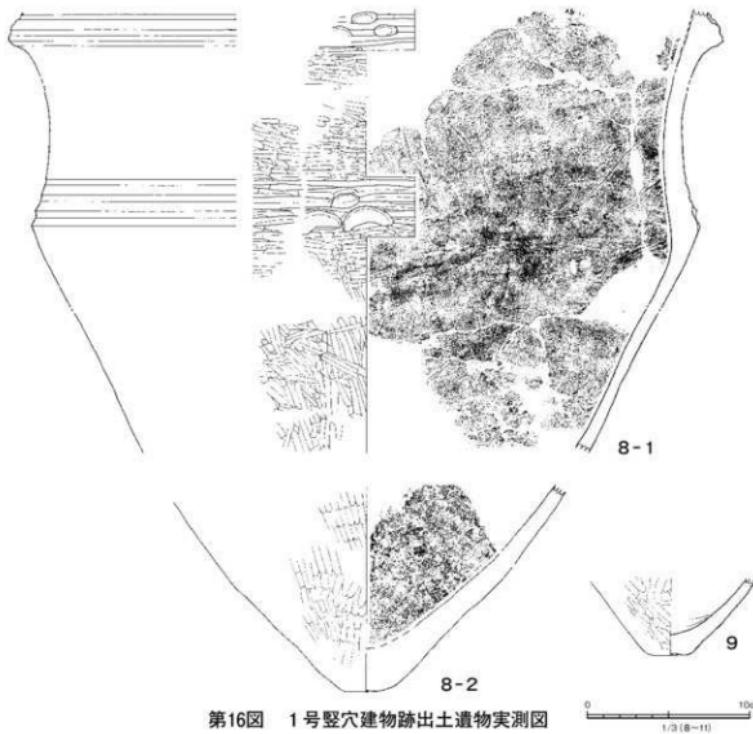
17号土坑（第18図）

調査区西部のI8グリッドおよびI9グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は長径1m、短径0.6mの不整形で、面積は約0.7m²である。底面も不整な形状である。遺構の断面形は立ち上がりがやや弱く、検出面からの深さ0.2m程の皿状である。埋土は、霧島御池鉄石を少量含むシルト混じりの粗砂である。なお、遺物は出土しなかった。

24号土坑（第18図）

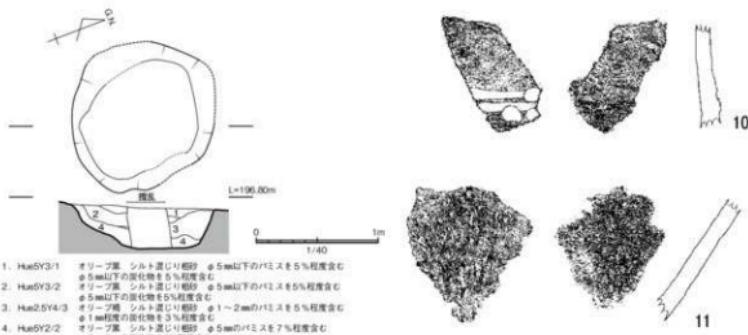
調査区中央部のJ7グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は不整形で、長径1.7m、短径0.8m、面積は約0.7m²である。断面形は中央に深めの掘り込みがあり、検出面から最深部までの深さ0.6m程の皿状ないしすり鉢状に近い。埋土は霧島御池鉄石と炭化物を少量含むシルト混じりの粗砂である。

なお、土器等の遺物はないが、底面近くより大きさ約0.3×0.2×0.2mの炭化物が出土しており、AMS法による放射性炭素分析を実施した結果、 3495 ± 20 年¹⁴C BPの測定値が得られた。

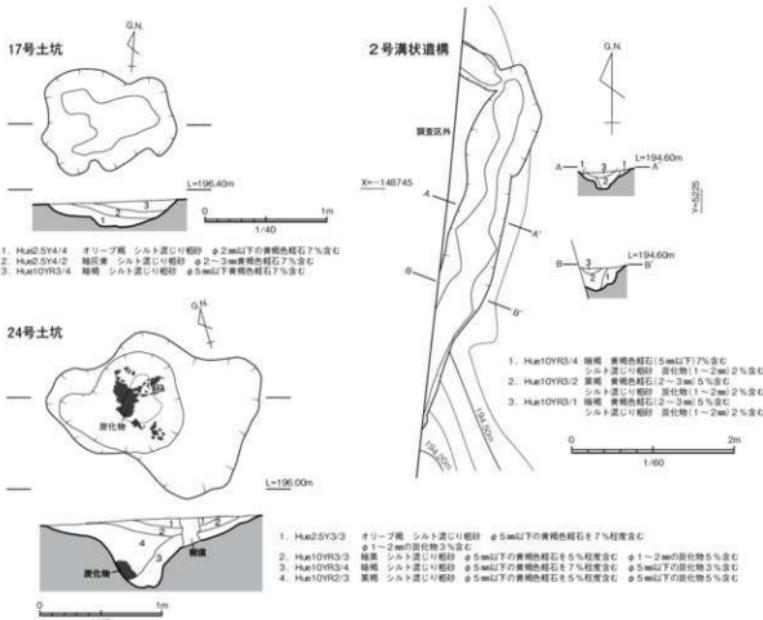


第16図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図

0
1/3 (8-11)
10m



第17図 19号土坑及び出土遺物実測図



第18図 17・24号土坑、2号溝状遺構実測図

2号溝状遺構（第18図）

調査区の西壁沿い（H10グリッド付近）に位置し、Vc層上面で検出された。部分的な検出であるために全体形等は不明であるが、調査区内で確認できた遺構の規模は、全長約4.6m、最大幅0.8m、深さは約0.3mである。西壁より南西に向かっているが、北側では直角に屈曲する。遺構の断面形は、下部は逆台形であるが上部は大きく開く形状である。埋土は霧島御池軽石を少量含むシルト混じり粗砂であり、滌水の痕跡も認められた。なお、遺物は出土していない。

（2）遺物

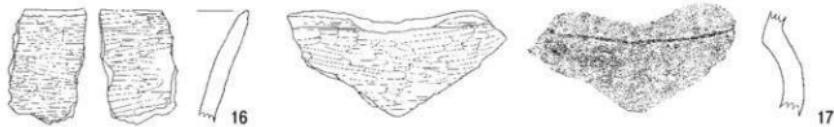
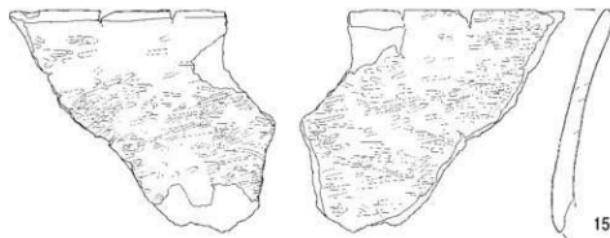
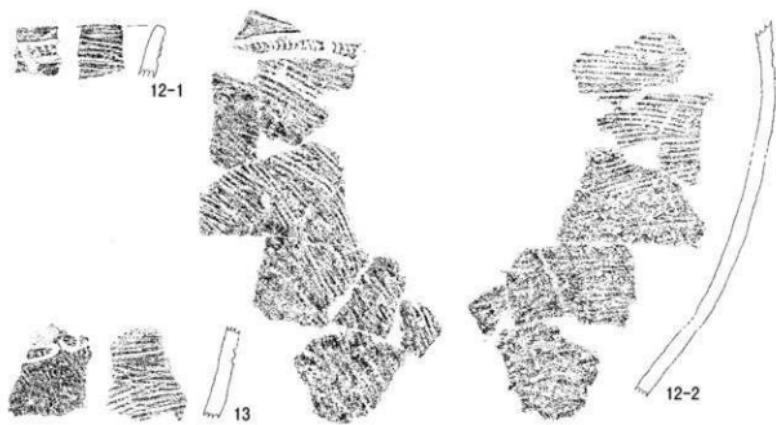
土器（第19~22図12~39）

包含層出土の土器については既存の型式に沿ってまとめ、極力、編年の位置に基づいて前後関係を定めた。12~35は縄文時代後期の鉢・深鉢である。

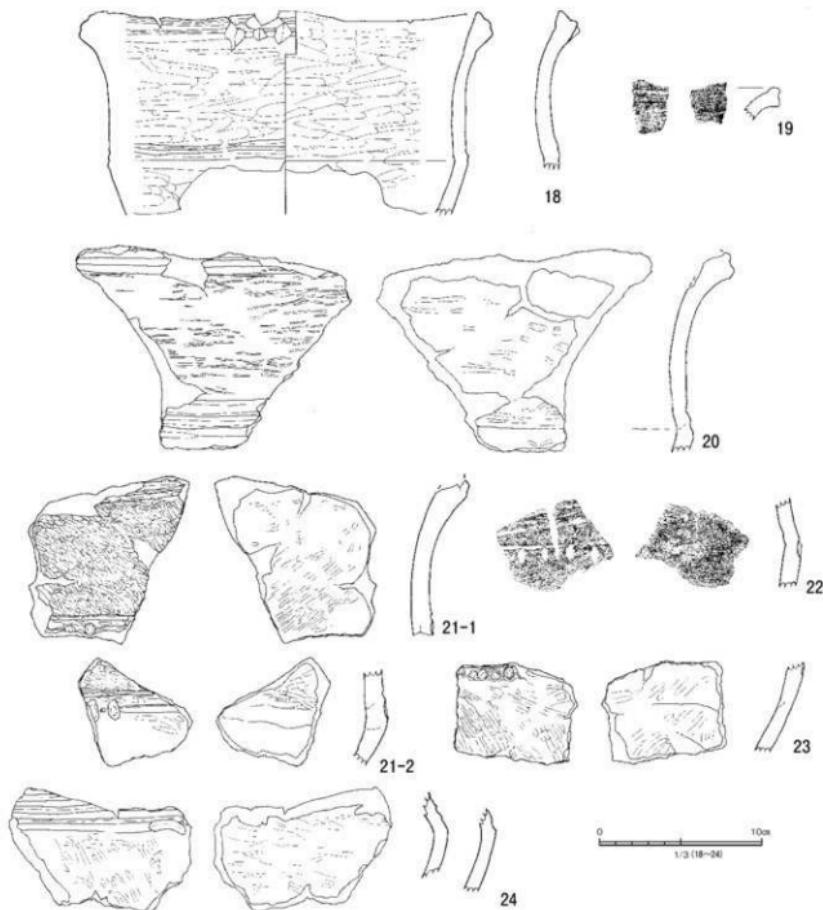
12は口縁部文様帶に貝殻腹縁による刺突文を巡らせた後、2条の沈線によって区画している。外面は口縁部文様帶下部から、内面は口縁部から貝殻条痕が施されている。13は胴部で、外面には貝殻条痕を施した後ナデ調整、さらに沈線で文様を描いている。

14~17は口縁が外反し胴部が張り、ミガキにより調整された深鉢の一群である。14は復元口径37.8cmで、口縁部はやや外に開き、内面に細めの沈線が1条巡る。頸部で「く」字形に屈曲し、胴部が張り出す器形である。

18~26は口縁部が肥厚し、口縁部文様帶に浅く幅広の沈線を2条ないし3条巡らせ、胴部が稜を成し



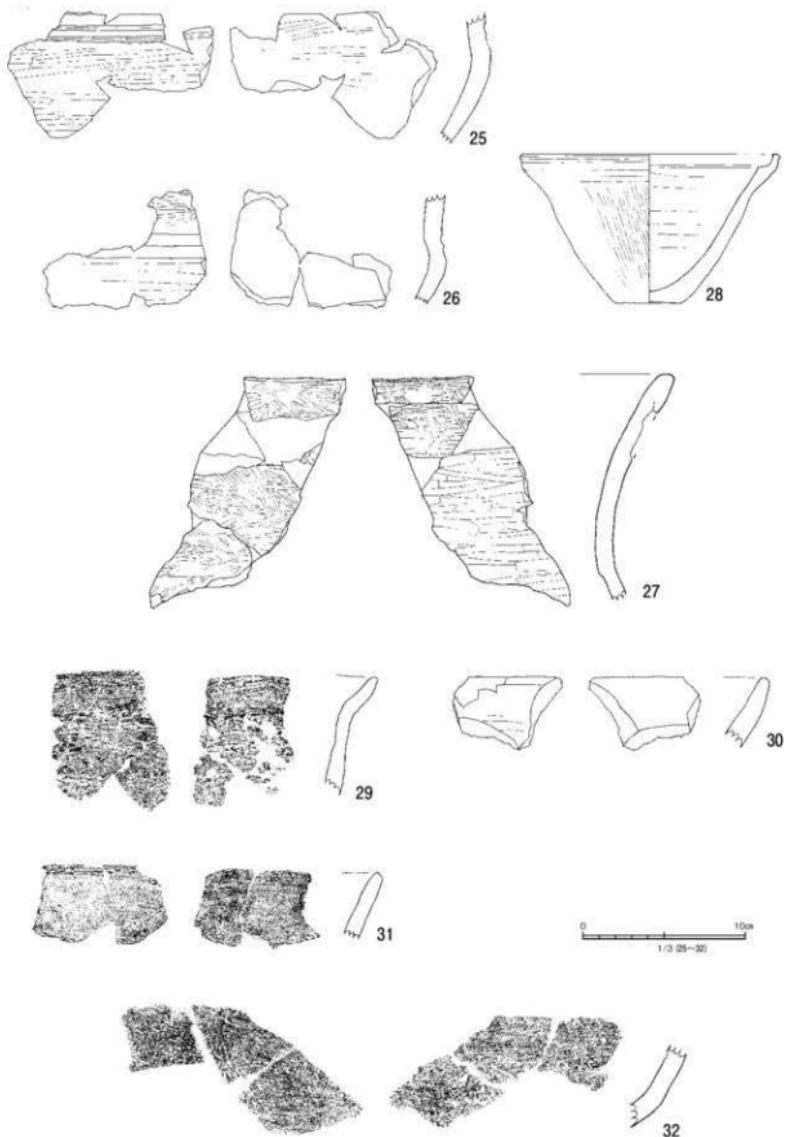
第19図 A区 縄文時代後期～晩期土器実測図（1）



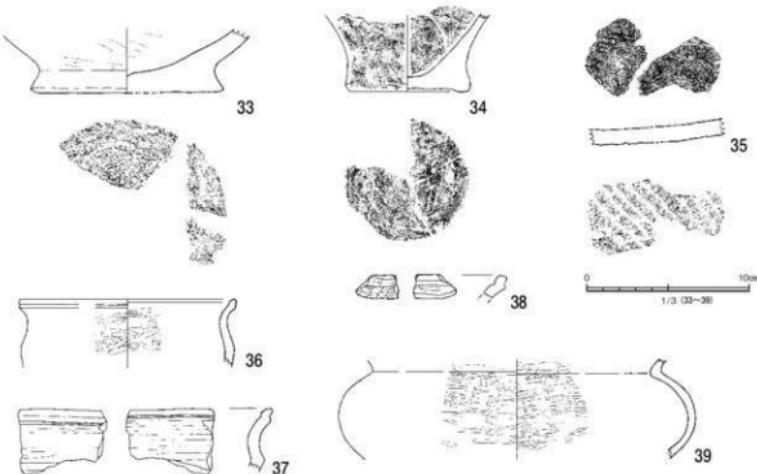
第20図 A区 繩文時代後期～晚期土器実測図（2）

て屈曲する一群である。調整は概してミガキである。18は復元口径23.6cmで口縁部文様帶に押圧による窪みが1箇所確認できる。18・20・21・24～26は胴部最大径の部位で逆「く」字状に屈曲し、屈曲部直上に2条～3条の沈線を巡らせている。21～23はその沈線に沿うように径5～6mmの凹点文が並んで施され、24には三日月状の凹点文が施される。20・26は胴部の沈線が浅く幅広で凹線に近い。

27は口縁部がやや肥厚し外反する。28は復元口径15.2cmの鉢で、縱方向のミガキにより調整される。口縁部に浅い沈線が巡り、口縁部内側に段が作られている。底部は径3.6cmで、500円硬貨大の小さな平



第21図 A区 縄文時代後期～晩期土器実測図（3）



第22図 A区 縄文時代後期～晩期土器実測図（4）

底である。調整は外面が縦方向のミガキ、内面が横方向のミガキである。

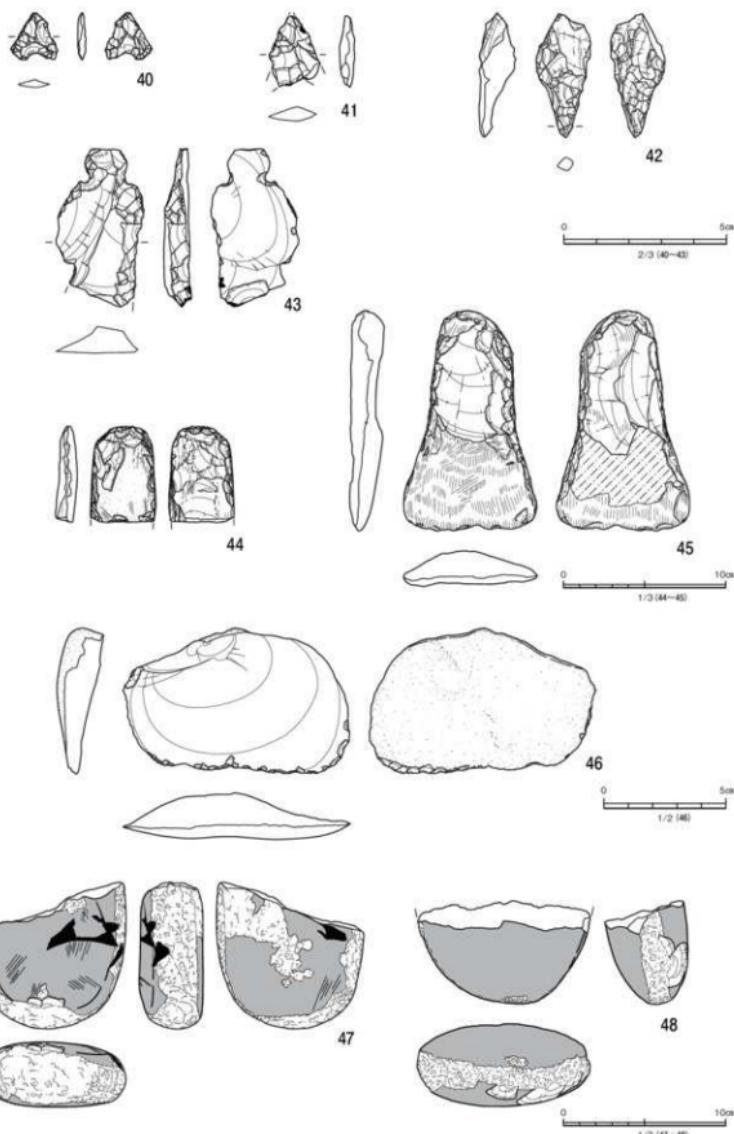
29～32は粗製の深鉢である。29は口縁部が外に開く。

33～35は縄文時代晩期の粗製の深鉢・鉢の底部である。33は底径12.0cmで胴部に向けて「く」字形に屈曲する。34は底径7.65cm。やや上げ底となる。底部から胴部にかけて緩やかに内湾する。35は組織痕土器の鉢の底部である。

36～39は縄文時代晩期の浅鉢である。36～38は沈線によって口縁部内面に段を作り外面に区画沈線を施すことで口縁部端部に玉環状の区画部位を形成している。36・37は口縁から頭部にかけて内湾する。39は口縁部と胴部がほぼ直角に接合し、胴部が弓状に張り出し全体形は扁球状を呈する。

石器（第23図40～48）

A区では石鏃2点、石錐1点、石匙1点、石斧2点、剥片1点、磨敲石2点が出土し、全て図化した。40・41は石鏃である。40はガラス質安山岩製の小形のもので、基部に抉りを有し、脚端部の形状が左右でやや異なる。41は姫島産黒曜石製で両脚部を欠く。42はチャート製の石錐である。43はガラス質安山岩製の綱型石匙とみられるが、先端部を大きく欠損している。44・45は石斧で、ともにホルンフェルス製である。44は打製石斧の基部で、表裏面に縦方向の擦痕がみられる。45は完形で扁平な局部磨製石斧で、細長い基部から刃部が大きく開くバチ形を呈し、表面は比較的広く刃部を研磨しているが、裏面は摺理面を広く残し、先端に近い部分のみを研磨している。46は砂岩の礫を打ち欠いて得られた剥片で、鋭利な側縁に刃こぼれ状の使用痕がみられる。47は砂岩製、48は凝灰岩製の磨敲石で、ともに約半分を欠くが、表裏面に磨面、側面の全面に敲打痕がみられる。



第23図 A区 繩文時代後期～晩期石器実測図

2 B区の遺構と遺物

B区で検出された遺構は、堅穴建物跡が3軒（2号・3号・6号）、土坑が3基（2号・5号・54号）である。A区同様に土地の高いところは、削平や擾乱を受けており一部欠損した遺構がある。包含層より出土した遺物は、調査区南側にある谷に向かって多くの傾向が認められた。

（1）遺構

2号堅穴建物跡（第25図・出土遺物：第26図49・50）

調査区北西部のE41グリッドとF41グリッドに位置する堅穴建物跡である。Va層で検出されたが、後世の擾乱や風倒木痕等によって大きく損なわれていた。遺構の残存部分から推定すると、堅穴の平面形は円形プランで、直径約6.6m（上端の径）とみられる。床面は、Va層を検出面から0.2m程度浅く掘り下げて形成するが、平坦ではなく南西に向かって緩く傾斜することから、埋土とした第1～2層は張床である可能性がある。柱穴・土坑の埋土とした3～4層は1～2層に比べ土色が暗めで基本上層のVa・Vb層に近く炭化物が混じるといった違いもみられるため、建物廃棄後に堆積した可能性が高い。

床面の中央付近には、南北方向を長軸とする梢円形プランの屋内土坑があり、長軸約1.6m、短軸約1.3m、床面からの深さ0.26mである。土坑底面には焼土の広がりが存在することから、屋内炉跡と判断される。

埋土は黄褐色ないし暗褐色で、霧島御池軽石を20～30%程度、炭化物を5%程度含むシルト混じり粗砂である。

柱穴は、計6基を検出できたが、屋内炉を中心に円形に巡るP3～6が主柱穴と考えられる。P3～5は直径約0.25～0.5m、床面からの深さは0.25～0.35cmである。P6は擾乱により痕跡的な残存状況である。

遺物は検出面付近より土器片が出土しており、縄文土器深鉢2個体を図化した。

49は波状口縁で、4箇所あると推定される波頂部は断面三角形状に肥厚する。波頂部は斜方向の貝殻腹縁刺突文のち縦位の短沈線を3条施す。波頂部以外の口縁部は斜方向の貝殻腹縁刺突文を連続で施したのち端部に刺突を持つ1条の沈線文を施している。調整は外・内面ともに斜方向の貝殻条痕文のち一部多方向にナデが施される。外面の一部にスヌが付着している。口径22.4cm。50は深鉢で脣部が緩やかに張り出し、頸部付近に1条の沈線が巡る。外面は多方向に、内面は横方向に貝殻条痕文がみられ、その後ナデ調整される。

3号堅穴建物跡（第27図・出土遺物：第27図51）

調査区中央部のF42グリッドに位置する堅穴建物跡で、検出面はVa層である。

堅穴の南西側は削平を受けて失われているが、残存部分から推定すると、堅穴の平面形は不整な円形で直径は約6.1mとみられる。掘り込みは立ち上がりの弱い皿状を呈する。

住居床面は、概して平坦であり、Va層を検出面から約0.25m浅く掘り下げて直床とする。

埋土はにぶい黄褐色ないし褐色で、霧島御池軽石を15～25%程度、炭化物を5%程度含むシルト混じり粗砂である。

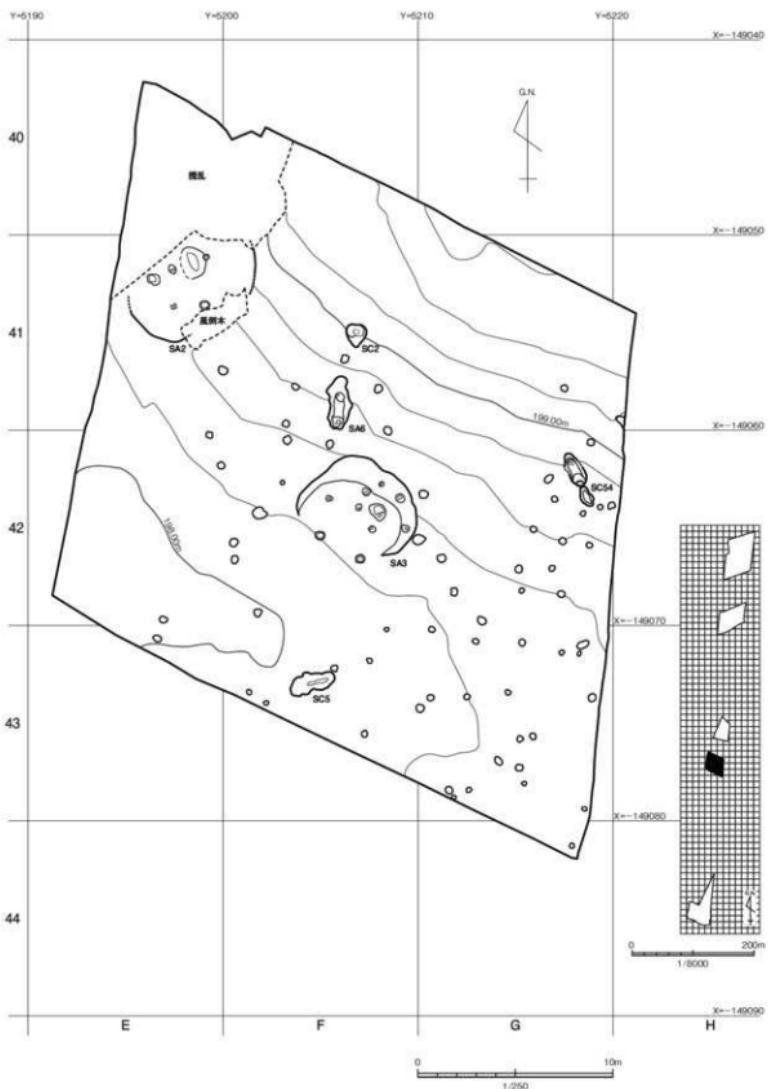
柱穴は、堅穴内および隣接した位置にて11基が検出された。床面の6基（P3～11）は直径0.4m前後、床面からの深さは0.25mと浅いが、P5のみ0.45mと深めであることから、おそらくP5は主柱穴の一つである可能性が高い。

遺物は検出面付近より土器片が出土している。浅鉢1固体、深鉢1個体を図化した。

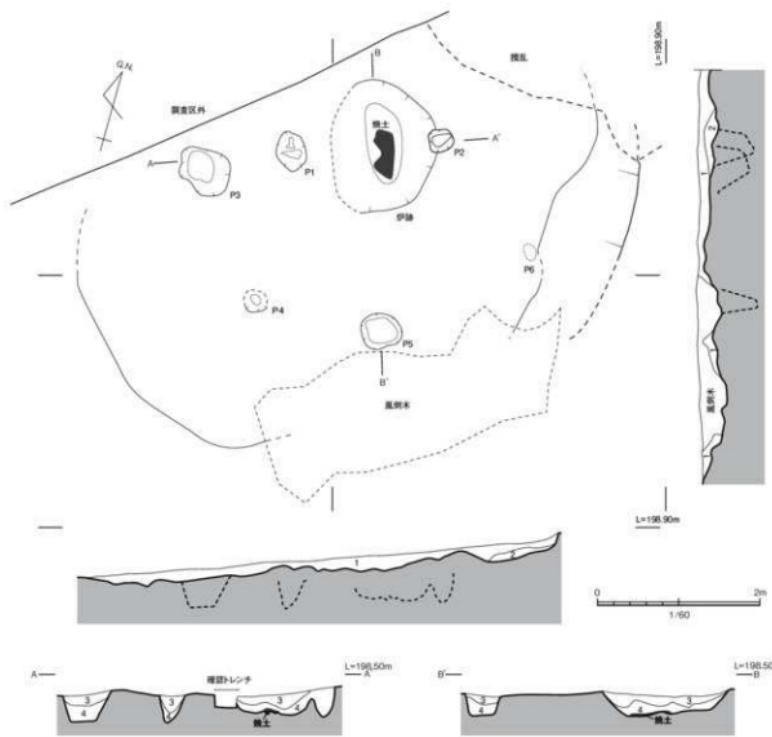
51は口径19.3cmで、口唇部に連続した刺突を施し、鋸歯状口縁を呈する。口縁部文様帶には連続した縦方向の短沈線を施し、外面は多方向に、内面は横方向に貝殻条痕文を施したのち一部ナデ調整される。

6号堅穴建物跡（第28図・出土遺物：第28図52）

調査区中央部のF41グリッドとF42グリッドに位置する堅穴建物跡である。検出面はVa層である。検



第24図 B区 繩文時代後期～晚期遺構分布図



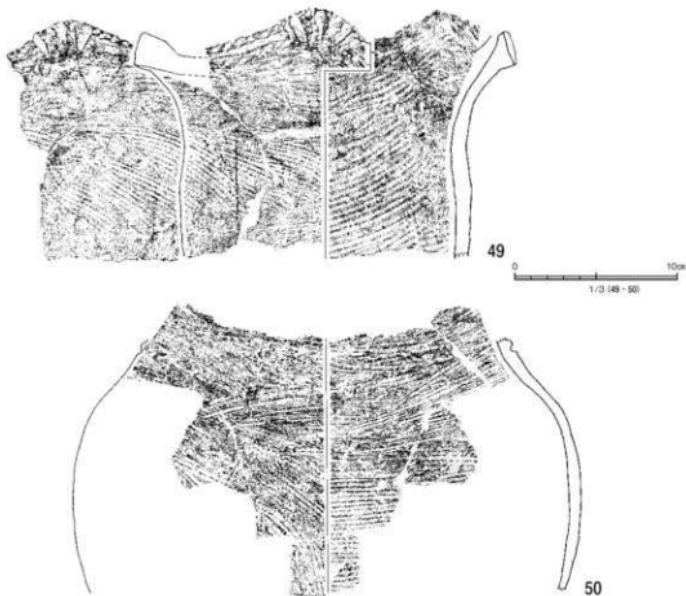
1. Hua10YR5/6 実測 シルト混じり粗砂 φ 5mm以下の黄褐色輕石を30%程度含む
 2. Hua10YR4/4 検査 シルト混じり粗砂 φ 1~2mmの黄褐色輕石を20%程度含む
 3. Hua10YR4/3 に近い實測 シルト混じり粗砂 φ 1~2mmの黄褐色輕石を30%程度含む φ 1~2mmの炭化物を5%程度含む
 4. Hua10YR3/3 検査 シルト混じり粗砂 φ 1~2mmの黄褐色輕石を20%程度含む φ 3mm以下の炭化物を5%程度含む

第25図 2号竪穴建物跡実測図

出時点では、竪穴の掘りこみは確認できず、土坑状の掘りこみを中心に放射状もしくは円形に巡る柱穴のみが検出された。検出面は後世の攪乱や削平を受けているため、竪穴の掘りこみが失われたものと判断したが、平地式の建物跡である可能性も残る。

中央に位置する土坑状の掘りこみは長軸約2.7m、短軸約1.1m、検出面より深さ20cm程度の楕円形で、さらに底部の長軸両端に直径0.4~0.6m、底面からの深さ0.7~0.9mの柱穴（P7・P8）が掘りこまれる。周囲の柱穴と比べて深く屋根を支える中心となる柱があったものと考えられる。

土坑状の掘りこみを囲む柱穴は、直径35~41cm、検出面からの深さ30~60cmの規模で6箇所（P1~6）検出された。これらの柱穴は、土坑の中心から2.2~2.8mと同程度の距離で放射状に配置され、その柱穴間も2.3~2.9mと概ね等間隔であることから、建物の主柱穴と判断される。土坑埋土は、暗灰黄色ないし暗褐色で霧島御池輕石を15~25%程度、炭化物を極少量含むシルト混じり粗砂である。



第26図 2号竖穴建物跡出土遺物実測図

遺物は、検出面付近より土器片が出土しており少なくとも縄文土器深鉢1個体が確認された。52がそれであり口径29.6cmでおそらくは口縁部が最大径となる。口唇部に連続した押圧が施される。口縁部文様帯から胴部にかけて凹線や沈線で文様を描き、線で囲まれた部分に何らかの工具による刺突が見られる。内面の調整には貝殻条痕文が施され、口縁部付近にスヌが付着している。

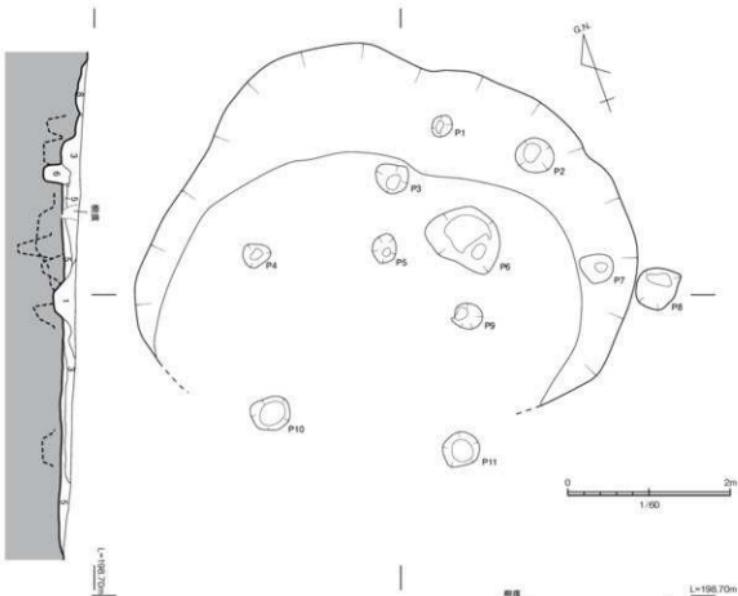
2号土坑（第29図）

調査区北部のF41グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は、隅丸三角形に近く、長径1.1m、短径1.0mである。断面形はすり鉢状に近く、南側は緩やかな傾斜がつく。検出面から底面までの深さは約0.68mである。中央の土坑の東側壁面では焼土面の存在が確認された。

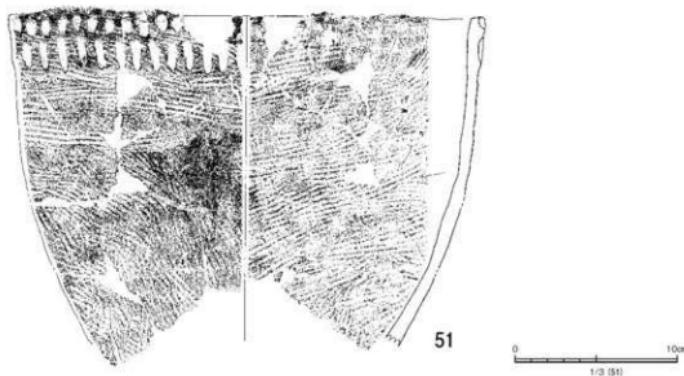
埋土は褐色ないしそれに近い明るめの色で、霧島御池軽石を25%程度と炭化物を5%程度含む粘土混じりの粗砂である。土坑中から遺物は出土しなかったが、埋土の各層とともに炭化物粒が含まれており、焼土面も存在することから、屋外炉として機能した可能性が考えられる。またその炭化物を試料としてAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、 3440 ± 20 年¹⁴CBPの測定値が得られた。

5号土坑（第29図）

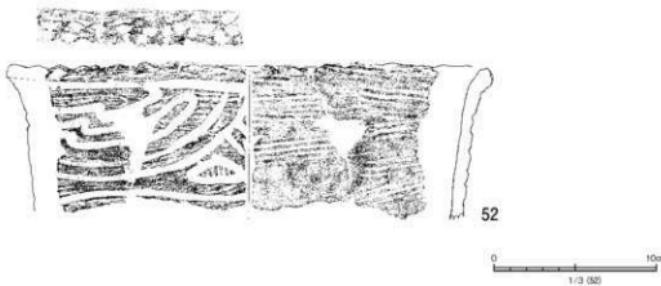
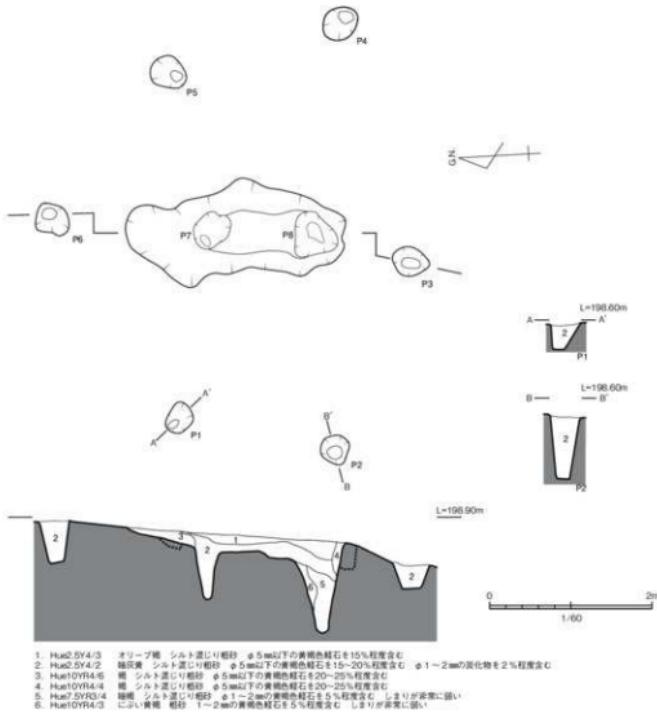
調査区南部のF43グリッドに位置し、Vc層上面にて検出された。平面形は、不整な楕円形で、長径2.4m、短径0.9mである。断面形は逆台形であるが立ち上がりが緩やかである。検出面からの底面までの深さは約0.48mである。埋土は霧島御池軽石を5~20%程度、炭化物をごく少量含むシルトないし粘土



1. Huo10YR4-2 灰青磚 シート混じり相鉄 φ5mm以下の黄褐色鉄石を25%程度含む φ1~2mmの炭化物を2%程度含む
2. Huo10YR5-4 にじる青磚 シート混じり相鉄 φ5mm以下の黄褐色鉄石を25%程度含む φ1~2mmの炭化物を5%程度含む
3. Huo10YR6-4 黄磚 シート混じり相鉄 φ5mm以下の黄褐色鉄石を25%程度含む φ1~2mmの炭化物を3%程度含む
4. Huo10YR3-3 黄磚 シート混じり相鉄 φ5mm以下の黄褐色鉄石を25%程度含む φ1~2mmの炭化物を3%程度含む
5. Huo10YR4-6 黄磚 シート混じり相鉄 φ5mm以下の黄褐色鉄石を15%程度含む φ1~2mmの炭化物を2%程度含む
6. Huo7.5YR4-2 反磚 シート混じり相鉄 φ5mm以下の黄褐色鉄石を20%程度含む φ1~2mmの炭化物を3%程度含む
7. Huo10YR4-1 にじる青磚 シート混じり相鉄 φ5mm以下の黄褐色鉄石を20%程度含む φ1~2mmの炭化物を3%程度含む
8. Huo10YR6-2 にじる青磚 相鉄 黄褐色鉄石が主体となる埋土 φ1~2mmの炭化物を3%程度含む



第27図 3号竖穴建物跡及び出土遺物実測図

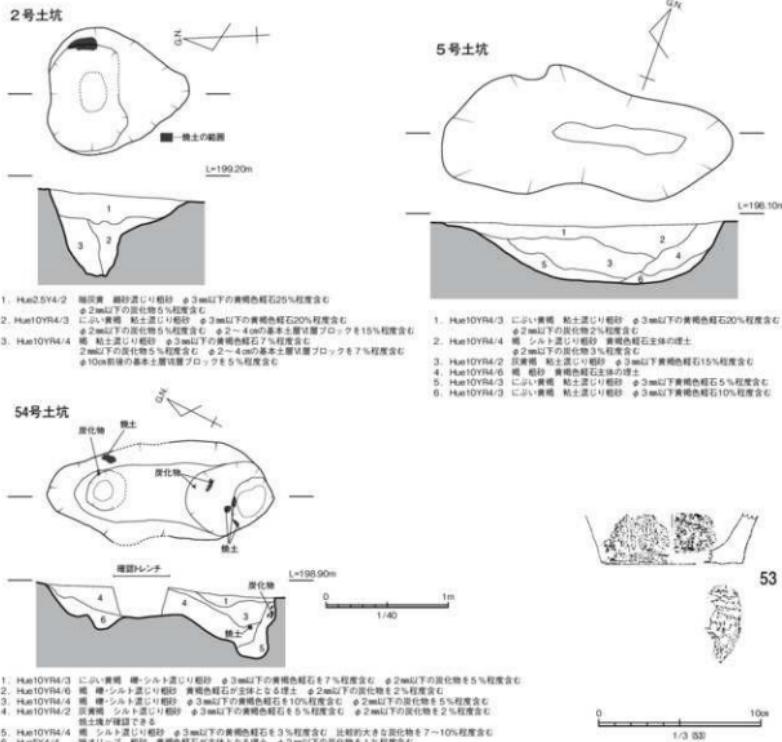


第28図 6号竪穴建物跡及び出土遺物実測図

混じりの粗砂で、土器等の遺物は出土しなかった。

54号土坑（第29図・出土遺物：第29図53）

調査区東部のG42グリッドに位置し、Vc層上面にて検出された。平面形は長径1.9m、短径0.8mで不整な梢円形プランを呈する。断面形は、北側に深めの掘り込みがあり検出面から最深部までの深さ49cm程の椀状に近い。埋土は褐色ないしにぶい黄褐色と明るめの色で、霧島御池軽石を5~10%程度と炭化物を5%程度含む粘土・礫混じりの粗砂である。埋土から大きめの炭化物が出土し焼土も確認されたため、屋外の炉跡であると考えられる。またその炭化物についてAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、 3400 ± 20 年 14 C BPの測定値が得られた。遺物は縄文土器の深鉢が1点出土している。53は粗製の深鉢の底部で外・内面ともに工具によるナデが施される。



第29図 2・5・54号土坑及び出土遺物実測図

(2) 遺物

土器 (第30~32図54~96)

54~62は縄文時代後期の深鉢で、いずれも破片である。

54~58は幅広の沈線文を主体とする一群である。54は口縁部文様帯に貝殻腹縁刺突文が施され、文様下部を2本の沈線で区切る。55~58は胴部片に一部、凹線や沈線文が施される。

59は口縁部で口縁部文様帯に沈線を巡らせ、その上に三日月状の凹点文が施される。60は胴部で、肩曲部直上に凹点文が等間隔に施される。61は底径7.0cmの底部で、胴部に向けて内湾する形状を呈する。やや上げ底となる。62は底径14.2cmの台付鉢の脚部で、裾端部に押圧文、外・内面に条痕が施される。

63~68は、縄文時代晩期の深鉢・鉢である。63は鉢の口縁部で、斜格子状の細い沈線文が施される。

64・65は深鉢の口縁部で口縁部文様帯に2~3本の沈線が巡り、ミガキによる調整が施される。66は口径31.3cmの深鉢で、口縁部がやや肥厚し、口唇部に突起を持つ。口縁部から頸部にかけて内湾し、胴部が逆「く」字形に屈曲する。粗いナデによる調整で補修孔が2つ施される。67は底径9.0cmの底部で、胴部最大径の部位に向けてほぼ直線的に伸びる。68は底径8.8cmの底部で、胴部に向けてやや外反する。

69は縄文時代後期の台付皿の口縁部である。口縁部内面上部に先の尖った工具による刺突文が等間隔で巡る。そのまま下部に1条の沈線を巡らせ、さらにその沈線の中に刺突文を施している。この刺突文も等間隔に巡らせていると推測される。

70~96は縄文時代晩期の浅鉢である。概して胴部が薄くミガキ調整後黒色化される。

70は口縁部から胴部である。口縁部が長くやや肥厚する。口縁部文様帯に文様が描かれるものと類似する器形である。口縁部と胴部は間に太い沈線で段を作ることで隔たれ、胴部はやや張り出す。

71~73は口縁部文様帯に沈線で文様を描くものである。71は2条の沈線文を巡らせ、その間に鋸歯状の文様が施される。72は3条の細く浅い沈線文が巡る。73は数条の細く浅い沈線文があり、口唇部は平坦でやや肥厚する。

74~76は口縁部に逆「く」字形に内折する文様部位を形成する。外側に面を形成し、そこに浅い横方向の沈線文が1条巡る。74は口唇部にも1条の沈線文が巡り口縁端部の断面形は逆台形を呈す。

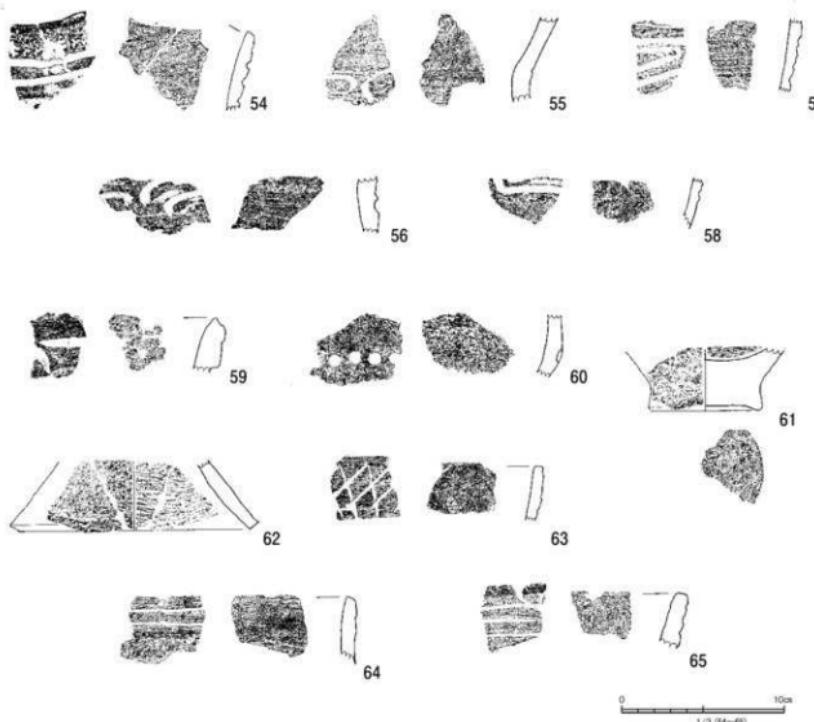
77~81は口縁部内面に沈線等で明瞭な段を作り、外面に区画沈線を施すことで口縁部端部に玉環状の区画された部位を形成する。口縁部から頸部にかけて内湾する。77には補修孔がある。78は口縁部から底部である。胴部は棱をなし逆「く」字形に屈曲し、底部は丸底で半球体を呈する。

82~84は口縁部内面に段を作り出し、低い台形・半円形の突出部を形成する。82~84は頸部が胴部にかけて内湾し、83は頸部が短い。82~83は胴部が棱をなして屈曲する。

85~89は口縁部内面に段を作り出し、低い台形・半円形の突出部を形成する。85~88は口縁部と胴部が鋭角に接合する。85は胴部が棱をなし逆「く」字形に屈曲する。87は胴部が棱はないものの鋭角気味に張り出し扁球状を呈す。89は口縁部と胴部がほぼ直角に接合する。

90は口縁部で口縁端部に鱗状突起を有し、口縁部文様帯に1条の沈線が巡る。91は胴部で弓状に張り出し全体形は扁球状を呈す。92~93は口縁部で93はやや内湾している。94~95は胴部で、棱をなし逆「く」字形に屈曲する。

96は縄文時代晩期~後期に属すると推定される小型で椀状の特殊器種である。外・内面ともミガキで調整され、小さな穿孔を有する。底部の形状は不明である。

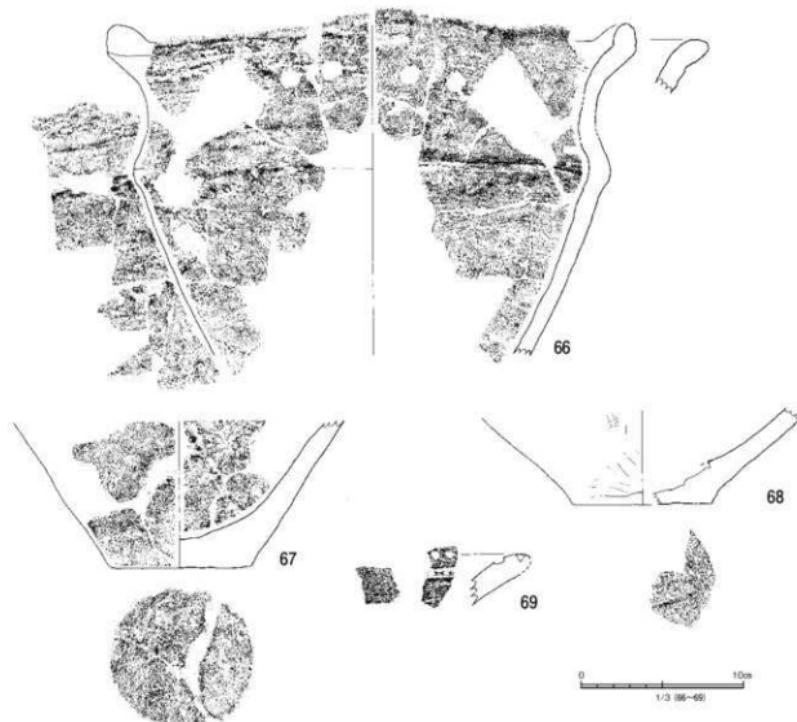


第30図 B区 繩文時代後期～晩期土器実測図（1）

石器（第33・34図97～131）

B区では石鎚15点、楔形石器1点、スクレイバー1点、管玉1点、石斧10点、二次加工剥片2点、使用痕剥片1点、礫器2点、敲石10点、有溝砥石2点が出土し、35点を図化した。

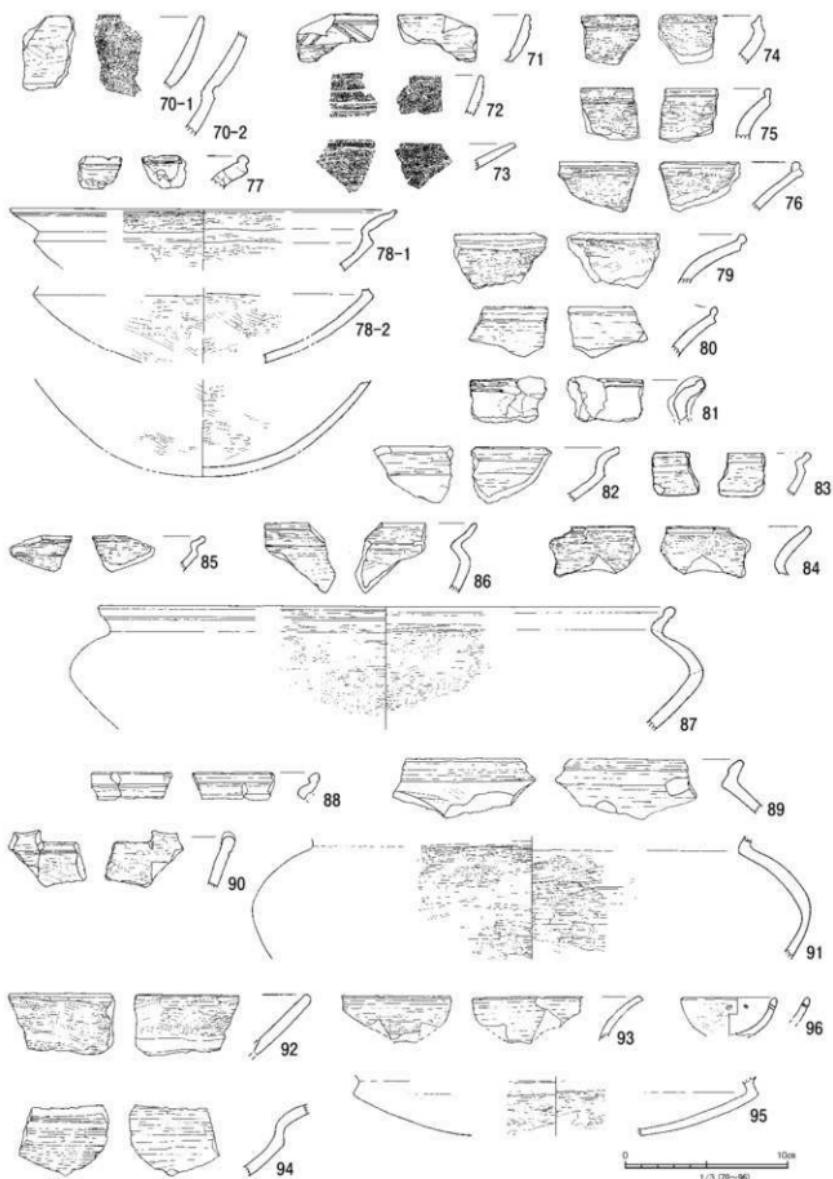
97～111は石鎚である。15点出土し全て図化した。鎚身部の形状では、正三角形に近いもの（97～101）、縦長の二等辺三角形状のもの（102～110）、その他（111）がみられる。基部形状では、抉りが無いもの（105・107）、浅いアーチ状の抉りを有するもの（103・106・110）、比較的深い抉りを有するもの（97・98・99・100・101・102・108・109・111）がある。石材としては、ガラス質安山岩、チャート、黒曜石（腰岳産・姫島産・桑ノ木津留産）が使用されている。112はチャート製の楔形石器で、基部及び右側側面は直線的、左側側面は弧状を呈する。刃部としている部分が石斧の側縁部の可能性もある。114はクロム白雲母質の管玉である。色調は緑色で1cm大の筒状を呈し磨痕が見られる。115～118は石斧である。10点出土しうち4点を図化した。115は基部を欠くが、刃部が撥型に開く打製石斧で、刃部が弧状を呈する。116は完



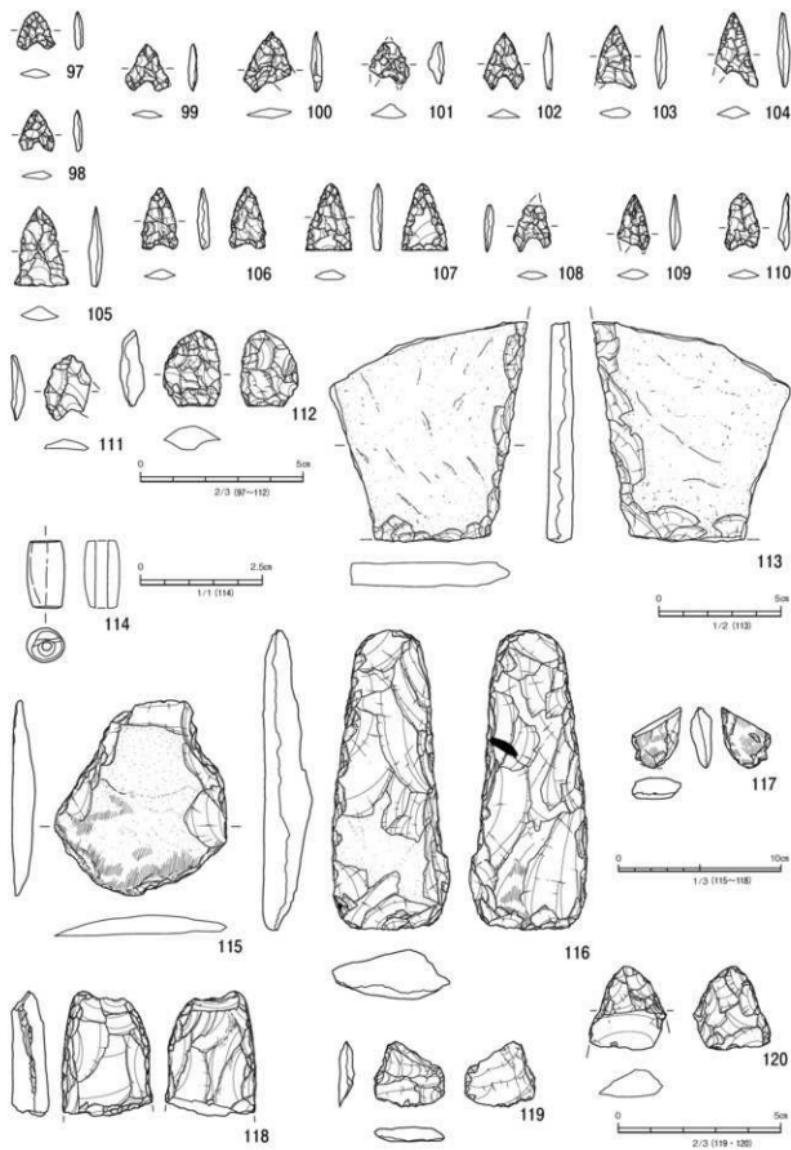
第31図 B区 繩文時代後期～晩期土器実測図（2）

形の打製石斧で、基部よりもやや刃部が広い短冊形を呈する。なお、基部と刃部は折れた状態で別々に出土した。117は基部と刃部の一部が欠損した小型の磨製石斧とみられる。118は刃部が欠損した打製石斧の基部である。圓化した石斧の石材は全てホルンフェルスである。119・120は刃部形成等の二次加工が行われた二次加工剥片で、石材は、119がチャート、120がガラス質安山岩である。121は砂岩製の使用痕剥片で、短縁部に微細な剥離を有する。122・123は砂岩製の礫器である。122は一側縁に外・内面から加工を施し、刃部を作出している。また、自然面の広い範囲に磨面が見られる。123は断面三角形状を呈する一側面を刃部として利用している。また、全面が被熱により赤化している。

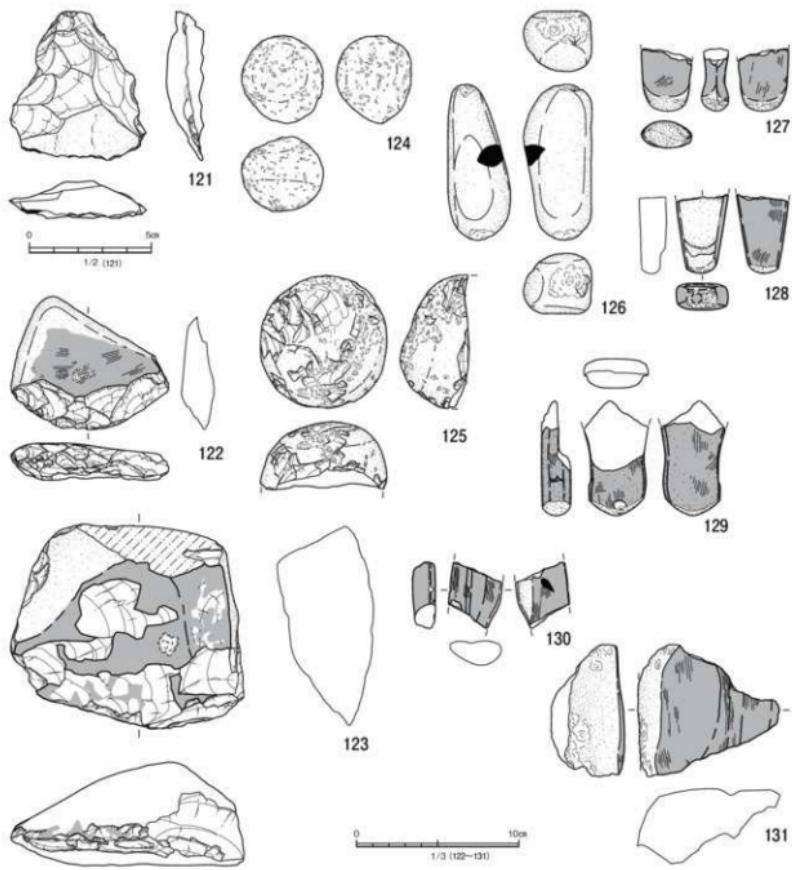
124～129は敲石である。10点出土しうち6点を圓化した。124・125は球形を呈するとみられるが、125は半分以上欠損している。126は縱長で丸みを帯び、両端部に叩打痕がみられる。127～129は表面が磨られ端部に浅い敲打痕が見られる。石材は、124は安山岩、125～129は砂岩である。130・131は砂岩製の有溝砥石である。いずれも溝状の窪みがあり磨痕も認められる。



第32図 B区 縄文時代後期～晩期土器実測図（3）



第33図 B区 繩文時代後期～晩期石器実測図（1）



第34図 B区 繩文時代後期～晩期石器実測図（2）

3 C区の遺構と遺物

C区で検出された遺構は、堅穴建物跡が3軒（8号・9号・10号）、土坑が9基（25号・45号・27号・42号・29号・31号・32号・44号・43号）、小穴が124基である。A区同様に土地の高いところとなる北東部は、削平や攪乱を受けており一部欠損した遺構がある。包含層より出土した遺物は、調査区南西側にある谷に向かって多くなる傾向が認められた。なお、D66グリッドより検出された95号小穴からは、土器片がほぼ1固体分（194）出土している。

（1）遺構

8号堅穴建物跡（第36図・出土遺物：第37～40図132～155）

調査区北部のE62グリッドに位置する堅穴建物跡である。すぐ南西には9号堅穴建物跡が隣接する。調査区北側は、かなりの深度で削平されていたため、検出面はVc層ではなく表土直下のK-Ah層である。

堅穴の平面形は、不整な円形プランで、東側方向がやや張り出し気味となる。直径は約3.7m前後で、検出面から床面までの深さは検出面から0.3mである。床面積は約6.9m²である。掘り込みの立ち上がりはやや弱く、皿状ないしすり鉢状に近い。

住居床面は、概して平坦で、K-Ah層を掘削して直床とする。床面中央付近には長軸約1.2m短軸0.9mの楕円形の浅い掘り込みがあり、底面にて焼土面が確認されたため屋内炉と判断される。

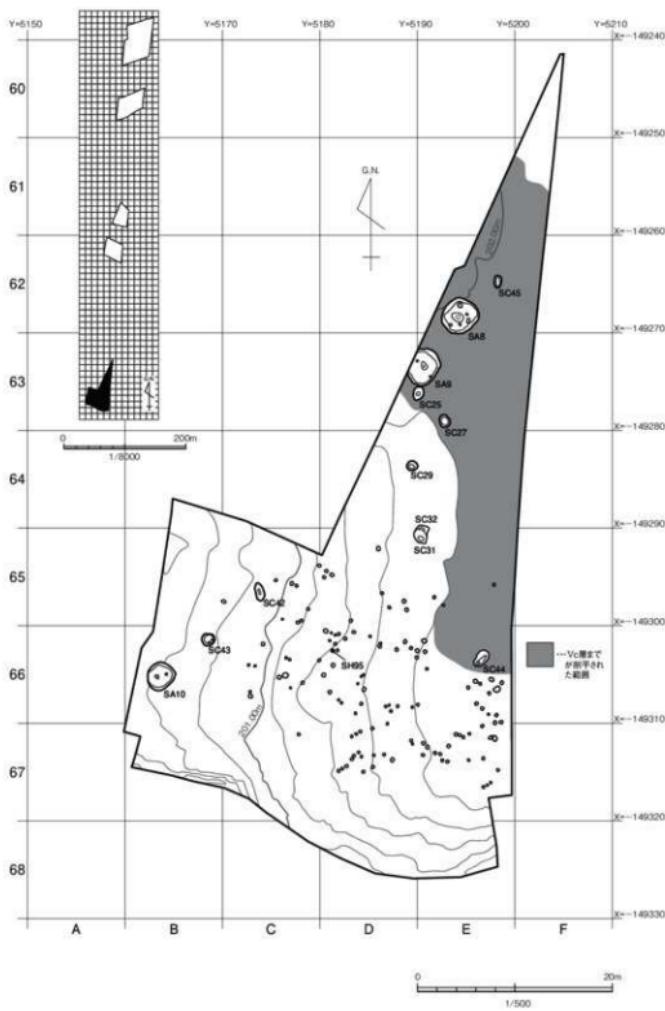
柱穴は、屋内炉を囲むように5基（P1～P5）検出された。これらは直径約0.2～0.5m・床面からの深さ約0.2～0.3mでしっかりと掘りこまれていることから、屋内炉を中心で放射状、または屋内炉を挟むように対置する柱穴の配置が読み取れる。P5は土層断面の観察から柱の建て替えが行われた可能性がある。埋土は黄褐色ないし暗褐色で霧島御池軽石を25%程度、炭化物を10%程含むシルト混じりの粗砂である。

遺物は床面付近からまとめて出土した。特に縄文土器は、少なくとも深鉢・鉢27個体以上、浅鉢7個体、円盤状土製品1個体が確認された。このうち深鉢16点、鉢1点、浅鉢4点、円盤状土製品1点を図化した。

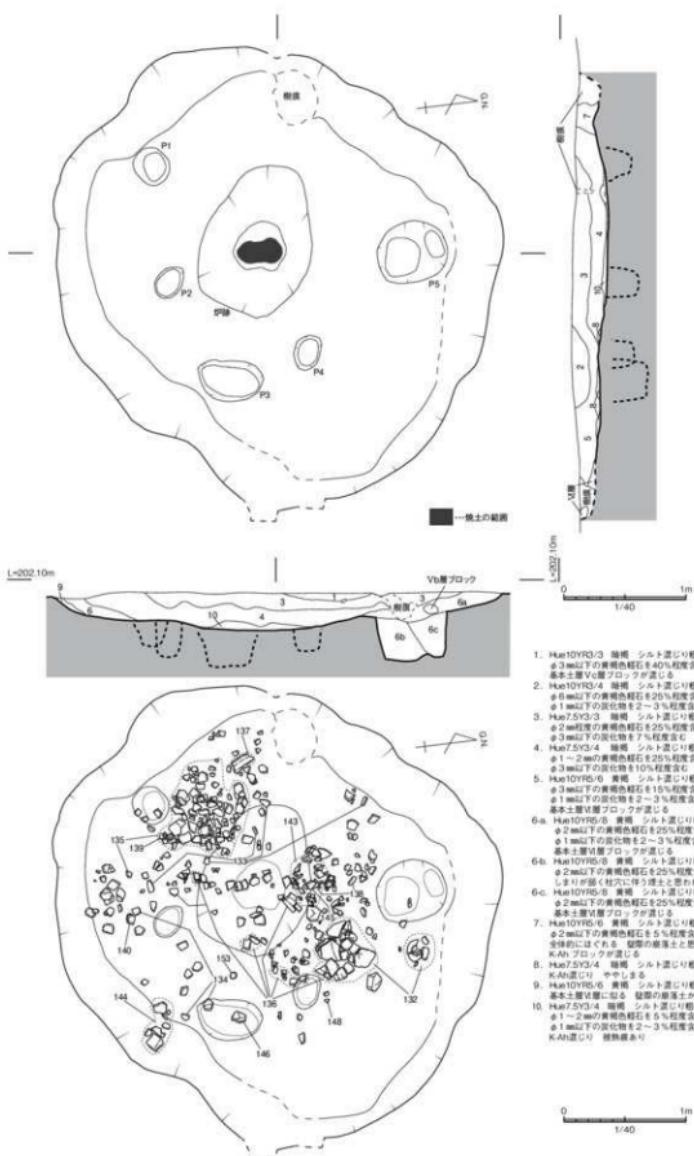
132～147は深鉢である。132～139は口縁部が肥厚し、胴部は張り出し胴部最大径のところで明瞭な稜をなさず、鈍く屈曲する器形のものである。132は口縁部がやや外反し、底部は平底で胴部に向けて内湾する。外面は多方向のミガキ、内面は工具ナデで調整され、外面の一部にススが付着している。口径29.5cm底径7.0cm。133・134は口縁部がやや外反し胴部は緩やかに張り出す。133は外面が斜方向のミガキで調整されススが付着している。134は外面が多方向のミガキ、内面が工具ナデにより調整される。135は口縁部がやや外反し、底部は平底で胴部に向けて内湾する。口径39.5cm底径8.2cm。136は外面がナデ後工具によって調整され、口径26.4cmである。外面胴部に炭化物が付着しており、AMS法による放射性炭素分析を実施した結果 3020 ± 20 年¹⁴CBPの測定値が得られた。137は口径29.7cmである。138は口縁部が僅かに外反する。外面は工具ナデで調整され、ススが付着している。口径19.4cm。139は内面風化気味、外面横方向のナデにより調整される。132に類似する。

140・141は口縁下部が肥厚し、口縁部文様帶に数本の沈線がめぐるものである。いずれも口縁部がやや外反し、口縁部の断面形は口唇部に向けて細くなる形状をなす。140は口縁部文様帶に4本の沈線が巡る。外面はナデ、内面は横方向の丁寧なナデ調整され、口縁部にススが付着している。141は口縁部文様帶に3本の沈線が巡る。

142～175は口縁部が肥厚せず、胴部最大径のところではっきりとした稜をなして屈曲する器形のものである。142は口縁部に肥厚帯が退化したものと推測される突起状の高まりが巡る。底部は平底で胴部に向けてやや内湾する。外面は工具ナデで調整され一部黒斑がみられる。口縁部にススが付着している。

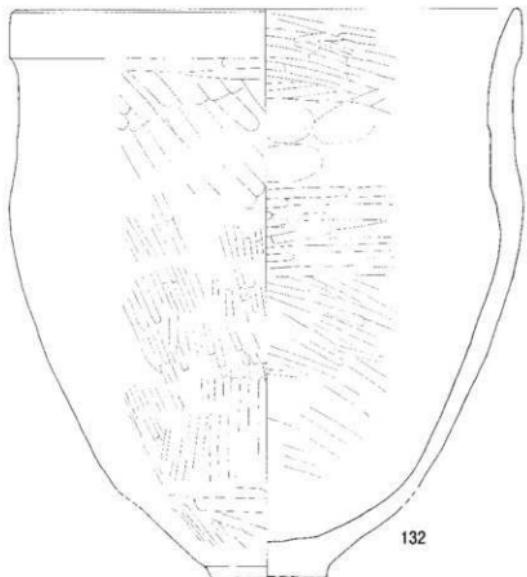


第35図 C区 繩文時代後期～晩期遺構分布図



第36図 8号竪穴建物跡実測図及び遺物出土状況図

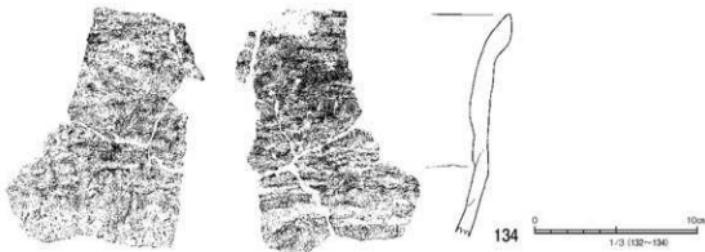
1. Hu10YR3/3 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 3 mm以下の黄褐色粘土を5%程度含む
基本土質層 ブラックガルニッシュ
2. Hu10YR3/4 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 6 mm以下の黄褐色粘土を2%程度含む
φ 1 mm以下の黄褐色粘土を2%程度含む
3. Hu7SY3/3 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 2 mm以下の黄褐色粘土を2.5%程度含む
φ 3 mm以下の黄褐色粘土を1%程度含む
4. Hu7SY3/4 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 1~2 mmの黄褐色粘土を2.5%程度含む
φ 3 mm以下の黄褐色粘土を10%程度含む
5. Hu10YR5/6 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 3 mm以下の黄褐色粘土を2.5%程度含む
φ 1 mm以下の黄褐色粘土を2~3%程度含む
基本土質層 ブラックガルニッシュ
6. a. Hu10YR5/6 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 3 mm以下の黄褐色粘土を2~3%程度含む
基本土質層 ブラックガルニッシュ
6. b. Hu10YR5/6 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 3 mm以下の黄褐色粘土を2~3%程度含む
シリカガラスくず穴に埋まる認定土と想われる
KAh ブラックガルニッシュ
7. Hu10YR5/6 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 2 mm以下の黄褐色粘土を5%程度含む
中空の筒状の石器の内部に埋まる認定土と想われる
KAH ブラックガルニッシュ
8. Hu7SY3/4 黄褐色 シート泥じり粘土
KAH泥じり サルナマリ
9. Hu7SY3/4 黄褐色 シート泥じり粘土
基本土質層に埋まる認定の基盤土
10. Hu7SY3/4 黄褐色 シート泥じり粘土
φ 1~2 mmの黄褐色粘土を5%程度含む
φ 1 mm以下の黄褐色粘土を2~3%程度含む
KAH泥じり 植被根あり



132

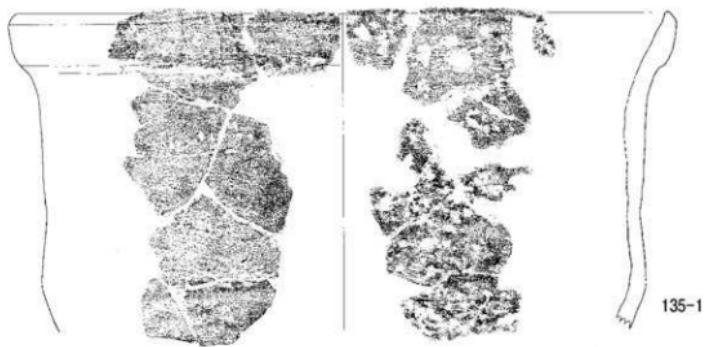


133

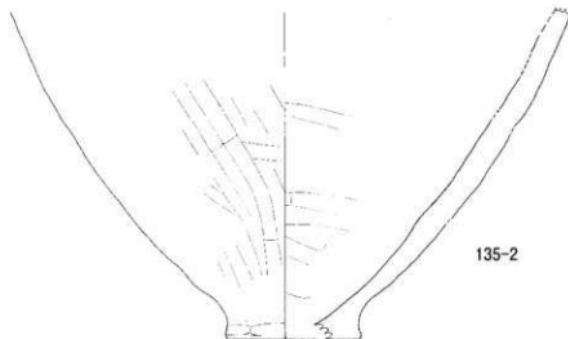


134

第37図 8号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



135-1



135-2

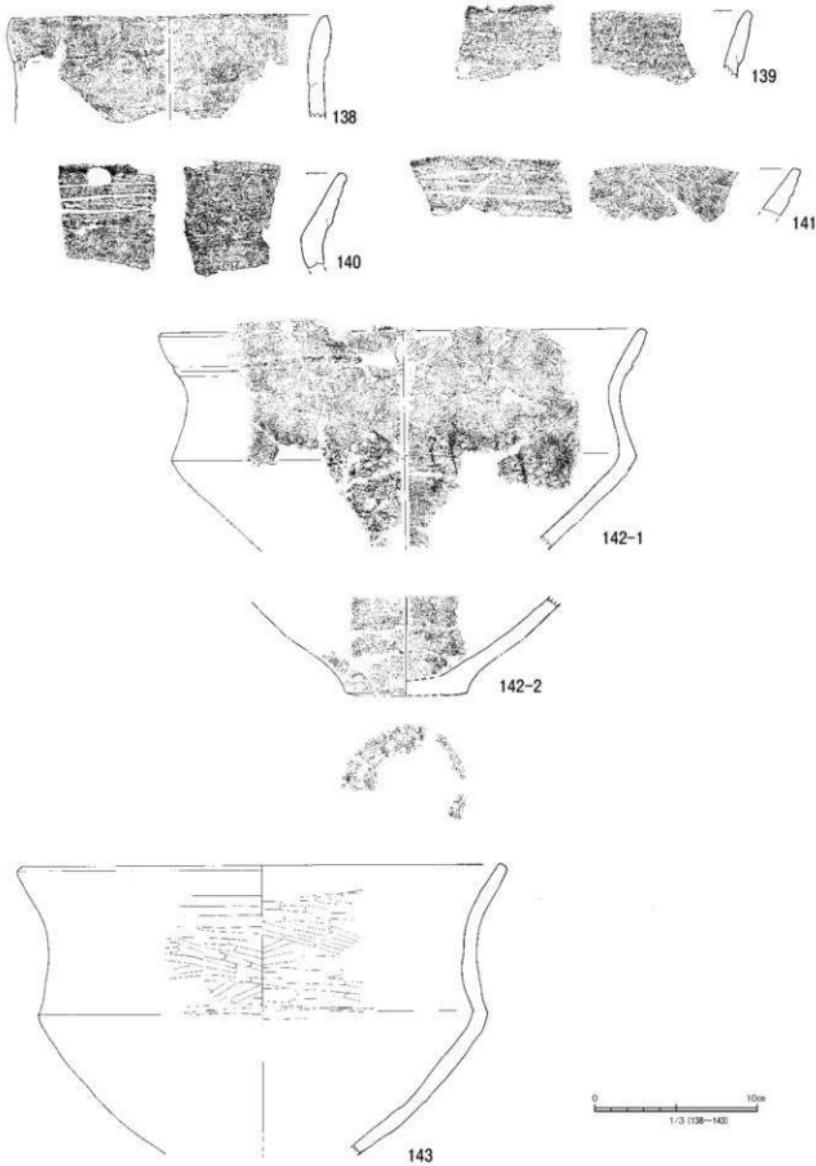


136

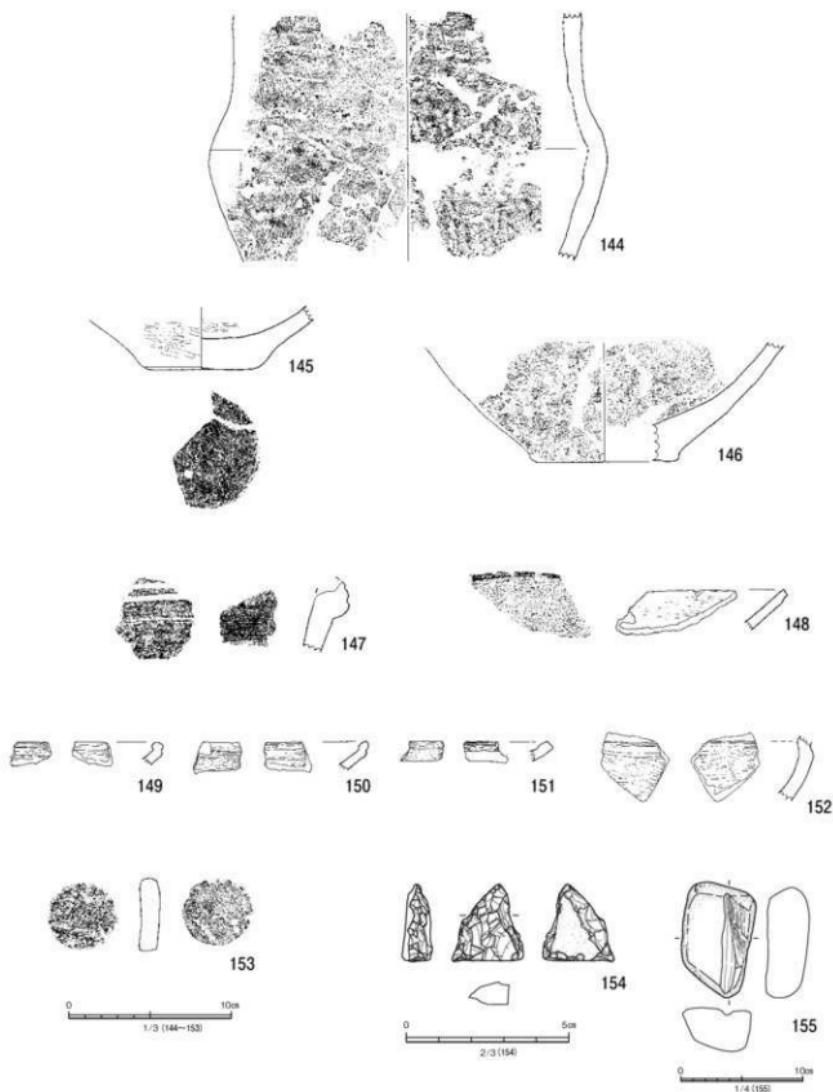


137

第38図 8号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)



第39図 8号竖穴建物跡出土遺物実測図 (3)



第40図 8号竪穴建物跡出土遺物実測図（4）

口径29.3cm底径7.4cm。143は両面とも屈曲部上が斜方向のミガキ、下が横方向のナデで調整される。口径29.2cm。144は胴部で外面にススが付着する。

145・146は平底の底部で、胴部に向けて内湾する。145の調整は外面がミガキとナデが混在しており、内面がミガキである。一部ススが付着している。146は底径9.0cmで、ナデ調整され一部ススが付着する。

147は口縁部で、肥厚し口縁部文様帶に横方向の広めの沈線文が2条巡る。斜方向のミガキで調整される。

148は鉢である。口唇部に細めの沈線が巡る。外面はナデ、内面はミガキ調整されススが付着している。

149～152は縄文時代晩期の浅鉢である。概して胴部が薄くミガキ調整後黒色処理される。149・150は口縁部内面に沈線等で明瞭な段を作り、外面に区画沈線を施すことで口縁部端部に玉縁状の区画部位を形成する。151は口縁部内面に段を作り出し、低い台形・半円形の突出部を形成する。

153は円盤状土製品である。

石器は2点出土している。154は刃部調整と思われる加工はあるが粗製で石鎌もしくはスクレイバー等の未完成である可能性がある。155是有溝砥石である。溝には擦痕が認められる。

また床面付近より少量の炭化物も出土しており、AMS法による放射性炭素分析を実施した結果、 3015 ± 20 年¹⁴C BPの測定値が得られた。

9号竪穴建物跡（第41図・出土遺物：第42～45図156～175）

調査区北部のD63グリッドとE63グリッドに位置する竪穴建物跡である。すぐ北東には8号竪穴建物跡が隣接し、8号竪穴建物跡と同じく検出面は表土直下のK-Ah層である。

竪穴の平面形は、直径約3.6mの不整な円形プランを呈し、北西側は搅乱により一部削平されている。検出面から床面までの深さは0.23mで、掘り込みの立ち上がりはやや弱く浅めの皿状ないしすり鉢状に近い。床面積は約6.7m²。

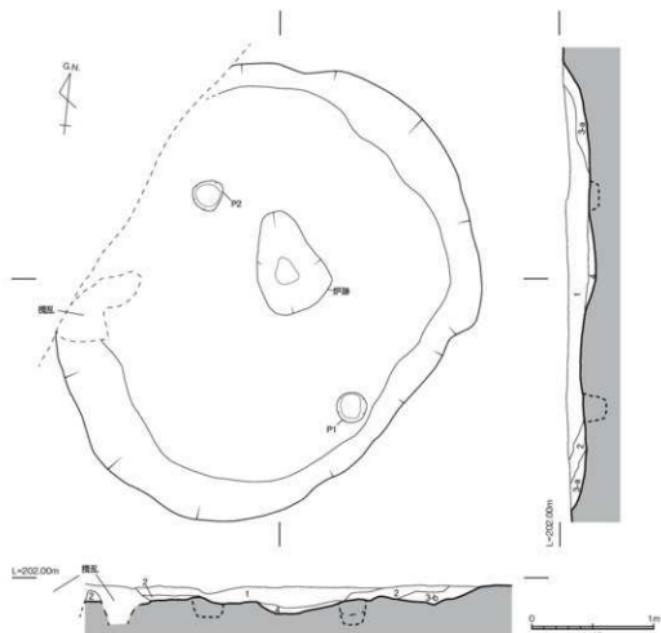
床面は概して平坦で、K-Ah層を掘削して直床とする。床面中央付近には長軸約0.8m短軸約0.6mの楕円形の浅い掘り込みがあり、焼土混じりの埋土が確認されており屋内炉と判断される。埋土は、黄褐色ないし暗褐色で露島御池軽石を5～10%程度、炭化物を2～3%程含むシルト混じりの粗砂である。

柱穴は、屋内炉をはさむように2基（P1～P2）検出された。柱穴の規模は直径約0.25m、床面からの深さは約0.2mである。平面的な位置関係から主柱穴であると考えられるが、掘り込みの深さは浅めである。

遺物は床面付近からまとめて出土した。縄文土器は、少なくとも深鉢18個体、浅鉢6個体が確認された。そのうち、深鉢11点、浅鉢7点を図化した。

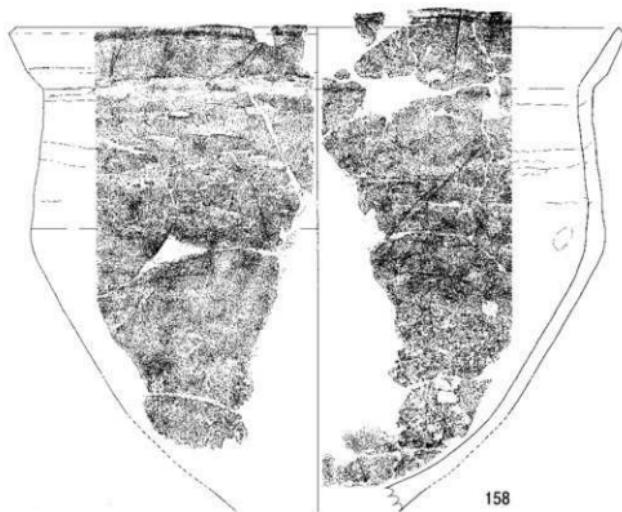
156～166は深鉢である。156は口縁部から胴部である。口縁部は肥厚しやや外反する。胴部は張り出し胴部最大径のところで明瞭な稜をなして屈曲する。調整は、外・内面ともに風化気味であるが、外面が斜方向のミガキ、内面がナデである。内面の一部にススが付着している。

157～159は口縁部が肥厚し、胴部は張り出し胴部最大径のところで鈍く屈曲する器形のものである。157は口縁部から底部である。口縁部はやや外反し、口唇部は工具により平坦に調整され一部沈線状に窪む。底部は平底で、胴部に向かってやや内湾する。口径35.0cm、底径8.5cm。158は口縁部がやや外反し、口唇部は平坦に調整される。外面は多方向の工具ナデ、内面は横方向のナデで調整される。外面一部にススが付着している。159は外面が横方向のミガキ、内面がケズリ状のナデにより調整される。口径28.4cm。160は肥厚帯下に穿孔がある。外面は横方向のナデで調整され一部ススが付着している。

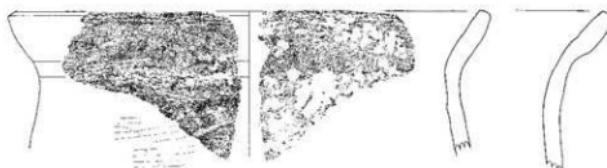


第41図 9号竪穴建物跡実測図及び遺物出土状況図

1. Hu610YR3-3 磚塊 シルト混じり粗粒
φ 5 mm以下の黄褐色粗粒土を5~10%程度含む
φ 1 mm以下の変化粒物を2~3%程度含む
2. Hu610YR3-4 磚塊 シルト混じり粗粒
φ 5 mmの黄褐色粗粒土を15%程度含む
φ 1 mm以下の変化粒物を2~3%程度含む
- 3.a. Hu62SYT1-4 磚塊 シルト混じり粗粒
φ 5 mmの黄褐色粗粒土を7%程度含む
- 3.b. Hu610YR3-3 磚塊 シルト混じり粗粒
φ 5 mmの黄褐色粗粒土を7%程度含む
4. Hu610YR3-2 磚塊 シルト混じり粗粒
φ 5 mmの黄褐色粗粒土を5%程度含む
φ 1~2 mmの黄褐色粗粒土を5%程度含む 土壌混じり



158



159



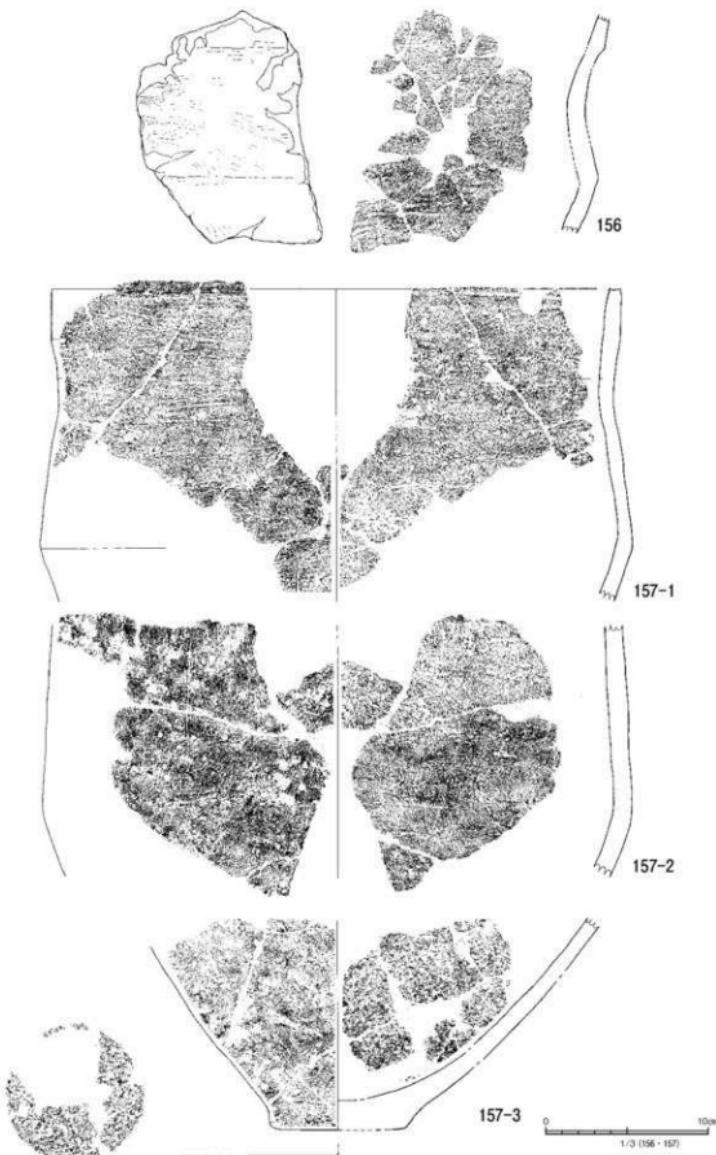
160

0
1/3 (158~160)
10cm

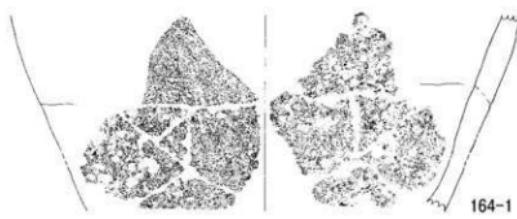
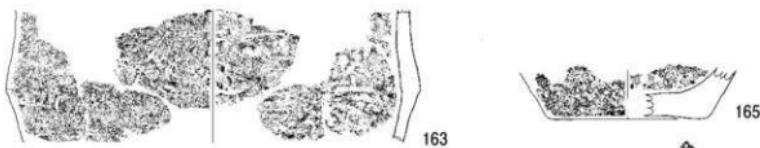
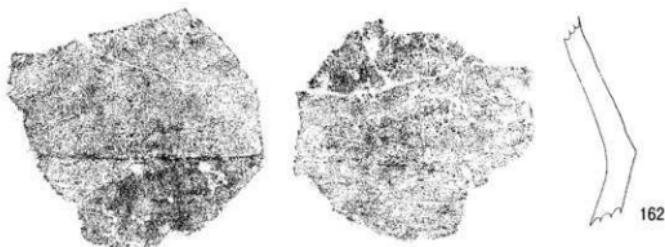
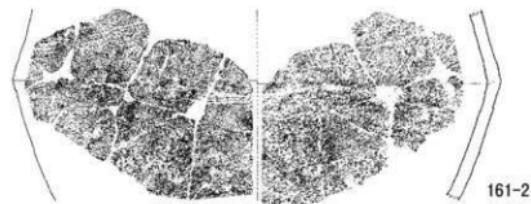
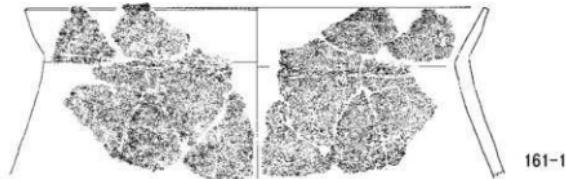
第42図 9号竖穴建物跡出土遺物実測図（1）

161～163は口縁部が肥厚せず、胴部は張り出し胴部最大径のところではっきりとした稜をなして屈曲する器形のものである。161は口縁部がやや外反する。外面は口縁部が横方向のナデ、胴部が多方向の工具ナデで調整され、内面はナデである。口径27.9cmである。162・163は外面一部にススが付着する。163は外面が工具ナデで調整され、内面は風化気味である。

164は平底の底部で胴部にかけて内湾する。調整は外面が斜方向の工具ナデ、内面は風化が著しく不

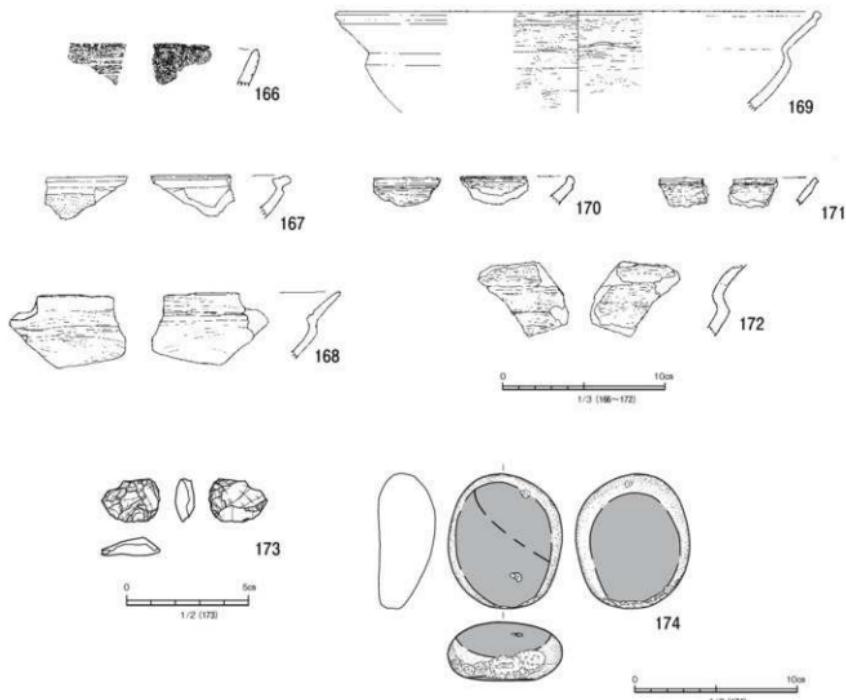


第43図 9号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)



0
1/3 (161-165)
10cm

第44図 9号竖穴建物跡出土遺物実測図 (3)



第45図 9号竪穴建物跡出土遺物実測図（4）

明で底径5.2cmである。165は上げ底氣味の底部でやや外反し、胴部に向けて直線的に伸びる。外・内面ともに風化が著しい。

166～172は縄文時代晩期の浅鉢である。概して胴部が薄く、ミガキ調整後黒色処理される。166は口縁部文様帶に4条の細く浅い沈線文が巡る。

167は頸部が短く、胴部と直角ないし銳角に接合する。口縁端部内面には小さな段を有する。168は口縁部から胴部で、口縁部の断面形は三角形状を呈し口唇部に向けて細くなる。頸部が長く内面の頸部と胴部の接合部付近に1条の沈線文が巡る。

169～171は口縁部内面に沈線等で明瞭な段を作り外面に区画沈線を施することで口縁部端部に玉縁状の区画部位を形成する。172は胴部で、明確な棱をなして張り出す。

石器は2点出土している。173は刃部調整等の加工はあるが粗製で石鎚もしくはスクレイバー等の未成品である可能性がある。174は扁平な楕円形の磨敲石で、両面が磨られ長軸端部に敲打痕が見られる。

10号竪穴建物跡（第46図・出土遺物：第46図175～177）

調査区西部のB66グリッドに位置する竪穴建物跡である。西側には36号土坑が隣接し、検出面はVc層上面である。

竪穴の平面形は、直径約3.0m前後の不整な円形プランを呈する。検出面から床面までの深さは約0.16mで、その掘り込みは立ち上がりのやや弱い皿状に近い。床面積は約42m²である。

床面は概して平坦で、Vc層を掘削して直床とする。床面中央付近には直径約0.5mの円形の浅い掘り込みがあり、焼土混じりの埋土が確認されたため屋内炉と判断される。なお、屋内炉に西側は、攪乱（現代の芋貯蔵穴）によって失われている。

埋土は、褐色ないし暗褐色土で霧島御池軽石を10～25%程度、炭化物を2～3%程含むシルト混じりの粗砂である。柱穴は床面東側に1基（P1）検出された。柱穴の規模は直径約0.3m、床面からの深さは約0.1mである。これを主柱穴とするならば、もう一基は攪乱部分に存在したものと推測される。

遺物は、土器が少なくとも深鉢2個体以上出土している。175は口縁部から胴部で口縁部内面に明確な段をなし、口縁端部を立ち上がらせることで口縁部文様帯を形成している。そこに幅広の沈線を2条巡らせる。口縁部から頸部にかけて内湾し、胴部は肩をもつような形状で外側へ張り出す。調整は外面上部が横方向のミガキ、下部が斜方向のミガキで、内面上部が横方向のミガキ、下部が縱方向横方向のミガキとなる。176は胴部から底部である。胴部は張り出し胴部最大径のところで鈍く屈曲する。底部は安定した平底である。外・内面ともにナデ調整され一部ススが付着している。底径6.0cm。

石器は1点出土している。177がそれであり、スクレイバーで直線的な刃部を持つ削器である。

25号土坑（第46図・出土遺物：第46図178）

調査区北部のD63グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は不整な円形で、直径約1.0m、検出面からの深さは約0.45mである。断面形は逆台形状で立ち上がりの角度はやや強い。埋土は暗褐色土で霧島御池軽石を25%程度含む粘土混じりの粗砂である。

遺物は縄文土器が少なくとも深鉢1個体以上出土している。178は口縁部片であり、肥厚し断面形が三角形状を呈する。調整は外・内面ともに横方向のナデである。

45号土坑（第47図・出土遺物：第47図179）

調査区北部のE62グリッドに位置し、Vc層上面にて検出された。平面形は不整な楕円形で長軸約1.3m、短軸約0.7m、検出面からの深さは約0.2mである。断面形は皿状であり、立ち上がりは緩やかである。埋土は、暗褐色土で霧島御池軽石を10～25%程度、炭化物をごく少量含む粘土混じりの粗砂を示す。

遺物は縄文土器が少なくとも深鉢1個体以上出土している。179は深鉢の口縁部である。肥厚し、断面形が台形状を呈する。調整は外・内面ともに横方向のナデである。

27号土坑（第47図・出土遺物：第47図180～182）

調査区北部のE63グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.3m、短軸約0.9m、断検出面からの深さは0.3m。断面形は立ち上がりの緩やかな椀状である。埋土は黄褐色、褐色、暗褐色と明るめの色調で霧島御池軽石を10～25%程度、炭化物をごく少量含む粘土混じりの粗砂である。

遺物は縄文土器が少なくとも深鉢1個体以上、浅鉢2個体以上が出土している。180は深鉢の口縁部で、にぶい稜をなして外反する。口唇部は平坦で横方向の工具痕が見られる。調整は外・内面ともに横方向のナデである。181・182は浅鉢である。概して胴部が薄くミガキ調整後黒色処理される。181は口縁部に逆「く」字形に内折し、小さな文様帶部位を形成する。外側に面を形成し、そこに浅い横方向の沈線文が1条巡る。内折部と外側の沈線内に赤色顔料が残る。182は胴部で、扁球状に張り出す。

42号土坑（第47図・出土遺物：第47図183）

調査区西部のC65グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.8m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.3mである。土坑の南西部分は削平を受けている。断面形は皿状で、立ち上がりはやや急である。

埋土は、暗褐色で霧島御池軽石を5～15%程度含む粘土混じりの粗砂で、しまりが強い。

遺物は組織痕土器が1点出土している。183がそれであり、口縁部文様帶に突帯状の高まりが巡る。胴部から底部にかけて編み目状の圧痕が残り、ボウル状の底部であると推測される。調整は外・内面とともに横方向のナデもしくは工具ナデである。口縁部付近に炭化物が付着しており、AMS法による放射性炭素分析を実施した結果、 2505 ± 20 年 14 C BPの測定値が得られた。

29号土坑（第48図）

調査区北部のD64グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は不整な円形で直径約1.1m、検出面からの深さは約0.25mである。断面形は立ち上がりの緩い椀状である。埋土は黒褐色土で、霧島御池軽石を10～40%程度含む粘土混じりの粗砂である。遺物は出土していない。

31・32号土坑（第48図）

調査区中央部のD65・E65グリッドに位置し、Vc層上面にて31号土坑が32号土坑を切る形で検出された。31号土坑の平面形は、長軸約1.4m短軸約1.1mで不整な楕円形プランを呈す。31号土坑の断面形は、立ち上がりがはっきりとしており検出面から最深部までの深さ34cm程度の椀状に近い。32号土坑は切られているが上端の一部と底面は残存しており深さ29cmの不整な楕円形プランであると推測される。埋土は、31号土坑が暗褐色土で霧島御池軽石を5～40%程度含む粘土混じり粗砂で、32号土坑が黒褐色で霧島御池軽石を10～25%程度含む粘土混じりの粗砂を示す。遺物は出土していない。

43号土坑（第48図）

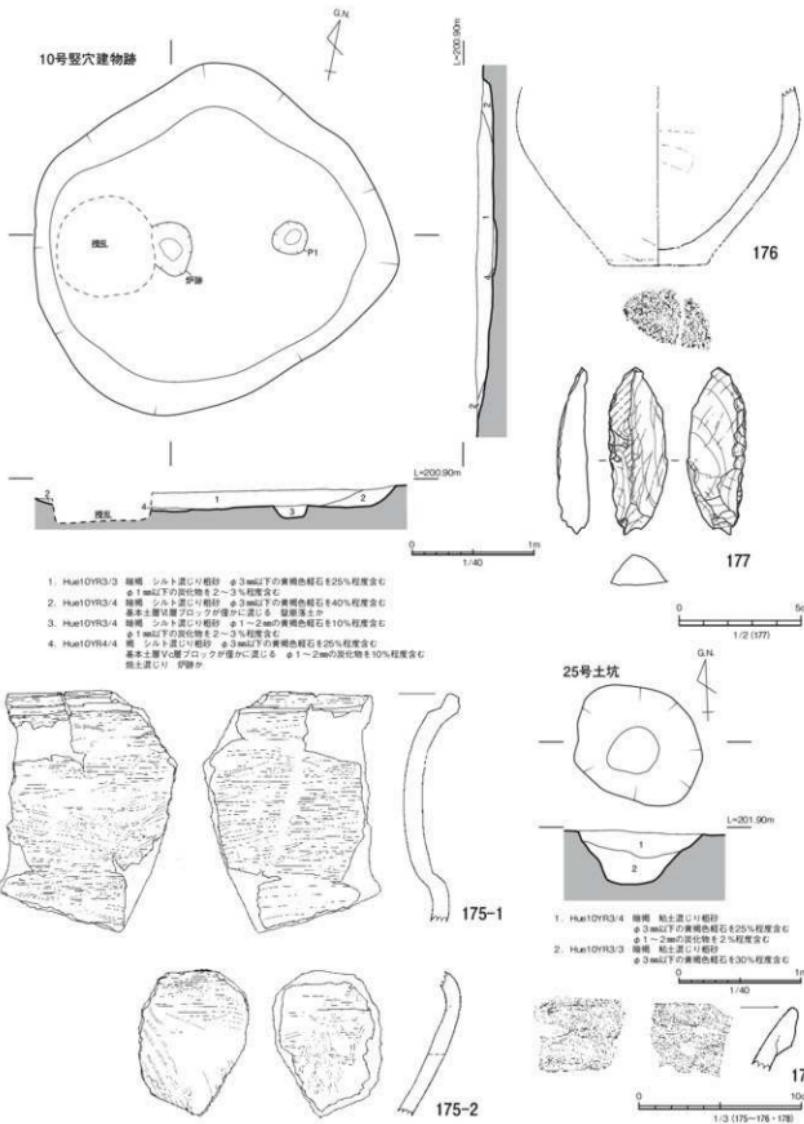
調査区西部のB66グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は不整な円形で、直径約1.3m、検出面からの深さは約0.6mである。断面形は逆台形で底面は平坦に掘削され、立ち上がりも急である。

土坑の底面では、東壁よりに2基の小穴が検出された。直径約0.22m、底面からの深さは約0.32mである。

埋土は、暗褐色で霧島御池軽石を5～25%程度含む粘土なしシルト混じりの粗砂で、底面近くの埋土中にはVc層がブロック状に混じる。遺物は出土していない。なお、東壁側の底面で検出された小穴は、逆茂木痕である可能性が考えられることから、43号土坑は陥し穴状遺構である可能性がある。

44号土坑（第48図）

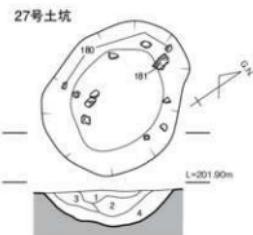
調査区東部のE66グリッドに位置し、Vc層上面で検出された。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.9m、短軸約0.8m、検出面からの深さは約0.25mである。断面形は逆台形状で、底面の南西側はさらに一段の掘り込みがある。遺物は出土していない。



第46図 10号竪穴建物跡, 25号土坑及び出土遺物実測図



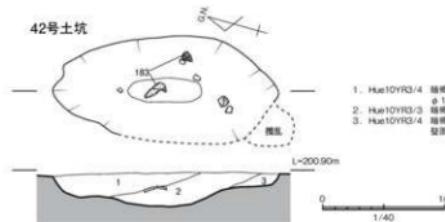
1. Hue10YR3/4 硫酸・粘土混じりの粗砂 φ 1m以下の黄褐色鉄石を25%程度含む
2. Hue10YR3/2 黄褐色・粘土混じりの粗砂 φ 1m以下の黄褐色鉄石を25%程度含む
φ 1~2mmの炭化物を7%程度含む やや粘性有り



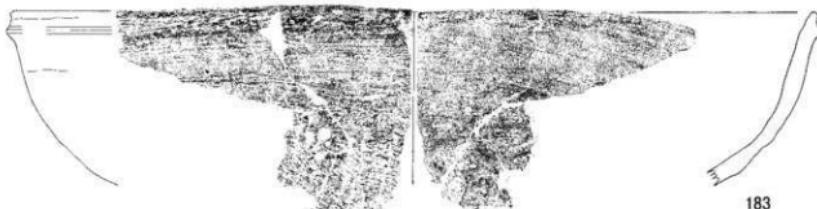
1. Hue10YR3/4 硫酸・粘土混じり粗砂 φ 1m以下の黄褐色鉄石を25%程度含む φ 1~2mmの炭化物を3%程度含む
2. Hue10YR3/3 黄褐色・粘土混じり粗砂 φ 1m以下の黄褐色鉄石を25%程度含む φ 1~2mmの炭化物を1%程度含む
3. Hue10YR4/6 黄褐色・粘土混じり粗砂 φ 1m以下の黄褐色鉄石を25%程度含む φ 1~2mmの炭化物を1%程度含む
4. Hue10YR5/6 黄褐色・粘土混じり粗砂 φ 1m以下の黄褐色鉄石を10%程度含む φ 1~2mmの炭化物を1%程度含む
基本土層に層間に断続する



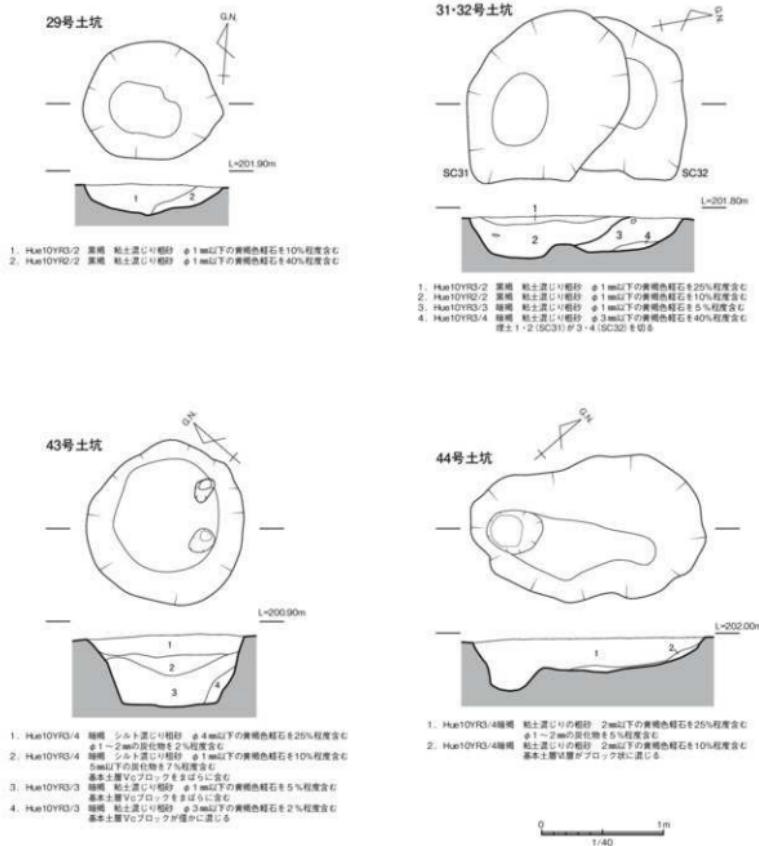
1. Hue10YR3/4 硫酸・粘土混じり粗砂 φ 5cm以下の黄褐色鉄石を15%程度含む
φ 1~2mmの炭化物を2%程度含む しまり有り
2. Hue10YR3/3 硫酸・粘土混じり粗砂 φ 2cm以下の黄褐色鉄石を5%程度含む
3. Hue10YR4/6 黄褐色・粘土混じり粗砂 基本土層VI層がブロック状に混じる
堅密な土塊



0 1m 10cm
1/40 1/3 (179~183)



第47図 45・27・42号土坑及び出土遺物実測図



第48図 29・31・32・43・44号土坑実測図

(2) 遺物

土器 (第49~55図184~245)

184~186は縄文時代後期に属する深鉢である。

184は口縁部が肥厚し、やや外反する。口縁部文様帯に2条の沈線、胴部に1条の細めの沈線が巡る。外面はミガキ調整でススが付着している。内面は横方向のナデ調整で、風化気味である。185は深鉢の胴部である。胴部の屈曲部上に2本の沈線が巡り、その間に横に連続する凹点文が施される。外・内面ともミガキで調整され、外面にススが付着している。184と類似する器形であると推定される。

186は口縁部から胴部で口縁部は短く、口縁部上部が押圧により僅かに窪んでいる。口縁部と胴部がほぼ直角に接合し、胴部は緩やかに張り出す。調整は、外・内面ともナデ調整である。本遺跡では類例がなく、位置付けに苦慮するが、出土付近の同じ層で縄文時代後期後葉の土器が出土しているため、その付近の時期であると推測している。

187~208は縄文時代晩期に属する深鉢である。

187は口縁部で、口縁部が肥厚し、断面が口縁端部に向けて細くなる形状を呈する。口唇部は平坦である。口縁部文様帯に2条の沈線文が巡る。外・内面とも横方向のナデにより調整がなされる。

188は口縁部が肥厚し、やや外反する。胴部は張り出し、胴部最大径のところで、明確な稜をなして屈曲する。その稜の上部に工具により削りだした段を形成し、一部に粘土を張り付けたリボン状の突起を有する。調整は外面が貝殻条痕後ナデ、内面がナデ調整である。胴部の張り出部の上位に工具痕が見られる。口径48.0cm。調査区中央に位置するD66グリッドで土器片が近い範囲より出土している。

189~196は口縁部が肥厚し、胴部の最大径の部位で稜をなさず鈍く屈曲する一群である。189は口縁部から胴部で口縁部がやや外反する。外面は口縁部がミガキ、頸部下がナデによって調整がなされ、顔料を塗布されているか否かは不明だが、赤橙色を呈する。内面は横方向のナデ調整である。口縁端部はススが付着しているような黒色を呈する。190は口縁部から胴部で口縁部が僅かに外反している。口縁部下に穿孔を有する。外・内面ともに横ナデにより調整がなされるが風化気味である。191は口縁部で口唇部に向けてやや尖る。波状口縁を呈する。調整は、外面が横方向のナデで内面が横方向のミガキである。外・内面にススが付着している。192は深鉢の口縁部から胴部である。口縁部は外反する。外・内面とも多方向のナデにより調整がなされる。口径19.2cm。193は口縁部断面形が三角形状を呈し僅かに外反している。調整は外・内面とも横ナデである。194はほぼ完形の個体で、口縁部が外反する。底部はやや上げ底で胴部に向かって僅かに内湾する。外面は口縁部が横方向のナデで胴部が多方向のミガキ、底部にかけて縱方向のミガキで調整され内面は丁寧なナデ調整である。調査区中央部のD66グリッドより検出された95号小穴より出土し、ほぼ完形の形に復元できた。口径57.3cm、胴部最大径55.8cm、底径8.95cmである。195は深鉢の口縁部から胴部で口縁部下に小さな段を有する。調整は外面がナデ、内面が横方向のナデ調整である。196は口縁部から胴部で、口縁下部が僅かに肥厚し、断面形は口唇部に向けて細くなる。外・内面ともにナデ調整である。

197は口縁部で口縁部が肥厚し、断面形が二等辺三角形状を呈する。外・内面とも横方向の丁寧なナデにより調整がなされ、外面にススが付着している。

198は口縁部から胴部である。口縁部は外反し、口縁下部に肥厚帯が退化したものと推測される断面三角形の僅かな高まりが巡る。胴部は逆「く」字形に屈曲し、その位置に粘土を貼り付けたリボン状の突起を付ける。外・内面とも粗いナデにより調整がなされススが付着している。

199は胴部である。胴部最大径のところで明瞭な稜をなして屈曲する。調整は外面が多方向の粗いナデ、内面が横方向のナデ調整である。

200は口縁部から胴部で、口縁部は断面形が口唇部に向けて細くなる。胴部は緩やかに張り出す。外面は工具によるナデ、内面はナデによる調整である。口縁部に穿孔を有する。口径24.0cm。

201は口縁部が外反し、頸部で「く」字形に屈曲する。外・内面ともに横方向のナデにより調整がなされる。外面にススが付着している。202は口縁部である。外面は条痕を施された後粗いナデにより調整される。内面はミガキ調整である。全体が明赤褐色を呈する。203は口縁部で口縁部が僅かに外反する。外・内面とも横方向のナデによる調整がなされる。口径27.6cm。

204は、接合はしなかったが図上で完形に復元できる個体である。口縁部が外反し、頸部で「く」字形に屈曲する。胴部は張り出し、胴部最大径のところで、明確な稜はなさず鈍く屈曲する。底部は平底で直立気味に立ち上がり、胴部に向けて緩やかに外反する。外面が口縁部のみ横方向のミガキで、胴部より下は横・斜方向のナデにより調整がなされる。内面は横方向のナデである。口径44.3cm底径8.2cm。

205は口縁部から頭部である。頭部から口縁部に向けて直線的に外反する。調整は外面が粗いナデ、内面が横方向の丁寧なナデ調整である。口径39.6cm。206は口縁部から頭部である。頸部が長く、口縁部にかけて僅かに外反する。外面には条痕が施され、内面は横方向のナデ調整である。207は口縁部で、口縁部に突帯状の粘土紐が1条巡る。外面は横方向のナデ調整で内面が条痕である。

208は胴部最大径のところで屈曲し、そこに刻目の突帯文を巡らせる。外・内面に横方向の条痕が施され、内面はその後ナデにより調整される。209は鉢である。胴部から底部にかけて組織痕が残り、ボウル状の底部であると推測される。調整は外・内面ともに横・斜方向のナデもしくは工具ナデである。

210～219は深鉢の底部である。いずれも平底である。210～214は胴部に向けて緩やかに内湾する。210は底部外面がナデ調整である。ただし風化が著しく調整不明の箇所もある。底径7.1cm。211は外面が丁寧なナデ調整がなされ、内面はナデ調整だが風化が著しい。内面にススが付着している。底径7.2cm。212は底部外面がナデで、風化が著しく調整不明な箇所もある。底径8.8cm。213は内面がナデで、風化が著しく不明な箇所も多い。内面にススが付着している。底径6.8cm。214は外面が横方向のナデにより調整される。底径9.0cm。

215～219は底部下部が外方向にやや張り出し、胴部に向けて内湾する。215は外・内面ともナデもしくは多方向のナデ調整である。底径9.0cm。216は外・内面ともナデもしくは多方向のナデ調整がなされる。底径9.8cm。217は外面が斜方向の工具ナデ、内面はナデ調整がなされる。218は僅かに上げ底の底部で、調整は外面が粗いナデ、内面がナデである。底径8.5cm。219は外面が横ナデで調整され、内面はナデ調整である。内面にススが付着している。底径9.95cm。

220は縄文時代後期の台付皿の波状口縁の波頂部に付く突起で、貝殻腹縁刺突文が施される。

221～242は縄文時代後期末～晩期の浅鉢である。概して胴部が薄くミガキ調整後黒色処理される。

221～223は、口縁部がやや肥厚し、口縁部文様帶に3条の沈線文が巡る。

224～227は口縁部がやや肥厚し、口縁部文様帶に2～3条の沈線文が巡り、その下部にも斜方向の沈線文が数条施される器形の一群である。224はそれぞれの沈線文の内部に赤色顔料が残る。

228・229は口縁部文様帶に6条の細めの沈線文を巡らせて区画し、上から1つ目と4つの目の区画部位に連点刺突文ないし連続した刻目を施す文様構成の一群である。228は器形の判明する個体である。

230・231は口縁部から頭部である。頸部が長く、内湾する。口縁部は立ち上がり外側に口縁部文様帶を形成し、そこに1条の沈線文が巡る。

232～235は口縁部内面に沈線等で明瞭な段を作り外面に区画沈線を施すことで口縁部端部に玉縁状の区画部位を形成する一群である。232は口縁部から頭部にかけて内湾する。234は頭部が短い。235は区画部位が小さく断面形が縦長の楕円形を呈する。

236～239は口縁下部内面に段を作出し、それにより低い台形・半円形の突出部を形成する器形の一群である。236・237は頸部が長く、238・239は頸部が短い器形である。237は波状口縁を呈する。

240は口縁部である。口縁下部がやや肥厚し、僅かに外反する。口唇部に極細の沈線が1条巡る。241は口縁部で外反する。242は頸部から胴部で、頸部が長く胴部は稜をなして張り出す。

243～245は円盤状土製品である。

石器（第56～60図246～314）

246～265は石鎚である。25点出土しうち20点を図化した。246～249は正三角形に近い平面形を呈するもので、基部にはアーチ状の浅い抉りを有する。なお、246～248は比較的大型だが、249のみ小型である。250～265は脚部と基部の外形線がW字状を呈するもので、側縁上部が屈折して五角形状の平面形を呈するもの（250～256）と屈折が不明瞭なもの（257～265）がみられる。また、250～253・257・260～263は短身で254・255・256・259は長身である。石鎚の石材には、ガラス質安山岩、チャート、黒曜石（腰岳産・三船産・桑ノ木津留産）がみられる。

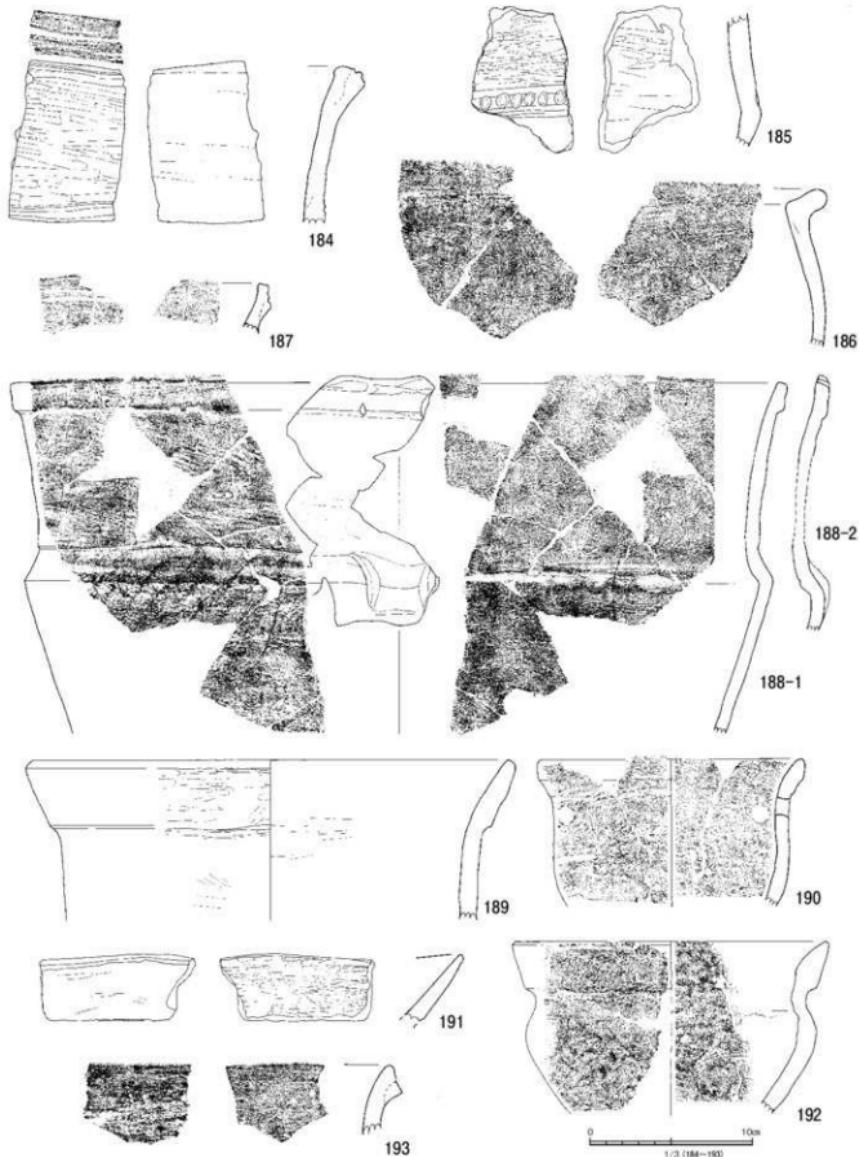
266は黒曜石（三船産）製の石匙で、幅広の縱型で先端が尖り、つまみ部分が一部欠損している。267はチャート製の楔形石器で、両側面の表裏面から調整が施されている。268はガラス質安山岩製の二次加工剥片で、片側の長側面中央付近に片面から調整が施されている。269は蛇紋岩または滑石製の管玉である。色調は黒褐色で、B区で出土した114同様に1cm大の筒状を呈する。

270～272は黒曜石（三船産・腰岳産）製の異形石器である。270は横広な逆三角形に近い形状で先端部が錐状に尖る。271は棒状で細長く断面形は上位が台形、下位は三角形状を呈し、上位と下位に小さくくびれる部分がみられる。このくびれの間の2側面には調整剥離により刃部が成形され、使用によるとみられるつぶれがみられる。272はL字状に渦曲した平面形で端部につまみのような突起が作りだされている。

273～285は石斧である。28点出土しうち13点を図化した。273～280は打製石斧で、273～277は撥型、278は長方形をした短冊形を呈する。273は刃部が円状を呈し基部の大半が欠損している。274は刃部に多くの使用痕と思われる擦痕があり、両側縁が基部から刃部にかけて緩やかに張り出す。275は片側縁が刃部付近より外側に突起する。276・277は基部から刃部にかけて張り出しが、刃部の一部が欠損している。278は幅4cm程度と細く棒状で基部の一部が欠損している。279・280は刃部が大きく欠損し基部のみで形態が特定できないが、279は欠損部付近がややくびれているため、撥型の可能性もある。281～285は磨製石斧である。281・282は扁平で撥型を呈し、284・285は断面が楕円形で頭部の細い乳棒状を呈する。284は基部から刃部付近にかけて多くの敲打痕が認められる。283は刃部と基部の裏側が大きく欠損しており形態を特定できない。石斧の石材はいずれもホルンフェルスである。

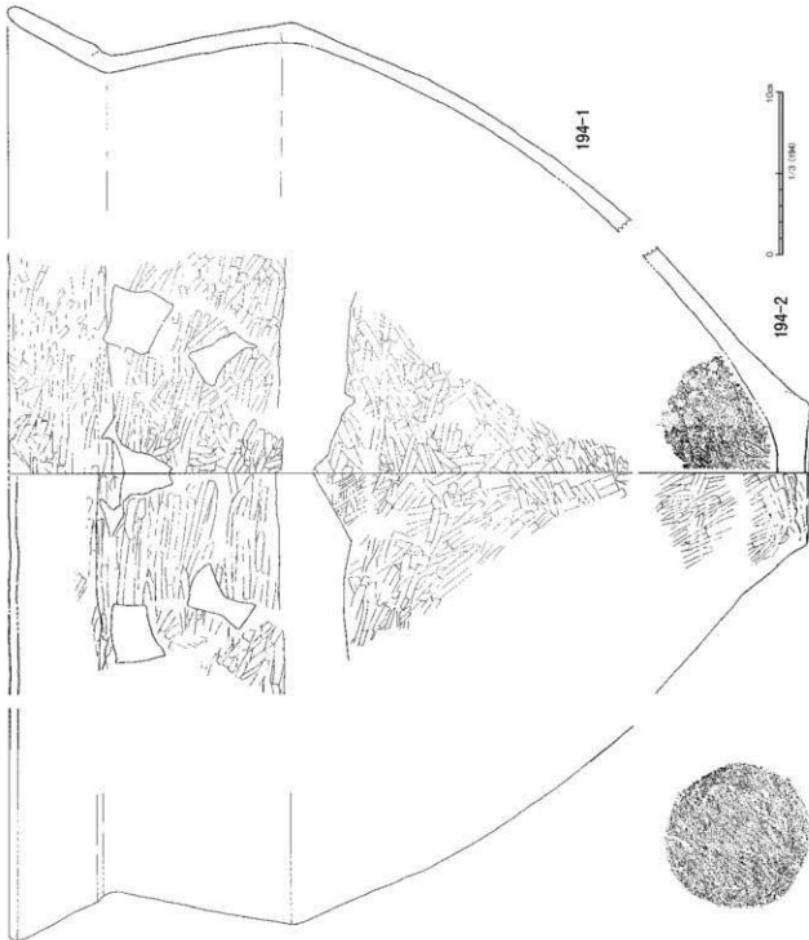
286は扁平で胴部上位の基部に近い部分が最大幅となり、基部の刃部に向かって細くなる笠かまぼこのような形状を呈する。石材はホルンフェルス製であり、刃部片刃で丁寧に研磨されているため整状の工具と考えられる。

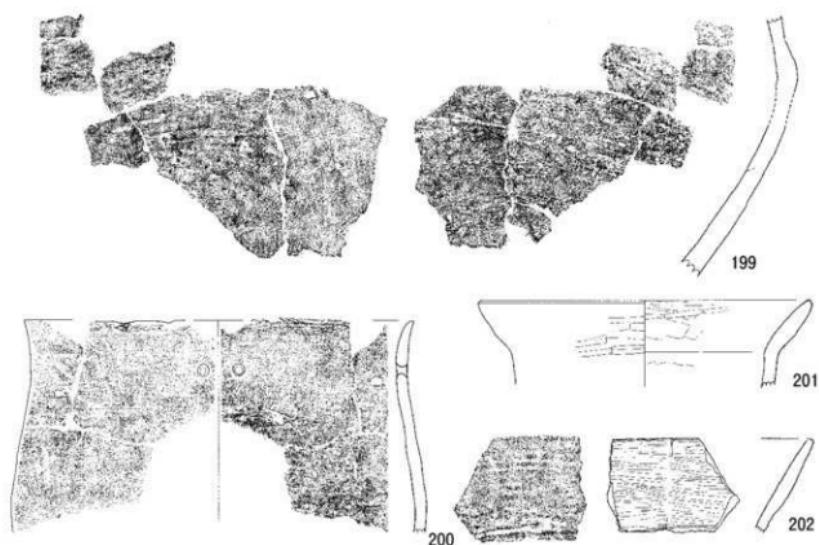
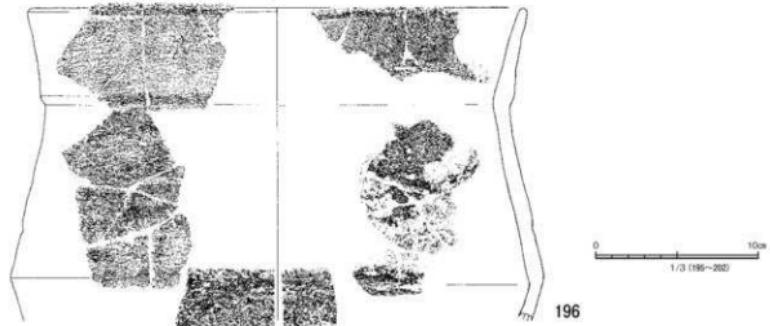
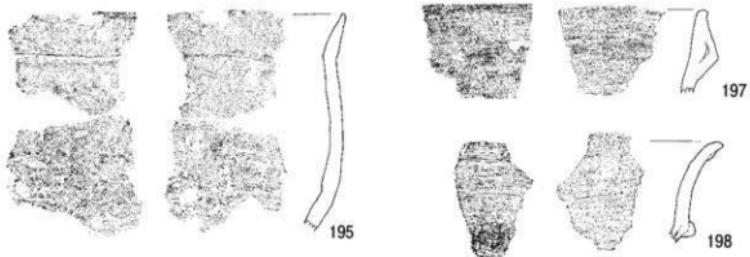
287～291は刃部形成等の二次加工が行われた二次加工剥片である。287は鋭利な縁部に連続した二次加工を施し刃部としている。288は打点側を背縁として調整し加工していない鋭利な縁部に使用痕が認められる。289～291は刃部調整と思われる粗い加工が施されており、石鎚もしくはスクレイパー等の未成品である可能性がある。石材にはガラス質安山岩、チャート、ホルンフェルスが使われている。



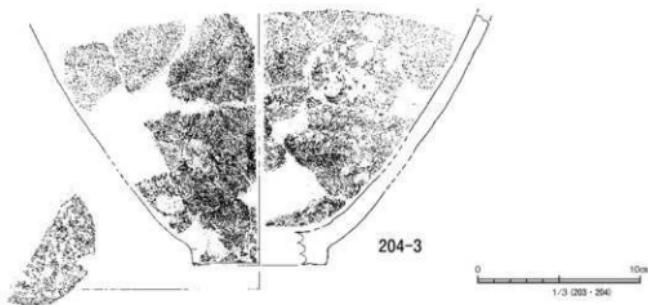
第49図 C区 繩文時代後期～晩期土器実測図（1）

第50図 C区 繩文時代後期～晩期土器実測図（2）

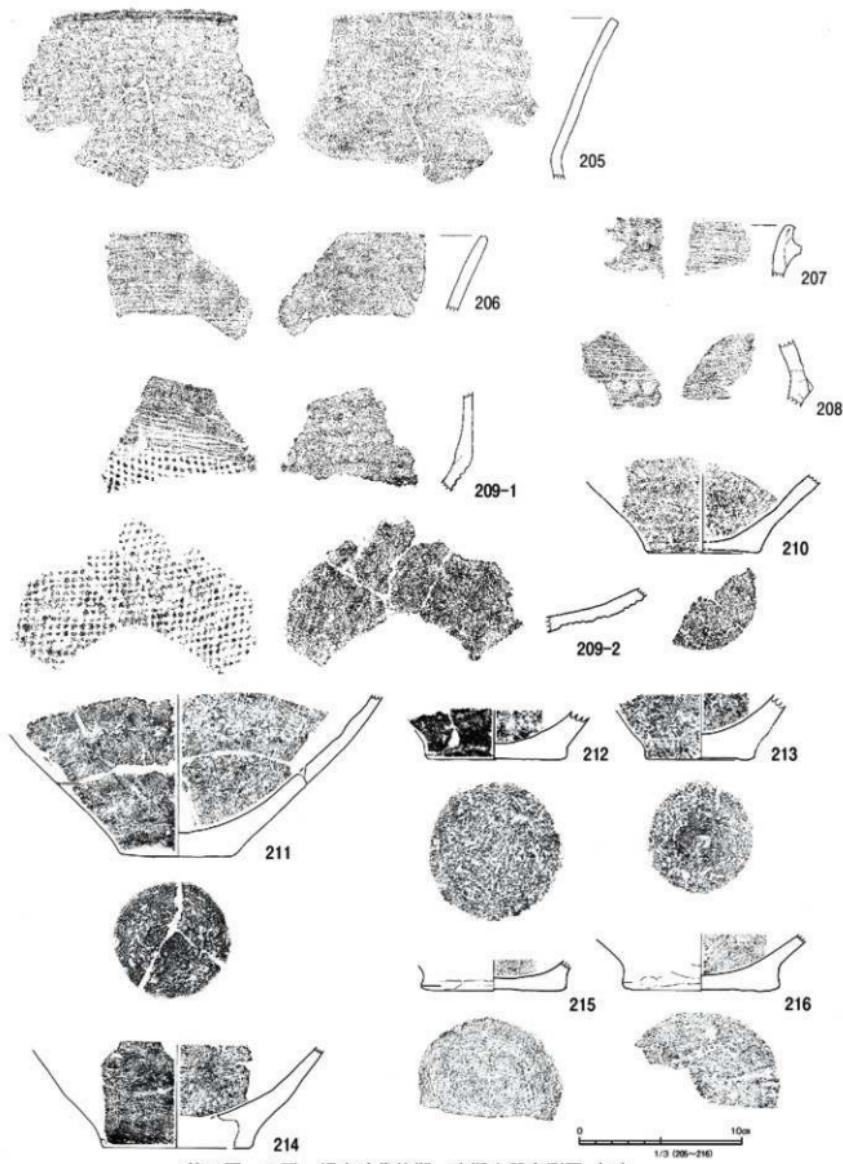




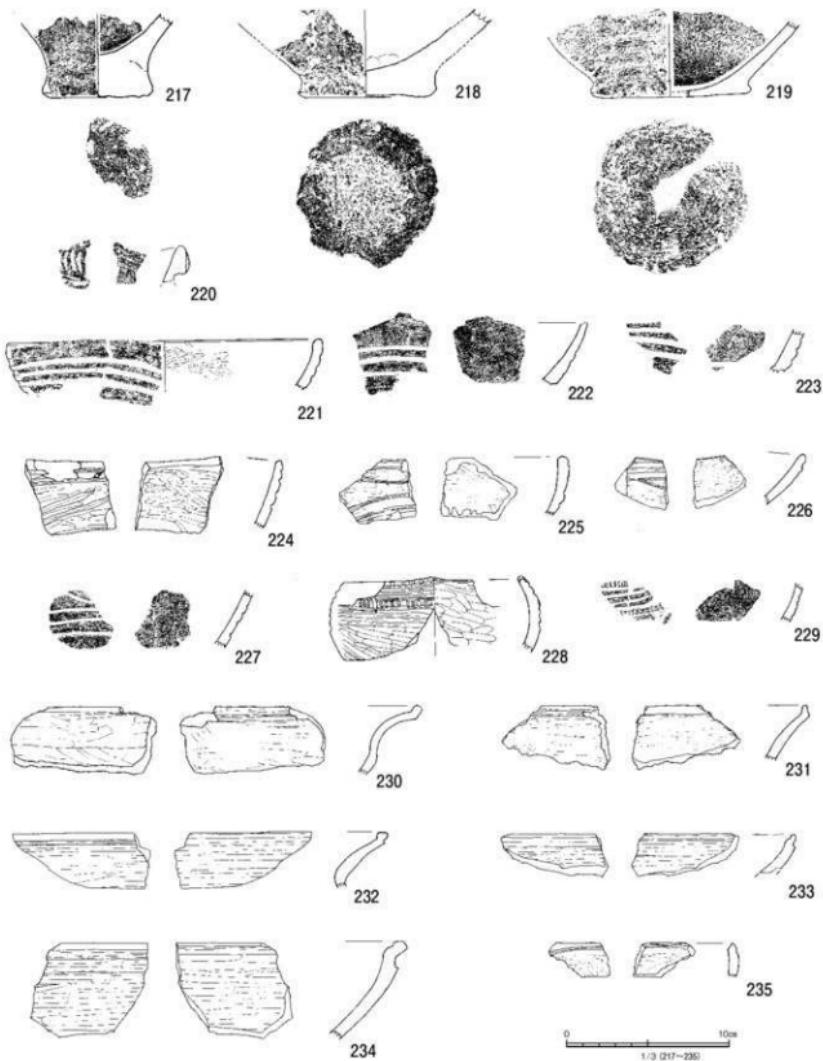
第51図 C区 縄文時代後期～晩期土器実測図（3）



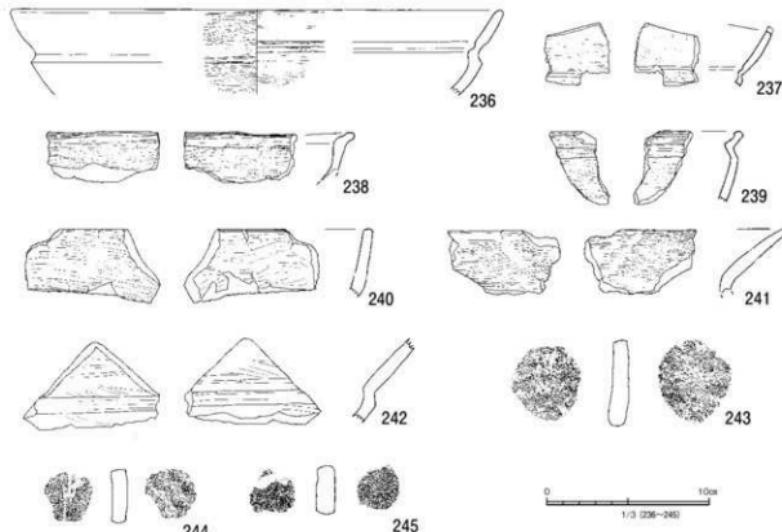
第52図 C区 繩文時代後期～晩期土器実測図（4）



第53図 C区 繩文時代後期～晩期土器実測図 (5)



第54図 C区 縄文時代後期～晩期土器実測図（6）



第55図 C区 縄文時代後期～晩期土器実測図（7）

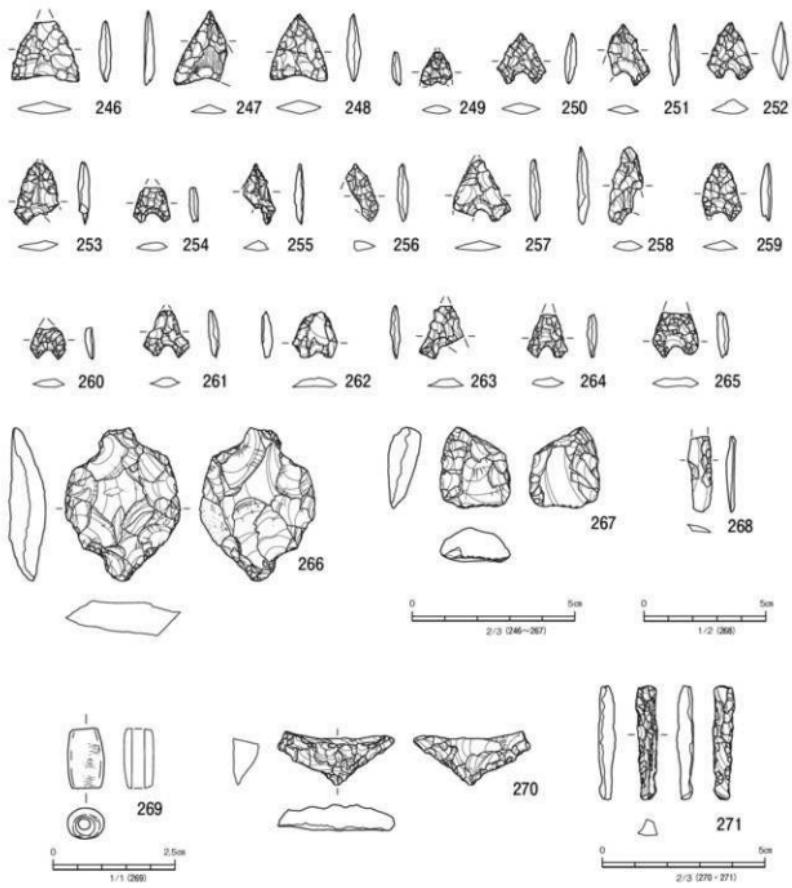
292～293は砾器である。292は扁平で片面から側縁かけて磨られている。側面には一部敲打痕が見られ、側縁の一辺には刃部調整と思われる加工が施されている。293は外・内面に一部磨面が認められ、側縁の一部に刃部調整と思われる加工が施されている。石材には頁岩と砂岩が使われている。

294～302は敲石である。34点出土しうち9点を図化した。294～296はやや扁平な球形で表面が一部磨られている。辺縁部には一箇所ないし二箇所の深い敲打痕がみられる。297は球形に近く表面全体にまばらな敲打痕がみられる。298・299は側面に一部磨痕が見られ、長軸端部に敲打痕がみられる。300～302は石斧を転用している。300・302は長軸端部に、301は両端部と表裏面の一部に敲打痕がみられる。石材は砂岩とホルンフェルスである。

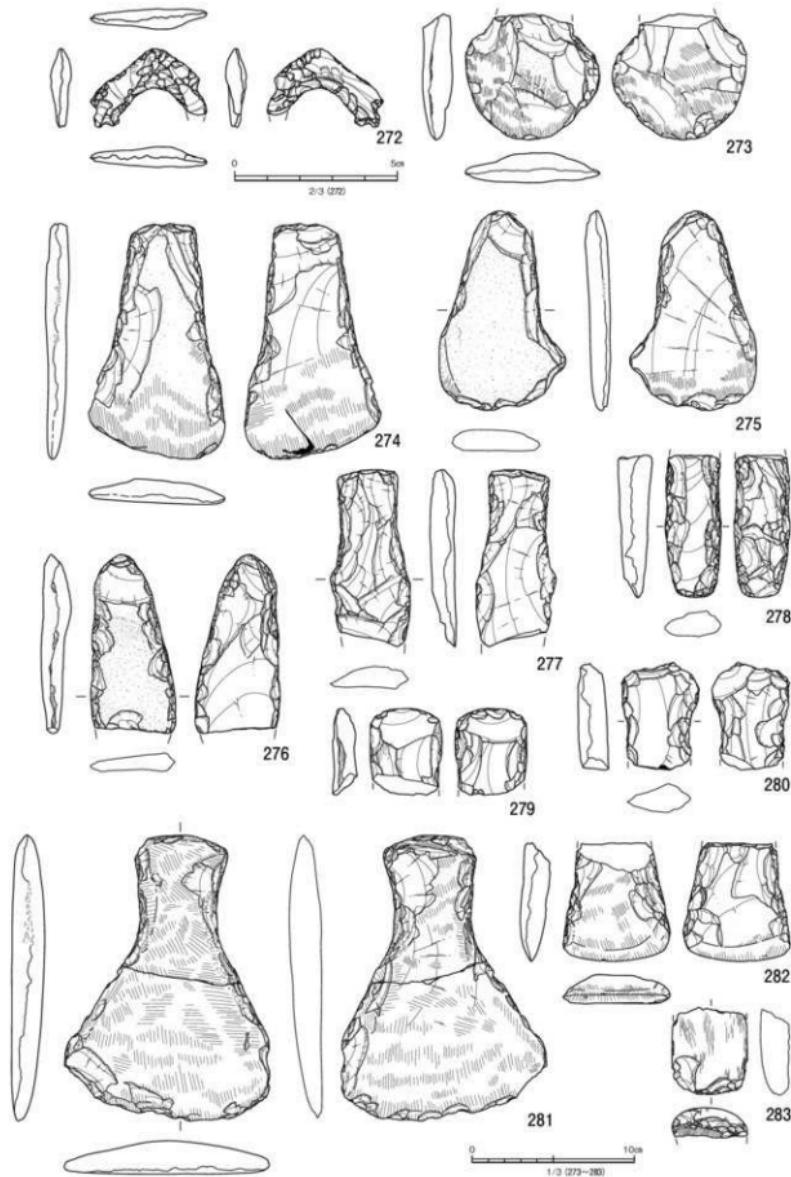
303～310磨敲石である。15点出土し、うち7点を図化した。303は梢円形で表裏面と両側面の一部が磨られ長軸両端部に敲打痕が見られる。304は扁平な円形で、一部被熱による赤化がみられる。表裏面が磨られ周縁に敲打痕が認められる。305は円形で表裏面が磨られ、表面に溝のような窪みを有し周縁に敲打痕が認められる。306～308は全面が磨られ側面の一部に敲打痕がみられる。いずれも一部欠損している。309・310は大きめの梢円形で、いずれも全面が磨られ309は長軸端部片方の一部に、310は長軸両端部に広く敲打痕が見られる。石材には、砂岩、安山岩、溶結凝灰岩が使われている。

311～314は砂岩製の砥石である。4点出土し全て図化した。311は表裏面、312～314は1面のみ研磨痕が見られ、314は砥面の中央付近に溝状の窪みがみられる。

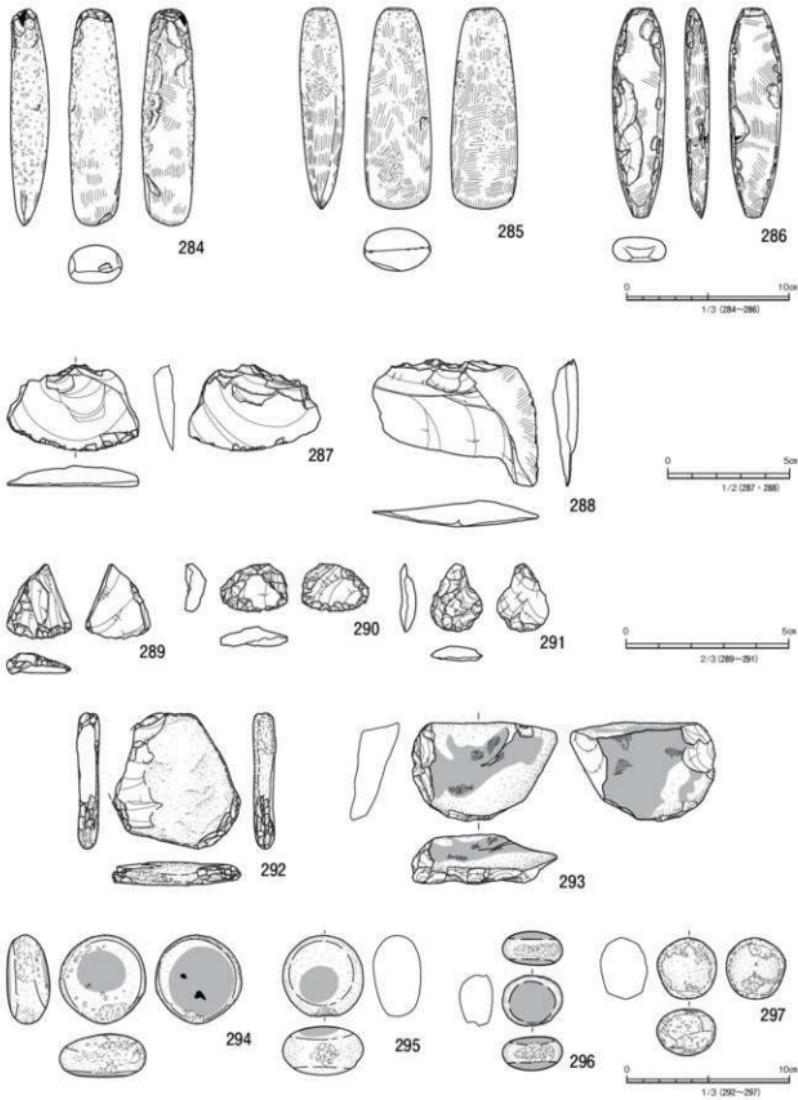
315は砂岩製の台石で、表面と側面の一部に研磨痕が認められる。



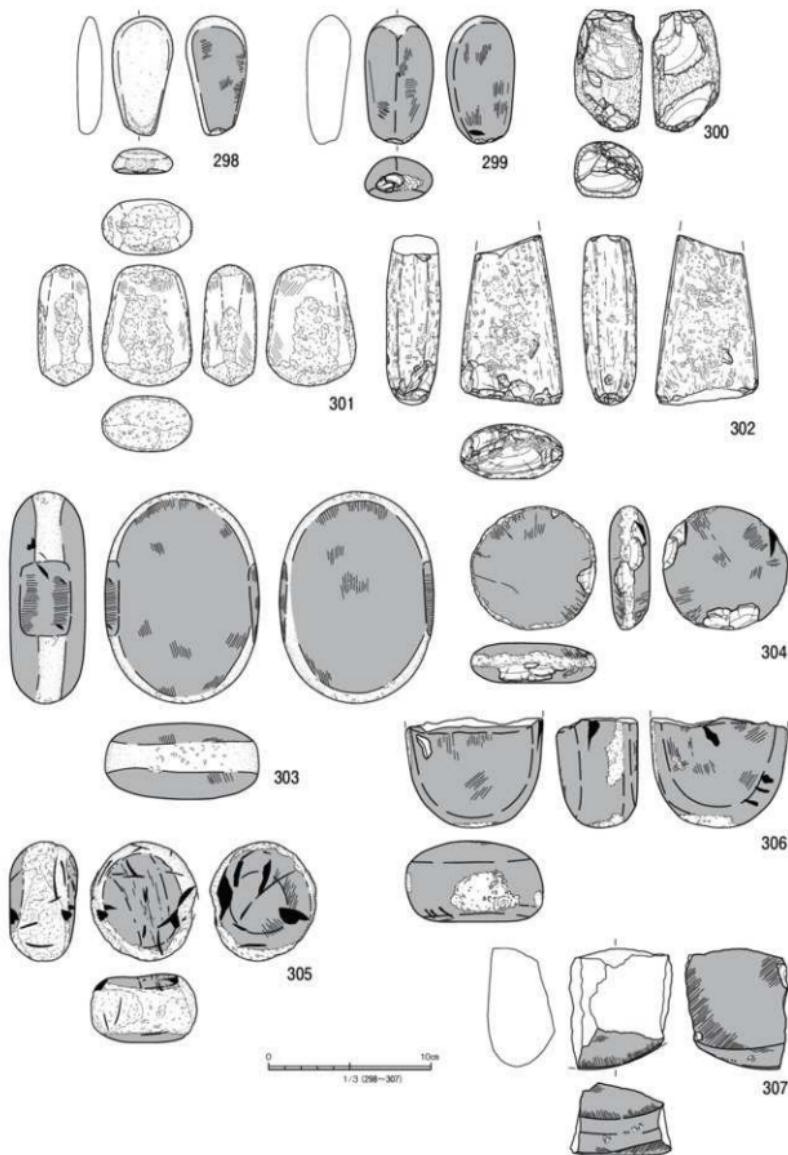
第56図 C区 繩文時代後期～晩期石器実測図（1）



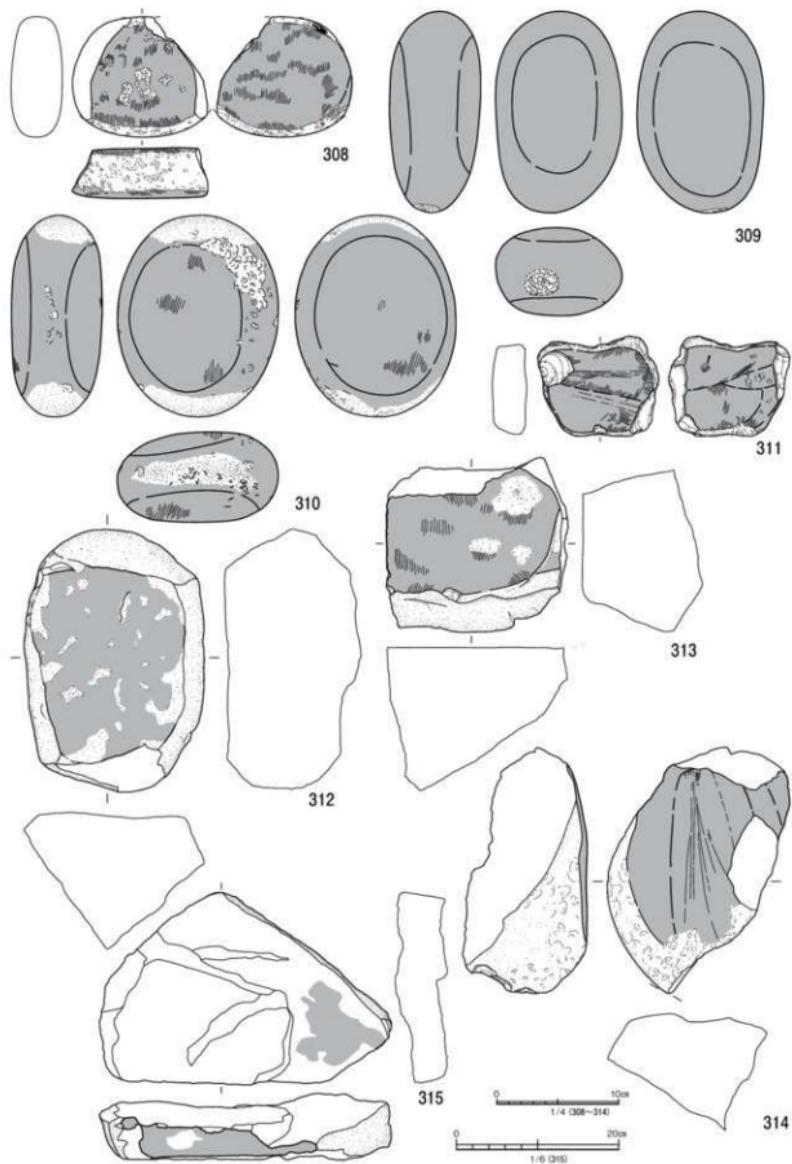
第57図 C区 繩文時代後期～晩期石器実測図（2）



第58図 C区 繩文時代後期～晩期石器実測図（3）



第59図 C区 繩文時代後期～晩期石器実測図（4）



第60図 C区 繩文時代後期～晩期石器実測図（5）

4 D区・E区の遺物

D区とE区では小穴以外の造構は検出されなかったため、出土した遺物のみを記載する。

(1) D区の遺物

遺物は、調査区北東部に位置する谷地形の落ち際より多く出土する傾向が認められた。

土器 (第63・64図316～327)

土器については既存の型式に沿ってまとめ、極力、編年の位置に基づいて前後関係を定めた。

316～327は縄文時代後期の深鉢である。

316は口縁部で、幅広の沈線が2条巡りその直上に貝殻腹縁刺突文が施される。

317～321は、深めの2条の沈線一組を単位とする縱・横・斜方向の直線的な文様を持つ一群で、沈線の端部は工具等で刺突して止める。317は口縁部から胴部で緩やかな波状口縁を呈しその波頂部に2点の押圧文を施す。319は胴部で、2条の浅めの沈線文で区画し、その中に刺突によって止まる沈線を短く施文する。321は口縁部から胴部で、口縁上部に貝殻腹縁刺突文を施し、その上下を横方向のナデにより磨り消す。胴部は、2条一組となる沈線文の間に貝殻腹縁刺突文が施される。

322は口縁部と頸部から胴部で、口縁部が外反し、胴部は丸みを帯びながら張り出す器形である。口縁部から胴部上部にかけて縄文を施した後、沈線文で区画し一部を磨り消す施文手法となる。口唇部にも縄文が施され、押圧ないし沈線で区画される。胴部下部は斜方向の条痕で調整される。

323は口縁部で、肥厚し上部に刻み目が施され波状口縁を呈するものと推測される。肥厚帯の断面形は二等辺三角形状で稜をなす。

324は口縁部で、やや肥厚し外反する。調整はナデである。

325は口縁部で外反し、外・内面ともに貝殻条痕文が施される。

326～327は口縁部が大きく肥厚し外面がミガキ調整される一群である。326は口縁部文様帶に2条の沈線文を巡らせ、その線上に凹点文が連続して施される。口縁部内側にも幅広の沈線が1条巡る。327は口縁部から胴部で、口縁部は外反し口唇部に向けて肥厚する。胴部は緩やかに張り出す。口縁部は工具ナデ、胴部はミガキにより器面調整される。

328は縄文時代後期の浅鉢の胴部である。胴部が薄く肩をもつように張り出す。ミガキ調整される。

石器 (第64図329～332)

329はガラス質安山岩製の石鎌である。鎌身部は長身で側縁上部が屈折して五角形状の平面形を呈する。330はホルンフェルス製のスクレイパーで下部に直線的な刃部を持つ。

331・332は石斧である。331はホルンフェルス製の打製石斧で、長方形の短冊形を呈し、基部が一部欠損している。332は安山岩製の磨製石斧で、断面が梢円形で頭部は細い乳棒状を呈し、表から側面にかけて敲打による調整が認められ、刃部が欠損している。

(2) E区の遺物

遺物は、調査区北西側にある谷地形に向かって多く出土する傾向が認められた。

土器 (第65図333～346)

333～338は深鉢である。333は口縁部が肥厚し、口縁端部に幅広の沈線が1条巡る。口縁部は全体的にナデ、頸部に向かう部分はミガキにより器面調整される。

334は口縁部でやや肥厚し、口縁端部に1条の細めの沈線が巡る。外・内面ともにナデ調整され、外面上にスグが付着する。

335は口縁部から胴部で、口縁部がやや肥厚し外反する。頸部は長めで、胴部は張り出し、胴部最大

径のところで鈍く屈曲する。外・内面ともにナデ調整がなされ、内面は一部ケズリにより調整される。外面にススが付着している。口径24.4cm。

336は頸部から胴部で、胴部が張り出し胴部最大径のところで鈍く屈曲する。ナデ調整がなされ、外面にススが付着する。335に近接した位置で出土しており、器形も類似することから同一個体である可能性がある。

337は胴部で、明確な棱をなして屈曲し、口縁部に向けて内湾する。

338は口縁部で口唇部にリボン状と推測される突起が付く。外面はナデ調整でススが付着し、内面はミガキにより調整される。

339～341は鉢である。

339は口縁部から底部付近でボウル状の器形と推測される。内面に黒斑がみられる。340は口縁部で肥厚する。341は口縁部で口唇部が僅かに外へ張り出す。全体的に風化が著しい。

342～345は浅鉢である。概して胴部が薄くミガキ調整後黒色処理される。

342は口縁部に逆「く」字形に内折する文様帶部位を形成する。外側に面を形成し、そこに浅い横方向の沈線文が1条巡る。

343・344は口縁部内面に沈線等で明瞭な段を作り外面に区画沈線を施すことで口縁部端部に玉縁状の区画部位を形成する。343は口縁から頸部にかけて内湾する。

345は口縁部内面に段を作り出し、低い台形・半円形の突出部を形成する。

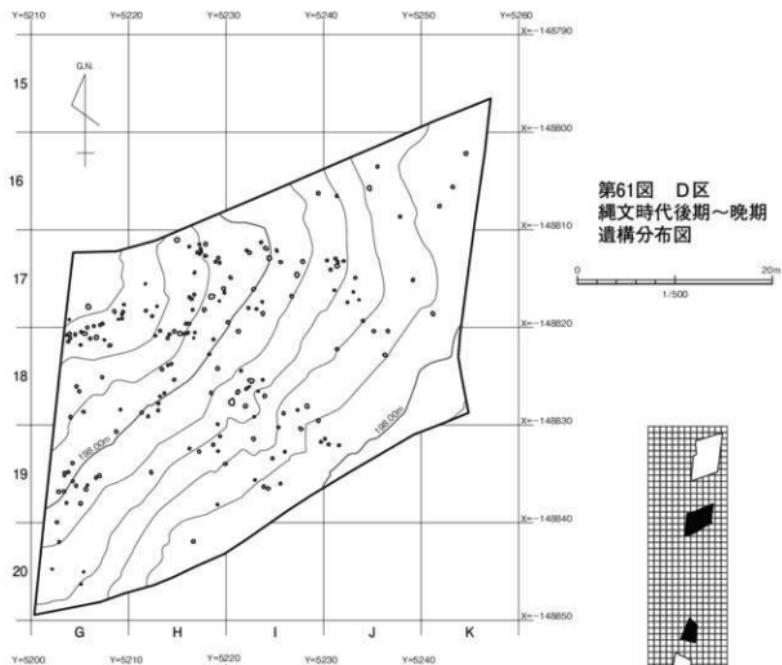
346は、円盤状土製品である。

石器（第65図347～349）

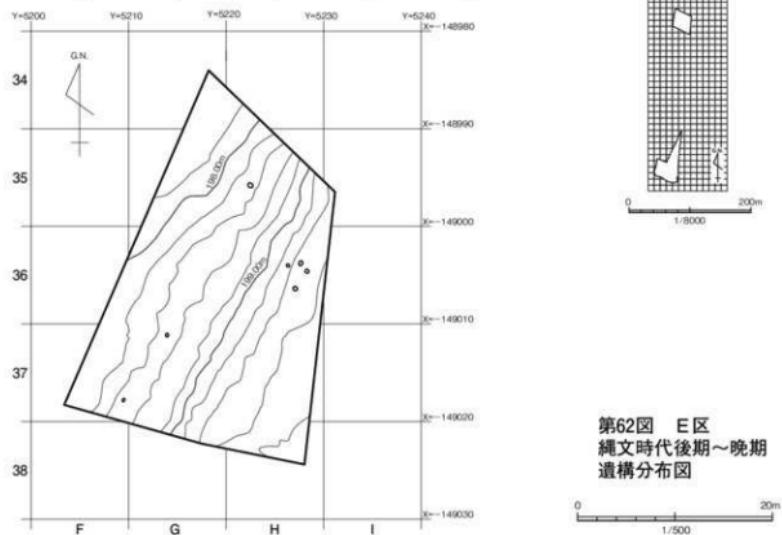
347はチャート製の石鏃で、二等辺三角形の形状で基部にアーチ状の浅い抉りがみられる。

348はホルンフェルス製の石匙である。やや幅広の長身縱型で先端が丸みを帯びる。

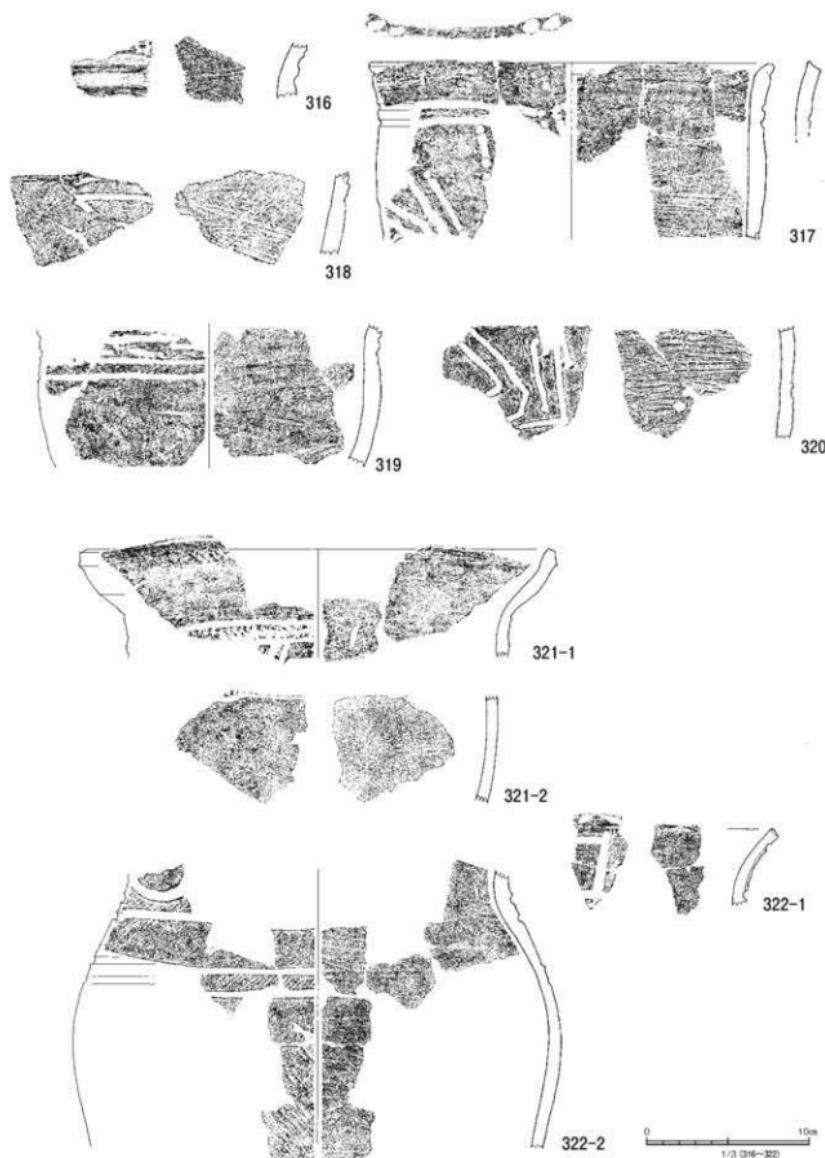
349はホルンフェルス製の磨製石斧である。比較的扁平な形状で基部が欠損している。



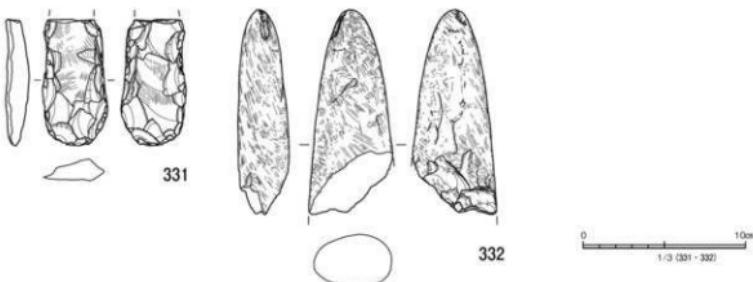
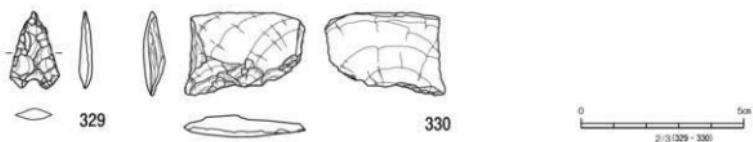
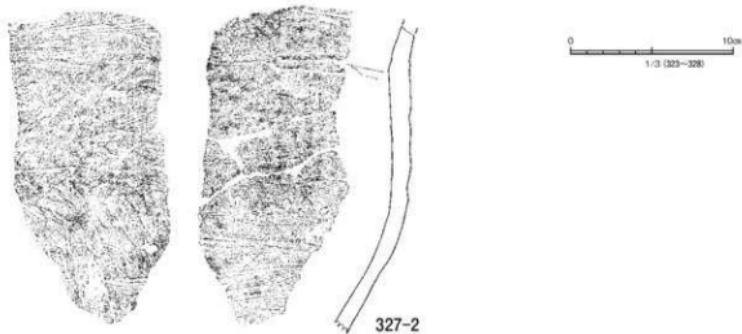
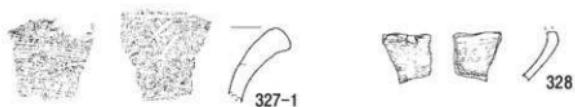
第61図 D区
縄文時代後期～晩期
遺構分布図



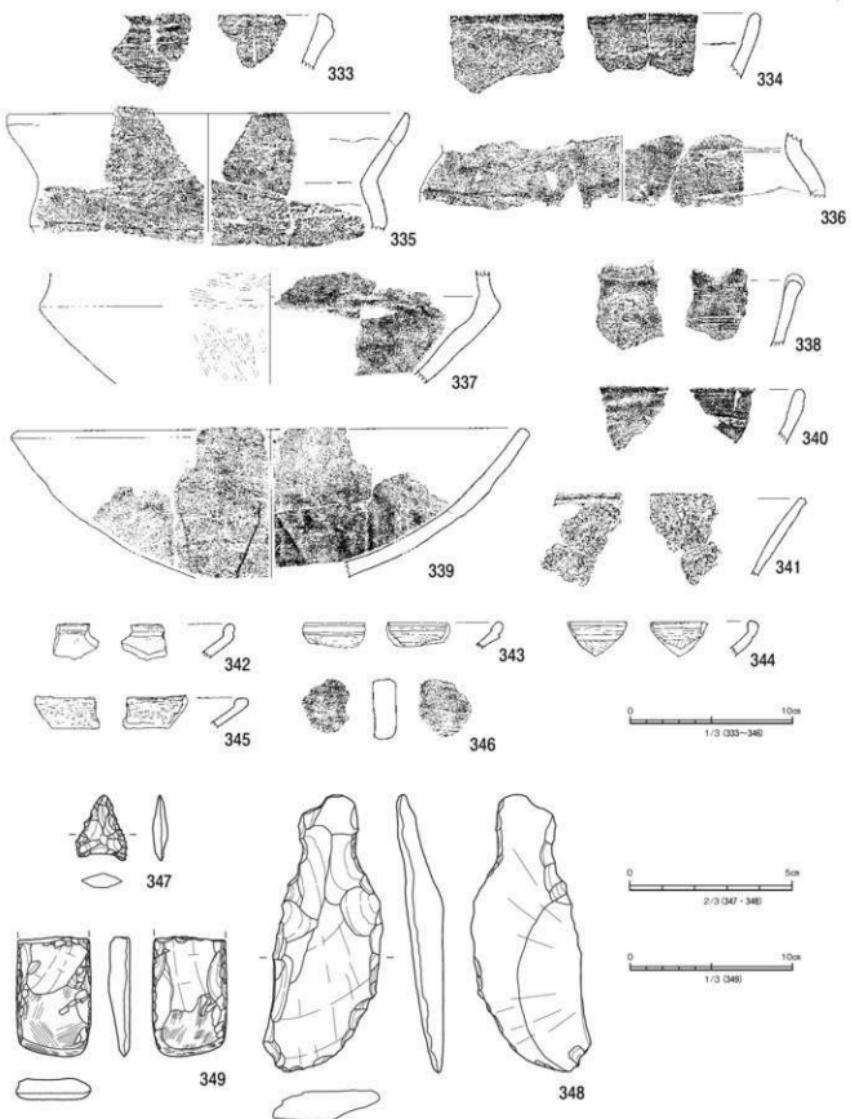
第62図 E区
縄文時代後期～晩期
遺構分布図



第63図 D区 繩文時代後期～晩期土器実測図 (1)



第64図 D区 繩文時代後期～晩期土器（2），石器実測図



第65図 E区 縄文時代後期～晩期土器及び石器実測図